
ss Story`s ~ Another World`s/Cross Greed`s ~

MUGEN KAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OOO Cross Storys \ Another World、s / Cross Greed、s \

【Nコード】

N9001X

【作者名】

MUGEN KAI

【あらすじ】

欲望が交わりし地、ミッドチルダ。

その者は・・・まだ、「繋がる手」を知らない。

死人達は・・・あるはずのない「明日」を求める。

虚像の住人達は・・・大いなる「存在」と明確な目的を持ち。

とある鬼は・・・大いなる悪を求める。

別世界の未来人は・・・歴史を創り出すため。

(無限)を超える思い、力、願いを持つ者を、人は言った・・・
を超える・・・^{オース}000、と。

欲望に従順に従う者を、人は言った・・・
Gre e (欲望)に囚われし者・・・^{グリード}Gre e dと。

^{オース}000の思いを持ちし者、欲望の使徒・・・^{グリード}可能性の世界から、それらが交わりし時、人は何を見るか。

この小説を読んでいただく前に、「純正なる正義の使徒 異世界・飛蝗の跳躍」「救える手”を求める欲望 異世界・恐竜の奔走」「悲しき救世主と欲望達 異世界・青年の終わりになき旅の続き」の続編となっているため、この短編群を読んでいただくことをお勧めします。

Next OOO Now Loading ~ Come ON! OOO

この小説は仮面ライダーオーズのIFENDの世界×魔法少女リリカルなのはStrikersのクロスオーバーのFF小説となっております。

基本一定量更新した後は一カ月〜二ヶ月に一回の更新となる・・・はず、だよな？自分？

この小説を読んでいただく前に、あらすじ欄で述べてある作品群の続編であるため、それらの購読をしていただくとありがたいです。

OOO これまでのダイジエスト!

800年前、欲望により作られしメダルの異形、グリード。

グリードにより作られし、ヤミー。

グリードの核となっているコアメダルを使いし者、オーズ。

人間とグリードによる欲望の戦い・・・それは、オーズの器である火野映司によって終結、映司は後ろ髪を引っ張られる感覚を覚えながらも、グリードらと一緒に、クスクシエの面々から姿をふつりと消した。

その裏で、ミッドチルダで起こった3つの出来事!

1つ!

一枚のセルメダルから復活したバッタヤミーは、とあるバスジャック事件から始まり、ミッドチルダの悪を、直感のままに懲悪していく!

2つ!

砕かれたはずの紫のメダルから生まれた紫のグリードは、とあるデパートの爆発事故に遭遇、自分の存在理由を探しながら、事故に巻き込まれた1人の少女はじめの多数の人々をグリードの力によって助けた!

3つ!

旅の途中、鴻上からミッドチルダの存在、そしてそこにある都市伝説を聞き、その真偽を確かめるため、火野映司ら一行、伊達明がミッドチルダに降り立った!

バッテリー、紫グリード、火野映司はじめグリード一行、伊達明、
そして機動六課。

異世界での交わりは、新たな物語へと!!

u b e N e x t C o m i n g O O O ! ! C a n y o
H E R O ?

この日、19歳のうら若き女性が、広い部屋で1人頭を悩ませている。

ここはミッドチルダの中心地から少し離れた、機動六課の隊舎。

さらに言うならば、この女性、八神はやてが1人頭を痛ませている場所は、部隊のトップが居座る機動六課部隊長室、言いたいことをまとめるならば、この妙に広い空間、映像に目をやりながら眉間にしわを寄せているこの人物、八神はやてが、ここ機動六課のトップに立つ人物であることを言いたい。

機動六課・・・約一カ月前に起こった、次元史に残る大規模な事件、J・S事件。

この事件の解決に大きな一役を買い、文字通り多大な活躍をし、ミッドチルダに大きく名売れた存在、それが、ここ古代遺物管理部の六課・・・機動六課である

ここの隊舎、実を言うならば、少し前まではただの瓦礫群であった。要因としては、もちろんそのJ・S事件における被害で、J・S事件の爪跡でもあった。

しかし、名が売れ、管理局本部も機動六課の働きに評価を示したためか、この部隊舎の修復が町の復興よりも優先されてしまい、こうして一カ月という短期間で元通りとなってしまうという現実がある。働きに評価していくれていることはありがたいが、町の復興より優先されていることを聞いたときは、大いに八神はやて他隊長陣一行が文句を言っていた、という閑話もある。

ともかく、この完璧なまでに修復された部隊舎の部隊長室で、はやては先ほどから大いに頭を悩ませていた。

J・S事件、という大仕事が片付き、その多大な事後処理も、だんだんと落ち着いてきたこの時期、本来ならばここまで苦悩することはないのであろう。

がしかし、彼女をはじめとした管理局の仕事は、あくまで「次元世界の平和と秩序を守ること」。

こういった仕事に関しては、平穏など約束されていないものである。実際問題として、ここ最近、特に2週間前から、ミッドチルダで異変が起きている実情があるのだから。

異変・・・それは、ミッドチルダで広まっている、とある都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によつて、無条件の救いの手を差し伸べる。」

ミッドチルダに突如現れた謎の異形、魔法生物の類でもなければ、魔法で変身した人間でもない。

まさに未確認、アンノウンが2週間前に出演したのだ。

これを聞いた人ならば、大抵多数の人は「ただの都市伝説」だとあしらうであらう。

だが、実際に目撃した人が多数おり、映像にも残されているのが現実であり、存在が証明されつつあるのが今の現状。

そう断言できる要因・・・それは、機動六課のFWMフォワードメンバーそれぞれが、その特徴にぴったりの異形と出会っているのだ。

まず緑の化け物・・・これは、ライトニング分隊のエリオとキャロが出会っている。

休暇、とある娯楽施設へと出発していた2人に、突如バスジャック

の魔の手が迫り、目的であるキャラコの誘拐遂行の寸前に、その異形が介入、その一味を退治した後に、異形はどこかへと逃げて行ったらしい。

その後、ミッドチルダの都市部を中心として、泥棒から始まり大規模な強盗まで、その異形が介入、解決していつている。

これを聞いて、誰かが思うであろうか・・・まるで「正義の味方」みたいだと。

実際、遭遇したエリオとキャラコも「まるでキャラコを助けに来たようであった」と発言しており、実を言うならば、その異形のとある口癖が確認されてあるのだ。

「悪い奴は・・・許さない。」

その行動、その言動、まさに地球のアニメや漫画でよく見る「ヒーロー」。

映像で確認されてある姿だけでは想像できないのだが、そういった実情がある以上、まさに「正義の味方」といっても過言ではないのか？とはやては疑問を抱いている。

もう一方、骸の異形・・・これは、スターズ分隊のスバル、ティアナ、プラスとしてスターズ分隊の隊長である高町なのはが保護している子供、ヴィヴィオが遭遇している。

こちらも、同日の休暇、とある新興企業のデパートにやってきた3人が、そのデパートの爆発事故に巻き込まれた時、その異形が介入、ヴィヴィオを2人の元に送り返し、それにとどまらず、大規模な氷結魔法によってデパートの火事を鎮火、多数の人々を救出した後に、管理局の到着を確認した刹那、その場を去って行ったらしい。

とはいったものの、実を言うならば、その異形が行った広範囲の氷結作業、魔法を使った、ということの確証がなく、謎の力によってのもの、と予想されている。

しかし、その規模、氷結の時間を考えるならば、魔力に換算する場合、少なくともAAA、下手をすればSオーバーはくだらないだろう、と予想されている。

その後、ミッドの郊外を中心として、事故や事件から人を守っている異形の姿が確認されている。

こちらは、正義の味方、というよりは、一般的に言われる救助隊員の働きに近い。

実際、事故や事件の現場から救出された人々、そしてスバル、テイアナ、ヴィヴィオは口をそろえて「ほんとに他の人のことを心配してそうで、声だけは、優しそうな男のものであった」と発言している。

この2人の異形によって、ここ最近の事故、事件による死亡者や負傷者が激減、犯罪者の検挙率が大幅アップ、管理局の仕事が大幅に激減している。

つまり、管理局の大多数の局員によって行っている仕事以上の仕事を、その異形2人だけで行っている現実があるのだ。

聞くだけでは大助かり、という印象を受けるであろう。

だが、その2人は異形、いくら善業を行っていても、こちらはその存在に対し、調査し、警戒しなければならぬ現実がある。

正直、異形によって助けられた人の発言を聞いているせいか、どうもその異形には悪いことをしている、という少々の罪悪感が拭えない。

だが、その異形の正体が、どこかの研究所が作った生体兵器などであつたら、ミッド全体が危険にさらされる可能性がある以上、そして、管理局としての仕事である以上、はやては隊を統括するものとして、非情に、毅然であるべきなのだ。

一旦異形に関してのデータ資料を見た後に、はやては新しい2つの画面を展開した。

まず、今日の異形の活動状況に関してのMAP。

異形が力を発揮したり、出現した場合には、その地点に詳細不明のエネルギー反応が感知されることを利用したものだ。

おかげで、あるい程度異形の活動状況、発生状況をつかむことはできたのだが、その地点に足を運んだ時には、とつくに異形の姿は無く、あるのは事件の犯人であつたり事故の現場から救出された人であつたりする。

今日も、ひったくり犯の2人が、足を凍らされて拘束されていることが起こり、現在、その2人から異形についての情報を聞き出している最中だ。

もうひとつは、その異形についてのもっとも身近な情報源の写真だ。3日前、異形の現れた現場に落ちていた、一枚の銀のメダル。

分析の結果、魔力でも科学的なものでもない謎のエネルギーの圧縮されたもの、という結果が出ており、現在メダルのさらなる分析を行っている。

「はぁ・・・、まだまだやることは山積みや・・・。」

少々元気がない、はやてのため息交じりのつぶやきが、広い部隊長室に少しばかり響いた。

同時刻、今の時間は一般的に言われるランチ、昼食の時間だ。

機動六課の食堂も、時間に反映して一層と人が多い様子で、たび重なるデスクワークに疲れを表した顔をしている者や、今日のランチはなににしようかと小難しそうな顔をする者など、十人十色の赴きだ。

その中に、これまたハードな実技訓練を終わらせ、いかにもな様子でやってきた4人、紛れもなく、FWメンバーの4人、スターズ分隊のスバルとティアナ、ライティング分隊のエリオとキャロだ。

この4人、特にスバルとエリオは、機動六課で一番の大喰らいで有名で、この2人にかかれれば10人前の料理がいとたやすくなくなってしまう。

今日も、こぼれそうな大皿に盛られた人外な量のミートスパゲッティを持ち、4人はもはや指定席となつたいつもの場所の、いつもの席順で座り、おもむろに食事を始める。

言葉だけ聞けば、これがいつもの光景なのだろう、と予測できるであろうが、ここ最近での変化が生じている。

それは、この4人プラスこの4人のそばに座り、オムライスをほおばっているヴィヴィオの中にある気持ちだ。

まず、エリオとキャラ、キャラの心の中では、ある後悔の念が渦巻いていた。

それは、「あの異形に、助けられてくれてありがとうと言えず、目の前で怖がってしまった」ということ。

キャラはとても純真で、何よりも優しい心の持ち主だ。

キャラの得意とする支援魔法は、その性格が具現化されたのごとく、FWメンバーに温かい守りと力を与えてくれており、その性格が竜の使役につながっているのかもしれない。

そんな心の持ち主である彼女にとっては、そのことにとっても後悔しているのだ。

自分が怖い大人たちに連れ去られようとしたとき、颯爽と現れた緑の異形、その異形は彼女を魔の手から守り抜き、バスにいるエリオまで丁寧に運んでくれた。

だが、それに相反し、先ほどまで置かれていた状況も相まってしまったためか、キャラはその姿、その力に、心の底から恐怖の念を覚えてしまったのだ。

助けてくれた恩人に対しての気持ちではないことは重々に承知、だからこそ今まで後悔し続けている今がある。

エリオも同じようなもので、自分が守れなかったキャラを、傷一つ

つげずに運んできてくれた相手に対し、槍型デバイスのストライダーを向け、完全に敵意を表してしまった自分に、あの行動は本当に正しかったのだろうか、自分にはほかにやるべきこと・・・感謝することがなぜできなかったのだ、と自問の螺旋状態となっているのが現状。

炎が迫り、瓦礫が落ちてきた状況で、体を張って助けてもらったヴィヴィオも、キャロとの心境が似ているであろうか。

彼女も、幼子らしい純粹さと優しさを持ち、なにより人の温かさを知っている人物。

あの骸の異形は、自分をまるでパパのごとく心配してくれて、さらにはあのデパートの人々全員すら助けてくれた。

しかし、あの異形が優しき異形だと分かったはずなのに、自分はその姿に悲鳴を上げそうになり、助けを請おうとすら思ってしまったのだ。

あのように、自分は数々の人々に助けられてきた、だからこそ、感謝の大切さも重々に知っている。

だが、あの異形にだけは、自分は感謝を伝えられず、拒絶の意を少しでもあらわにしてしまった。

姿が違うだけで判断するなど、自分の中では持つての他、だが、あの時、自分は外見の恐怖だけを感じ取り、視野を狭めてしまったことに、後悔が渦巻く一方なヴィヴィオであった。

スバルとティアナ、特にティアナに関しては、あの異形の力へと畏怖と、あの異形への疑問、あの時の異形の様子から感じる優しさを信じたい気持ちたちが混沌を形成している。

年長者であるために、自分達は冷静に状況を見なければいけない、それはあの異形にも同じだ。

しかし、あの異形の間人臭いしぐさ、言動、人間以上の人の安否への執着を見ていると、そんな疑念など吹き飛んでしまいそうだ。

しかし、あの6階建てのデパートを、一瞬にして凍らせてしまった

力、普通の魔導師以上の速度を持つ飛行能力、目撃証言から推測した怪力、それを考えると、どうしても異形としての畏怖、疑念が払えないのが現状、平和と秩序を守る管理局員としての判断であろうとティアナは考える。

スバルに言っただけでは、ティアナと同じ思考をしていながらも、どちらかと言えば異形に対して一定に信頼を持っている心境だ。

管理局員より速く現場に赴き、人をいち早く助ける様子は、自分の理想としているスタイルに準ずるもの、話によれば、一般的な魔力を持つ管理局員が行けないような場所に、必死に行こうとし、人を助けてたい一心でいる骸の異形や、事後処理に追われ、ガサ入れをできずに放置気味となっている犯罪組織の本部に、単独で突撃し、組織を壊滅させた緑の異形が確認されており、その雄姿は、スバルが考える管理局員のあるべき姿の鑑であるからだ。

若いがために迷うのは若い者の特権、それは、それだけ迷う時間を持てるころにあるからだ。

その食堂、4人のような気持を抱いている者はこの4人だけではない。

4人の少し離れた場所で、ゆっくりなペースでチャーハンを食べるヴィータ、その横でその体にとってはかなり大きいパンを、その小さな口でほおばっているリインフォース？も異形に遭遇したことがあるのだ。

質量兵器の取引が行われている、と通報を受けたのは4日前。

詳しい内容は、ミッドのとある港で、大量の質量兵器の取引が行われそうだとあるフリーの記者が通報し、それを詳しく調べようと、その取引日に、ヴィータ、リインフォース、シグナム、ザフィラといったヴォルケンリッターの前線メンバーが張り込みを決定した。

その夜、その情報が皮肉にも大ビンゴ、実際に、船に積まれた質量兵器らしき木箱を運搬している集団を見つけ、機を見計らったところで、4人による取り押さえを行った。

もちろんだ、といつているがごとく、その集団はデバイスと、質量兵器である拳銃やマシンガン武装し、4人に対抗した。

犯人の一味は50人前後、最初は20人前後かと思われた戦力であったが、一味は万が一のことも考え、用心棒集団を忍ばせてあったのだ。

用心棒、と言っているからには、それなりの実力があり、炎の変換資質を持つものや、魔力弾に長けているもの、剣に長けているもの、アームドデバイスを持つ格闘に長けているものなど、一者一葉な戦力であり、それのない実力、魔導師が苦手とする質量兵器を行使されたせいか、4人は苦戦を強いられた。

そして、その事態は、不足に起こってしまった。

仲間の1人であるラインが、不意を突かれユニゾンされる前に人質として拘束されてしまったのである。

ラインは、魔力はそれなりにあるものの、どちらかと言えば支援を得意とする融合騎、それゆえに不意を突かれれば拘束など簡単であった。

事前にユニゾンを行っていたら・・・とヴィーター一行は後悔しながらも、人質の存在によって攻撃ができず、防戦一方の不利な展開。

増援を頼む方法はないか、と3人が思考していた、その刹那であった。

ラインがバインドによって拘束され、一味のリーダー格の存在が拳銃を向ける中、不意に、拳銃を持つ手めがけて緑の電撃が走り、その電撃は拳銃を高熱によって破壊、その後たじろいでいる犯人をよそに、刹那、ラインに施されているバインドが破壊され、音速のごとく紫の影がラインを助け出したのである。

いきなりの襲撃に、一味は「管理局か！」と動揺するが、それらの行動を起こした犯人の姿を見た瞬間、一味と、それらと交戦してい

たヴィーター一行、助けられたリインは戦慄した。一体は、緑の装いを持ち、人型に緑の皮膚を植え付けたような姿、その姿は、ヴィーターが地球で見たバツタに似たものがあつた。もう一体は、頭は化石の骸、超速飛行によつてリインを助けた名残か、背中には大きく広げたしなやかな紫の翼、その装いはまさにバフオメツトの異形。

裏社会で一気に広まり、恐怖を知らしめた都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によつて、無条件の救いの手を差し伸べる。」

その都市伝説に伝えられている特徴にぴったりとあてはまるその姿、現場にいるもの達は理解する、そうか、これが都市伝説の存在だと。

「あの〜、この子の味方つて誰ですか？」

「・・・私達だ。」

そう返事したのはシグナム、といつても、友好関係を築こう、という雰囲気はなく、他の2人も臨戦態勢をその異形2人に向けている。一色即発、その異形の姿をみたものは、その行動には納得できるであらう。

だがしかし、外面だけで判断したことを、現場の人たちは知ることとなるのだ。

「この子、腕に怪我をしてるんで、治療してやってください。でも、無事でよかったです。」

「お前たちは逃げる。ここは俺達に任せてくれ。」

「・・・はあ？」

要約するならば、また誰かが怪我をする前に、ここから安全な場所まで言ってくれ、ということだ。

怪我を心配そうに見ている骸の異形、こいつらは任せてくれ、とためらいなく胸を張った緑の異形、その姿からは想像できない自分たちへの配慮に戸惑いを見せるヴィーター一行、しかし、判断の時間はないらしく、一味はその異形に一斉攻撃を仕掛けようとしている。

それに気がついた緑の異形は、リインを丁寧そうに持ち、その自慢の跳躍力でヴィーター一行に接近、警戒を続けている一行をよそに、任せたと一言残しヴィーターにリインを預け、また跳躍によって一味の布陣に突撃した。

その様に恐怖を覚えたためか、はたまた焦りか、一味は一斉に異形2人に攻撃を始めた。

・・・が、その対立は圧倒的であった。

飛び交う魔力弾、斬撃、炎、それに戸惑いや臆病を感じさせず、むしろ余裕すら感じさせる様子で、異形達は攻撃を跳ね除け、一味をなぎ倒していく。

ヴィーター一行がなにより驚いたのは、異形に質量兵器が効かないことであった。

奥の手として使用したマシンガンや拳銃、しかし、異形は被弾をしても動きを少々止めるだけで、まったくダメージとなっていない様子であったのだ。

緑の異形はその脚力と跳躍力を駆使し、格闘を主として一味を倒していく。

骸の異形は氷結の息と飛行能力によって、飛行によって攻撃をかわしつつ、氷結によって生成した氷の弾丸や、紫のエネルギー弾を一味に飛ばし、倒していく。

その様はまさに地球の時代劇のごとくばったばったと行われ、気がつけば5分足らずで一味は全滅していた。

しかし、ヴィーター一行の仕事はまだ終わっていないかった。

「そのこの2人！助けてくれたことには感謝する。しかし、あなた達には少々聞きたいことがある。・・・任意同行、で済ましたいのだが。」

とシグナムはデバイスを一旦下げ、こちらに交戦の意思はない、といった意思表示を行う。

といっても、デバイスを下げたのはシグナムだけで、万が一、ということでヴィーターとザフィーラは臨戦態勢でいるが。

だが、異形の返事は早かった。

「あー・・・そのー・・・ごめんなさい！」

「すまぬ。」

と異形2人が頭を下げると、骸の異形は翼を一気に広げ、周辺に強風を発生させる。

それで少しばかりシグナム一行がたじろいだ瞬間、異形の行動は早かった。

骸の異形が緑の異形を抱え、目にも止まらぬ速度で空へと飛び上がり、遠くへとその闇に姿を消してしまっていた。

その行動は一瞬、その様に、改めて異形の力を感じたヴィーター一行は、様々な疑問を持ちつつ帰還するのみであった。

その日の緊急会議、もちろん内容は密輸事件と異形の出現について。そして、ヴィーター一行から聞いた異形の特徴から、異形の識別コードネームが決定されたのである。

緑の異形・・・「アンノウン未確認1号」グリーン・ホッパーHopper」

骸の異形・・・「アンノウン未確認2号」パープル・スカルSkull」

それらの決定は、機動六課が本格的に未確認についての調査を行うことを証明するものでもあった。

C o u n t T h e S t o r y s 1

異変と出現と始動

2 (前書き

結論

バッタ& amp・紫マジヒロー

日の光が輝き、人の心をなにかに誘うような今日の日。

そんな日にはどこかにぎやかさを感じるもの、特にミッドチルダの都市部のような人の交通が多い場所であつたらなおさらだ。

しかし、太陽とは相反に、まったくの人の気配を感じさせない一帯、ビルは形をとどめているだけのモニメントと化し、まさに「捨てられた街」。

ここはミッドの北部に存在する、通称「廃棄都市」、正式名称「廃棄都市区画」。

この時期を考えると5年近くとなるであろうか、臨海第8空港で起きた大規模火災、ロストロギア「レリック」の存在が原因となり、すべての始まりの一端であつた事故。

その事件によつて問答無用に空港は閉鎖に追い込まれ、その近隣は余波によつて廃棄された。

ここは、その際に廃棄された一角、いわば事故の爪跡であり、改めてロストロギアの危険性が再確認された証明でもある場所なのだ。廃棄、という言葉は皮肉にも適切で、かすかに下水道機能が生きているだけの、ただの抜け殻。

人の出入りなどあるはずもなく、あるのは風の吹き抜ける音とその合間に強調される沈黙の一種である。

・・・だが、とある廃棄ビルの屋上に耳をよく傾け、澄ましてみると、不意と拳や蹴りが空を切り裂く音が聞こえるのだ。

声は無く、ただただ拳、足が空間を射抜き、時折にボディに強く打ちつけられる音も見受けられる。

音とテナポから予測して、おそらく格闘の練習などでもしているのであろうか、音の強さと刻みから、よほどの力と技量を見受けられる。

実力者ならば一目見てみたい、とバトルマニアの人物なら考えるであろうが・・・その音の正体、音を発している犯人の姿を見た瞬間、大部分の人物らは戦慄するであろう。

拳と蹴りを繰り返している人物、否、異形、その姿は骸を象るバフオメツト。

もう一方の異形、その拳と蹴りを受け身している姿、緑を基調とし、バツタを象る人型のなにか。

その姿は、緑の異形が、骸の異形に格闘を教えている最中なのだ。骸の異形がかなりの圧のかかった格闘の動作を繰り返すも、緑の異形はその跳躍力と脚力、基本的な筋力を駆使したフットワークで回避を繰り返していく。

時に緑の異形のボディに拳や蹴りが撃ちつけられる時がありながらも、基本的には大きいダメージはなく、これぐらいのものなら慣れている、といった様子だ。

その時間、一時悠久なものかと感じることもあったが、終わりの時は必ずやってくるものである。

お互いに距離を取りあい、これまたお互いに大きく一礼、これらが終わりの合図なのである。

異形らはお互いに向き合い、静かに傾き合つと、2人は外の景色に視線を預けながら、おもむろに今の状況、および進歩の度合について語り合った。

「この短期間でかなり進歩してきたな。」

「いやいや、やっぱり格闘に関してはあなたには・・・。」

「それはお互いの特性の違いがあるからだ。君には私よりも大きな力を持っている、すぐに私を追いぬくさ。」

そうして、緑の異形は静かにサムズアップ、骸の異形もそれに返し

た。

この2人の異形が邂逅したのは、1週間前、お互いにこの世界で生を受けてから1週間が経過した節目の時のことであった。

ミッドの郊外、そこにあるとある研究機関の発掘現場で、岩盤沈下による生き埋め事故が起こったのだ。

生き埋めにあつたものは12人、幸い死者はでなかったものの、そのまま1時間経過したならば12人全員窒息によって死亡する状況、さらに地形上唯の地上からの出入り口も余波によって塞がり、管理局の救援にも時間がかかる、まさに頭を悩ませる状況に置かれた、その時であった。

自慢の跳躍力によって地形をもろともせず、緑の異形がその助けを実行すべくやってきたのだ。

偶然近くにいたところに聞こえた轟音、それを聞いたとき、自分のなかにうごめいている正義の理念が、刹那の時も待たずに体を動かしていた。

この場所にやってきたからには、自分は人を助けるべきだ、と早速と生き埋めの人々を助けようと行動に移す・・・ところなのだが、異形は状況を冷静に分析していた。

この状況で考えられるプランは、自分の雷撃によって岩石群を粉碎すること、だが、少しの刺激で岩盤が再び沈下する、または決壊するのではないだろうか、という可能性が考えられたのだ。

しかし、自分は格闘に自身は少々持っているが、岩石群を粉碎するほどの脚力は無い、故に八方ふさがり、もはや手詰まりかと思われた、その時であった。

不意と、太陽光を一瞬にさえぎる空の影、大きな翼をはためかせ、かなりの速度でこちらに向かってきている。

その影は、背中に光を浴びながら、対照的に地面に接近してきたときはゆっくと、その翼を動かし、まわりに心地よいぐらいの風圧

を発生させ、その影はこの地に降り立った。

頭は骸を象り、背中にはしなやかな翼、体に見受けられる異形の様は合成獣、紫を基調とした様、そう、ミッドの裏で広まっているもう一つの都市伝説の存在、骸の異形だ。

お互いに近くにいたために、気配を感じた異形2人はその気配に目を配る、その時、お互いに強く感じたのだ、自分と同じような存在、同族に近いものだ、と。

人間から見ればとても人懐っこい性格をしている骸の異形は、その姿にまったく尻込みせず、初めまして、と軽く一礼。

それを見た緑の異形は、相手に戦いの意思はない、と悟ると、無言で軽く一礼を返す。

その刹那、お互いにこの場所にいる理由、お互いがなにを成すためにここにいるかを感じ、緑の異形が提案した。

それは、自分の雷撃で岩盤を壊したいのだが、決壊の可能性がゆがめない、なには解決策はないか、という質問に近いもの、骸の異形はその問いに頭を捻り、少々のシンキングタイムを取った後に、異形は思いついた。

善は急げ、と骸の異形は提案を述べる、それは、自分が周りの岩盤を、自分の氷結の力によつて固めて、できるだけ決壊は防ぐから、その間に岩盤を破壊してほしい、というもの。

緑の異形はその提案に文句は無く、納得の意を表すように大きくうなずくと、骸の異形も大きくうなずき返す。

お互いにこの日が初対面、どれだけの力量があるかもわからない、だが、自分達が同族だ、と直感で感じたときから、お互いに一定の信頼を置いたのかもしれない。

決断からの行動は早く、すぐさま骸の異形は力を解放、大きな咆哮を上げると、まわり一帯が氷の世界と化した。

その様になるまでは一瞬、その力量に、やはり間違っではないなかった、と緑の異形が心で納得、その後、時間を置くことなく緑の異形は生き埋めの要因となっている岩盤を雷撃と骸の異形によるエネルギー

ギ一弾によって破壊、その空間の先から12人の人達を視認した。

その後、緑の異形はその跳躍力で、骸の異形はその翼による安定した飛行によって、12人達を無事な場所まで送り届けると、一端、2人はその場から離れ、お互いに顔合わせを行った。

お互い、自分の直感、自分の中にある「欲望」によって動いている、いわば人助けを行っていること、自分はなんでこの世界に生きているのかが分からないこと、お互い今までなにをしてきたのか。

その話をしていく後に、お互いに同じような理念で動いていることに親近感を覚え、骸の異形が一緒に行動することを提案したのだ。

その提案には、緑の異形も賛成の意を露わにしていた。

緑の異形は、ここ最近自分の力に及ぶ限界を感じており、このままでは完全なる理念の遂行ができない、と危機感を覚えていた最中、実際に今回の件においても、おそらく骸の異形の協力がなければ遂行できなかったであろうから。

それを考えた緑の異形は、快く協力を容認、その瞬間から、ミッドチルダの都市伝説コンビが結成されたのだ。

なぜ緑の異形が格闘を教えていたかという点、共闘していくうちに、骸の異形が自分の格闘経験の無さに気づき、緑の異形にノウハウを軽く教えても立ったのがきっかけ。

その後、興味があるならば自分が教えられる範囲で教授しよう、という緑の異形の心遣いによって、廃棄都市に根城を置き、こうして毎日のように拳を打ちあっているのだ。

風が静かに吹き抜け、それに緑の異形はやすらぎをかすかに感じている、その時であった。

2人の聴覚、そして、自分の中にある感覚、人の感情、欲望の抑揚を感じ取ることでできる感覚が、不意と感情の高ぶりと欲望の増幅

を感じたのだ。

このパターンは覚えがある、おそらく、都市部のどこかで何かの事件が起こっている、感情の高ぶりと欲望の増幅は、その犯人のものである、と悟る。

異形らの決断は早く、お互いに大きくうなずき合い、これからの行動をお互いに認識する。

自分の中にある理念、唯にある欲望のために、異形2人は、緑の異形はビルとビルとの間を跳躍によって移動し、骸の異形は翼を大きく開き空を翔ける。

こうして、また1つの正義が為されていく、それがここミッドチルダの日々となりつつあるのだ。

ミッドチルダの科学は、地球とは違う方向性ながらも、一步先をいったものである。

発達した通信技術もその例で、地球ではカメラとカメラを通したテレビ電話、というものが存在するが、ミッドの通信端末、地球で言う携帯電話は、もはや画面を通して顔を合わす通信など当たり前で、地球以上にマルチタスクな面も見受けられる。

もちろん、純粋な地球人である火野映司と伊達明は、そんな高性能な科学に触れるのは初めてであり、鴻上から端末を渡された時は関心の声を上げていた。

そして今、その性能が発揮されることで、火野と伊達、そして火野に憑依しているグリード一行は、地球にいるとある人物と連絡を取り合っていた。

比較的スレンダーな体型、トレードマークのごとく定着してしまっただ黒い服と、左腕に指定席を置いている小ぶりな人形、通称「キヨちゃん」が画面に視線を向けており、それと比例するかのようになり、その人物もキヨちゃんに対し常に外さない視線を送っている。

画面を介して話すのであれば画面に視線を向ければいいのでは？と一般人は思うであろうが、これが彼、真木清人のスタイルであり、一番の特徴でもあり、正直、ネックでもある。

『どうでしょうか？グリード達、なにより、火野映司君自身の様子は。』

「こっちは基本変わりませんね。みんないい子ですよ。」

火野が定期的に連絡を取り合っていた唯の人物が真木で、それはお互いに体の状況を確認するためのものでもあり、居候の様子を確認する行動でもある。

彼、真木清人も紫のメダル保持者であり、常にグリード化の危険を背負っている、火野と同等の立場にいる唯の人物、また火野以上にデータの面でグリードについて詳しい人物でもある。

『グリード達はまだしも、一番危険なのはあなた自身ですよ、火野映司君。私が3枚保持しているのに対し、あなたは7枚、グリードの意思が宿ったコアメダル1、2枚でも抜ければすぐにグリードとなってしまうのですから。』

火野映司は、体内にコアメダルを持ちながらも、人間として居続けられている特殊な存在である。

大きな要因として、彼自身が欲望によってグリード化を抑えつけていることと、憑依しているグリード達がそれに加勢している。

グリードとは、本来欲望の暴走を満たすためにしか動けないものなのであるが、紫のメダルの特性である「無」によってその欲望が緩和され、そのメダルの副作用を抑えるためにグリードが憑依している、いわば火野とグリードの関係は、「持ちつ持たれつ」といった表現が適切なのだ。

しかし、グリード化という力を無理やり押さえつけているのが現状、引つ張り続けたゴムがその分力を発生させるように、負担をかけ続けたグリード化の波は、一旦解放されてしまったら、その抑え続けた時間分、一気に進行してしまうのだ。

真木が心配しているのはそれで、小さなきっかけ、一定の紫のコアメダルの力を使ってしまった場合もそれとなるので、火野は力をセーブしているの。

例として、ひったくり犯を拘束するときに、本来、メズールの水流がなくても、空気中の水分から氷結させることができる、しかしそれはメダルの力を行使してでの行動、力をむやみに使用した場合の危険を考え、映司はメズールの水流を使い、それに便乗するように軽い行使を行った。

そういった判断をしていくしかないほど、火野のグリード化の危険性が跳ねあがっており、真木は危険視しているのだ。

少しの談話を行った後、話は真木側の居候の話へと移った。

「そういえば、チエト君の様子はどうですか？」

『彼は相変わらずです。この前は研究室を半分荒らされて少々困りましたが・・・、話しますか？』

「はい、お願いします。」

火野が笑顔で返事をすると、真木は静かに目をつぶる。

その刹那、真木の左手が、一瞬にして異形の者へと変化したのだ。赤を基調として、どちらかと言えば美しい、というよりふてぶてしい印象を受けるそれは、アングの右手の写し身、それもそのはず、その正体はアングの他のタカメダルに宿った、もう一人のアングの人格なのであるから。

『映司だ、久しぶり。』

「うん、久しぶり。ほら、アंकもなんか言ったらどうだよ。」

「どうもまだ慣れないんだよ。俺の左手が勝手に話すのは。」

『アंकも、どう？元気だった？』

「・・・ふん。まつ、久しぶりにアイスを食べれたから機嫌はいいがなあ。」

800年前と現在、とあるきっかけで生まれたアंकのもう一つの人格、他のグリッドがいなく、真木のグリッド化を抑える人員を探した結果、そのもう一人のアंकに一任したのだ。

真木は3枚のメダルという、火野よりは比較的少ない負担で済むため、もう一人のアंक、チエト1人に任せ、ひとまず成功した、その後、博識で、知識量豊富な真木に感化され、アंक以上に賢くなっているのはここだけの話である。

しかし、右手だけの異形と、左手だけの異形が話す光景はなんともシュールで、伊達は「なんとも面白いねえ」と言いながらセルメダルの整理をしていた。

話はまた移り変わり、これからの予定について真木と火野は話していた。

地球での仕事に踏ん切りをつけ、ある程度の準備を済ました後に、ここミッドチルダに真木は住居を置けらしい。

『僕自身、科学者としてそちらの技術には興味がありますからね。

それに、君の体の検査や、バースの調整も行わなければいけないですし・・・。』

「お待ちしてます。チェト君も、また今度会おうな。その時はいっぱい遊んでやるから。」

『うん！楽しみにしてるよ、みんな。カザリも、またチェスをしようよ。』

「今度は負けないよ。こっちだって意地があるからね。」

再会の契りを軽く交わし、映司は通信を遮断した。

こうして、悪と正義が動く裏で、一時の平穩を噛みしめるものもある。

青年が守った平和、人、そして異形であるグリード。

「自分のやったことは、やっぱり間違ってたなかった……。」
こうして、楽しそうなグリードの姿を見ると、映司は心の底から自分の為したことへ誇りを持てるのだ。

……しかし、平穩も、永遠という言葉はない。

おもむろに昼食を食し、こちらの食文化に理解を深めていた火野と伊達、早速食後のアイスを要求してきたアंक他のグリード一行に、ゴリラカンドロイドの鳴き声が聞こえた。

このカンドロイドが知らせるのは、グリードやヤミーの出現……この世界での初仕事の報せであった。

火野映司の行動は早かった。

早速としてその出現場所へと全力疾走、伊達はその背中を見届けて行った。

なぜ、バース装着者である伊達明が現場に行かないかと言うと、それはドクター真木からのとある助言に関係あった。

「そちらの世界では銃火器といった質量兵器、というものを嫌悪しており、法律でもこの世界に入れることさえ禁止されています。それにはそちらの歴史に関係してくるのですが・・・そこは自分で調べてみるといいでしょう。」

「話を続けます。そういうこともあってか、普通の質量兵器以上の危険性を持っているBIRTHシステムの存在が管理局にはばれてしましますと、とても面倒なのですよ。火野映司君のグリードの力は、その世界ではまだ一種の魔法である、とごまかすことはできませんが、バースに関しましては見られた時点でアウト。ですから・・・バースを使うのはあくまで、それを使うしか打破できない状況下の時のみ、としてください。」

だが、火野映司がいたら大体の問題は解決できるでしょう、と追加の一言。
バースシステムが使えない、となったら、伊達は一介の人間でしかない。

彼もさまざまな修羅場を体験してきた身だが、魔法が使えるこの世界の人間と比べれば、ただの一般人と変わらないのだ。

ミッドの商店街、というよりは料理店が並んだ一種のグルメ通り、と言ったらしいのだろうか。

野菜を中心としたブイオンスープの香りから、思いつきりスパイスが効いている香りまで、その食欲をそそる匂いの様は一樣に違いがあり、それぞれの個性、それぞれのこだわりが窺い知れる。

そんな活気がにじみ出ている通りを全力疾走で走っている青年、火野映司も、約1年間多国籍料理の店にお世話になった、及びそこで働いていたためか、その匂いが鼻に着くたびに、「この匂いはあの料理かな？」とか「この匂いはなんだろうか？」などの思いや疑問、思い出が時として蘇る。

彼、火野映司は、コアメダル関連の出来事に巻き込まれる前は一介のしがたない旅人であったため、旅先の料理には触れる機会が多々あり、それと関連してくる各々の思い出がある。

しかし、一番印象深かったのは、居候先であり勤め先でもあった多国籍料理店「クスクシエ」の店主、知世子が、昼食の提供、いわばまかないで出してくれた料理であるような気がする。

理由として思い当たる節はある、旅先では、どうも火野自身、人と深いかかわりを持つことを避けていた傾向があったと、火野は感じていたのだ。

かといって、火野は内向的でコミュニケーションを作れないような性格ではなく、むしろその性格と人間性、なにより嘘はまったくつかない正直さもあるため、人とかかわりなどいくらかでも作れるはずなのだが、そこまでの深い人脈はなかった。

自分でもわからないが、火野は客観的に振り返ると、もしかすると人との関わりを作ること、その人と別れる悲しみを怖がっていたのでは？」と本人談。

旅人との出会いは一期一会、出会いの先には、自然の摂理として別れが待っている。

もちろん、旅人である火野は、出会いと別れに人並み以上に慣れて

いるはず、「別れ」に恐怖を抱くことなど、同業者からみればおかしいと思うかもしれない、だが、火野が言っている「別れ」とは、お互いにこやかな笑顔で手を振りあう別れではなく、おそらく「何かの不測の事態により、目の前で死なれてしまうこと」だと思われる。

高校生時代からの彼の夢、それは「世界中の子供たちが笑っている世界」。

言葉だけでも、なんとも純真で、眩しく、理想的で、難しいことが、誰もが知っているであろう。

そんな面を知っているからこそ、大多数の人々は「そうならいい」とは考えるも、結局は理想論、と見切り、人並で、手の届く平穩な生活を目指す、それもそれでとても幸せなことであり、持論ではあるが現実的でベストだと思われる。

だが、火野映司はその大多数のなかには含まれない、いわば「行動するもの」であった。

貧困国への、個人としては多額すぎる寄付金、支援物資、さらには自らの足で内紛地域に旅をすることもあった。

まさにその行動は人から評価されるもの、綺麗事を実行した青年は、実際にそのような評価を得て行った。

・・・だが、個人1人の力、体では、人と人との争い、というもはや人間の遺伝子に染みついた負の歴史を終わらせることなど、やはり叶わない夢であったことを、映司は知った。

その先に待っていた、自分の思いとは相反する現実、周囲、それが同時に降りかかり、理想と現実とのジエネレーションギャップによって、「今」の火野映司が完成されたのだ。

今の彼の唯の欲望でもあり、夢でもある願い・・・「すべてを救える手」。

誰にも理不尽な理由で死んでほしくない、傷ついてほしくない・・・そんな願い、そしてその願いを強くした過去があったからこそ、彼

はこのクラナガンの街を走っているのだ。

自分が半人間半グリードの異質な存在だからこそ感じれる、グリード、ヤミーの気配、その中心地に向かい、映司は駆けていた。

ここミッドチルダで確認されているグリードまたはヤミーは、話によれば「無償での人の救済」を行っている、いわばおそらくそれを「欲望」として動いている。

一見その事実は聞こえがよいかもしいれないが、火野曰く「行きすぎた正義は暴力」だ。

実際に、正義を欲望としたヤミー、バッタヤミーの歪んだ正義の行きつくところを知っているし、そうだったことが原因で争いを生んだ国や地域、小さな村をこの目で実際見てきたからなまじ理解してしまっている。

火野の知っている大多数のヤミーは、詰まる所人を傷つけてしまっている結果を出している、ある程度の認識や独自の理解を持っているグリードと違い、ヤミーは単一として欲望の感情しか持っていないため、悲しくても「その存在を倒す」ことしか選択肢はない。

欲望に吞まれ暴走した結果そうするしか道は無い、純粋に欲望を追い求めていたものは殺すしかない、それは文面的に酷ではある、だからこそ映司の気持ちには焦燥感が積もっているのだ。

映司のグリードの一片としての感覚が、目的地への接近、到着を知らせる。

それと同時に、映司はある多次元料理の店の近くへと到着した。店のニュアンスからして、おそらくクスクシエと同じような類の見せであろう、近くに来たならば名のごとく様々な香りが楽しめる、と予想できるのだが……。

そんな食欲を増長させる類の匂いなど皆無で、あるのはさきほどまで緊迫、否、依然として、いやそれ以上に緊迫している雰囲気を感じている店内の様子と、年相応とはいえないボロボロと涙を流し、

助けを請う、足と腕を凍らされた男の集団5人、そして・・・その様子を見ながら、いや、監視しながら仁王立ちしている緑の異形・・・あの姿は周知している、自分が都市伝説を聞いて最初に思い出したヤミー、バツタヤミーと、先ほどまでの状況のためか、以前恐怖に震えている店の客一同、いや、おそらく恐怖の理由はほかにある・・・頭は骸、紫を基調としたボディ、合成獣の面を垣間見せられる混沌、なにより映司、否、映司達が驚いたのは・・・その姿は、まさに映司自身がグリード化した時の姿と瓜二つであったのだ。その映司グリードもどきは、その恐怖を覚える姿とはまったく相反して、覚えている客一同に「もう大丈夫ですよ。怪我は無いですが」などと心配している、が、それはまったく一同の耳に聞こえていない様子で、むしろ声をかけられるたびに理不尽な恐怖を覚えられてしまっている。

その姿、その動作、そしてその優しそうな青年のようなグリードの声を聞いた、映司に憑依しているグリード一行は、口をそろえてこう述べた。

「あれ、映司じゃねえか。」

「映司、映司がもうひとり。」

「僕の耳と目が正しければ、あれは映司だね。」

「ああ、あなた、グリードの双子でもいたの？」

「あきらかに映司だな。俺の目と耳と虫の報せてきな感覚がそういつている、絶対に正しい。」

「・・・俺って、はたからみればあんな感じなの？てかメズールさんのコメントおかしいでしょ？」

緊張感はどこへいつてしまったのか、その姿似つかわしくないグリードの様子に、異形慣れしている面々はおもむろにコメントを出しあっていた。

その様子と気配に気づいたのか、謎のグリードとバツタヤミーが、同時のタイミングでこちらに視線を向けていた。

だが、それを見た2人の異形も大層に驚いた様子らしく、時折頭をかきながらとまどいの嗚咽を発していた、そんなところを見ると、正直人よりも人間臭い、と感じたのは映司一行。

「・・・あれ？その気配、俺がもう一人？」

「・・・見た目的に、おそらく紫のグリード・・・だよな？でも・・・」

『どうみても映司が2人です（だよ）』

「・・・面妖な。気配を複数感じる。」

まったく同じような反応をした紫のグリード、それにやっと「自分の写し身みたいだ」と自覚する映司、それにまったくの同意を見せるグリード一行、それに比較的冷静、というよりハードボイルドに一言を放ったバツタヤミー・・・姿以外はシリラス生分皆無な様、だが傍から見れば2人の異形に見つけられ、いまにも襲われそうな人間に見えてしまう、実際、恐怖におびえ聞き耳たてずの客一同にとっては、お互いの正体を探り合いながら殺気を放っている光景、理解と誤解は紙一重、とよく言ったものだ。

だが、そんな現状を完全に理解しているわけもなく、異形2人と映司一行の間には、驚きと困惑、なにより「疑問」という2文字が大きく渦巻いている。

しかし、悠久な時などの生き物でも嫌うようで、その状況を打破しようとして口を開いたのは、何を隠そう明確な目的があつてここにきた映司だ。

「……ところでそちらは、今まで行った何を？」

「え……あ、ああ！いや、この店が強盗にあつて、て知つて、それで早速捕まえたところなんですよ。」

「……そういうことだ。」

と、バッタヤミーが示すのは、カツチカチに容赦なく凍らされた手足の持ち主である犯人集団。

それを見た映司一行、特にバッタヤミーについてよく知っている映司とアंक、そしてウヴァは見解の相違にさらなる疑問を生み出すしかなかった。

バッタヤミー、そしてそこにいる映司もどきグリードの目的、つまり欲望は、予測するに「正義を為すこと」「これに関してはバッタヤミーは変わらない。」

だがしかし、映司の知るバッタヤミーと、目の前にいる犯人集団ににらみを利かせているバッタヤミーとは、内面的なところで相違があるのだ。

バッタヤミー……人一倍正義感が強い男、神林進の欲望によって生まれた昆虫系のヤミーで、その欲望は「正義感」。

しかし、欲望に囚われしものに理性というものなどなく、行きすぎた懲悪、正義によって「暴力」しか生み出せなかった。

そんな行きすぎた正義との相違……それは、明らかに目の前のバッタヤミーからは「独立した人格、理念」を感じるからだ。

あのバッタヤミーは、映司の知る限りでは、まるでうわごとかのように、悪への憎悪を述べているだけの、映司いわく「人形」、だが

目の前のバッタヤミーからは、憑依しているグリード一行のような人間で言う「自覚」、「理性」、そして「個性」を感じる・・・詰まる所、映司の知っているヤミーの立ち振る舞いではない。さらに、目の前にいる映司そっくりのグリードらしき異形、映司一行は、これが自分の追い求めていた存在だと勘付いたが、正直疑問が倍増し、この異形2人に聞きたいことは多々ある。欲望のままに行動するヤミーとは違い、この異形らには話を通じる理性があるため、もう少しコンタクトはとれないだろうか・・・そんなことを模索していた時、その刹那であった。

【Sonic Move】

外からかすかに聞こえる無機質な男の声の電子音声、それとの刹那、その同時のタイミングに、映司と異形らとの間を陣取るかのように、金色の閃光、それに追尾するかのように鳴り響く空を切る音。その閃光の速度が想像異常なためか、空を切る音は轟音に近いものとなり、映司と異形らは現在位置から2歩前後身を引いてしまう。繋がる刹那の文字、アクションの移り変わりは一瞬、その閃光が姿を消したかと思えば、その閃光の中から、なんと人影が見えるではないか。昼でも、否、昼の光満ちる時間帯だからこそ映える金髪、そのロングインテールの風に流れる様は一瞬見惚れるもので、同時に背中にあるマントも視界にでかかど介入してくる。その容姿は、一般人多数が感じる「美人」といえる分類で、顔もここミッドチルダの現地人にはよく見知られている顔。その女性、金髪の、黒の服装の女性は、気圧を感じさせながら開口一番を飾った。

「その未確認！^{アンノウン}一般人に危害を加えるのはやめて、管理局に投降してください！」

その言葉は、あきらかにバツタヤミーと映司そっくりグリードに発せられたものであり、その意向を重々示すかのような証として、女性には両手で黒のボディを持つ、金色の鎌の切っ先を異形に向けている。

だが、それと相反した様子で、紫のグリードは「いえいえ！まったくそんなことは！」とジェスチャーすら繰り返しながら焦っており、バツタヤミーの方など「またこのパターンか……。」とため息を吐いていた。

バツタヤミーのあきれている要素は、自分を見た目で判断されていることではなく、ここ最近こんな風に管理局員に出会っては、状況を見ずにこちらに武器を向けてくる「状況理解力」のなさに嘆いているのだ。

おかげさまで、こんなパターンを繰り返し、拳句には2回ほど目の前で悪事を行っていた犯人を逃がしてきて、また捕まえに行く、という二度手間を経験してしまい、今回の事件の犯人相手には、少々凍傷を残す可能性に申し訳なさを感じながらも、いつも以上の強度の氷結を頼んだ、とい閑話もある。

ともかく、相手側の女性には敵意しか感じられない様子で、説得は通じない、と異形2人は思考。

そもそもなぜこの異形らは管理局の追手から逃げているかというところ、答えは明白、異形らにも「自分の存在は異質である」という自覚があるから。

自分の存在は世界に騒動を起こしてしまう、だからこそ影から人を守る、というなんともけなげな心遣いであるのに、管理局はこの心遣いをどうも無駄にしてしまう傾向があることに、バツタヤミーはほとほと困り果てていた。

この状況で取るべき行動は一つ、悲しいことではあるが……。

「……逃亡御免。」

「すみません！あと、そこにいる犯人さん達をよろしくお願いします。」

「そんなことさせな・・・うわっ!？」

謝罪の言葉を述べた後の行動は、女性の高速移動並の速さで移り変わった。

紫のグリードが不意と大きく、しなやかな紫の翼を一瞬で広げ、店内に開眼さえ難しいほどの強風を発生させ、その目くらましの刹那の間に、グリードはバツヤミーを抱え、割れた窓から目にもとまらぬ速さで空へ飛び立ってしまった、詰まる所逃げ去ってしまった。あきらかに手慣れている手口、逃げられたことに少々の悔しさを噛みしめる金髪の女性、しかし彼女もこういったことに慣れているのか、頭の切り替えは早かった。

悔しそうな先ほどまでの顔はどこへやら、いかにも心配そうな赴きで、先ほどの異形に襲われそうになった（ように女性からは見えた）青年の元へ駆け寄る。

「大丈夫ですか？怪我は？」

「あ、いや、怪我はないですけど・・・それよりもやくあの人達を・・・。」

「・・・怪我がないなら安心しました。私はこれにて失礼します。」

・・・心配される要素に心あたりのない映司であるが、さきほども言った通り、慣れているためか行動の切り替えは早く、そんな言葉を残し女性は犯人集団の連行へと行動を移す。

しかし、その女性の顔を間近に見た映司、否、映司とカザリ、そし

てメズールといったある程度頭が回る者たちは、あの顔に引っ掛かるものがあつた。

そしてその引っ掛かる要素をいち早く確定させたカザリが、不意と口を開くのだ。

「映司、あの人確か、フェイト・Ｔ・ハラウンツという人じゃなかつた？ほら、昼食の前に読んでた雑誌に書いてあつた。」

「私も思い出したわ。Ｊ・Ｓ事件を解決に導いた機動六課、という特集記事に載つてた、確か・・・執務官？だつたかしら。」

その言葉を聞いた映司も確実に思い出した、そうだ、伊達が「この世界の情報源」と言つて買って買ってきた雑誌の特集記事に載つていた人物、最初は後ろ姿だけで分かりづらかつたが、容姿端麗なその姿は記憶に刻み込まれるものであつたことは覚えていいる。

やっぱり、この世界に来たからには、色々ろ調べてみないといけな
いかな？

と、映司は多々の疑問を抱え、自分の拠点へと戻つていくのであつた。

正義を為し続けていく、爆散したはずのバツタヤミーと紫の映司そ
つくりなグリード。

それら未確認の存在に、過度な危険性を自ら見出してしまっている管
理局の面々。

謎が謎を呼ぶ状況に置かれてしまった、事情をまだ知らない映司と
グリード一行、伊達。

この3つの要素は、この世界に何を為す？

u
b
e
H
E
R
O
?
N
e
x
t
C
o
m
i
n
g
O
O
O
!
!
C
a
n
y
o

第一話終わりました。

未確認、という呼称は、みんなも勘付いている通りクウガやアギトへのオマージュです、はい。

未確認に過剰反応な管理局、まあ、大きな事件が起こって間もないせいでもあるので、みんなはフェイトちゃんを責めないでやってください。

今見直してみると、なんとも同じような言葉回しばかりで、少々自信がメルトダウンしてしまうのですが、それは割り切りましょう、うん。

後、この小説のタイトルは思い切りオーズなのですが・・・実を言いますと、他の平成ライダーからもキャストが来る予定です、しかもこれまた例外的な。

もしかすると近いうちに出てくるかも？

それではノシ

今回の話の設定は、おそらく賛否両論となるものですが、温かい目で見てください。

思いつきり、この作品は序盤のバッタ達もこれからの展開ふくめ自己満の塊です。

感想で、この方針でいいか聞きたいですね、めんどろだと思われませんが、よろしく願います。

人によってはよろこぶ・・・と思いたいなあ。

と、言いますか、まず8人のNEVER、て言う時点でかなりの地雷臭しますしねえ・・・うわやめるなにをす（ry

不快にさせた場合にそなえ、今のうちに謝罪したいと思います。

ネクロ
Necro Over、^{オーバー}通称及び略名「NEVER」・・・「死」という固定的概念を、文字通り「超えた」存在。

その正体は、現代科学の粋を集めて完成された、死人をある意味蘇らせる、まさに神の所業に真つ向から喧嘩を売る、人間の愚かな創造の一つ。

大きな欠点がいくつかあるものの、その特徴としては、人間離れした身体能力、どんな即死に至る損傷でも耐えうる人間離れした耐久力、再生能力。

その動く様は死人とは思えないながらも、いくら骨が折れようと、心臓が打ち抜かれようと笑って余裕を出している様はまさに死人としか思えない、能力的にも人道的にも矛盾を背負う、本来、許されざる存在。

そんな存在に対し、一般人はまさに「死神」やら「地獄からの使者」とも言うし、なにより実際そんな2つ名があっってしまったのが現実、そう、その2つ名の通りに、彼ら、NEVER 8人は世界をまわっているのだ。

傭兵集団「NEVER」・・・テロリストの掃討などの危険気まわりのない仕事を受け、各地の紛争地帯や街を「地獄」と化した、不死身の集団。

正確には、そうした荒事を行っているのは5人中心で、他の3人は比較的穏やか、とは言ったものの一般からしてみれば危険なことには変わりのない仕事を受けている。

先ほども述べたとおり、NEVERの構成メンバーは8人プラス1人。

組織であるNEVERのリーダーであり、この世で最初のNEVERとなつた男、そしてNEVERの生みの親でもあり、その人物の母親でもある大道マリアの息子……統括者、だいどうかつみ大道克己。

NEVERの副リーダーであり、組織のムードメーカーらしきポジション、自称レディーの1人である、世間一般に言われる「オカマ」である男性……副リーダー兼NEVERの艶やかな鞭使い、しずみきよ泉京水。うすい

その眼光はまさに猛禽類、生前の通称「青の鷹」と呼ばれたSWAT一の狙撃手でありながら、死人の体を引きずりながらも家族を愛し続ける男……NEVERの青の鷹、無慈悲な狙撃手、あしはらけん芦原賢。

NEVERの怪力、縁の下の力持ちを体現したかのようなその強靱な肉体はまさに熊、棒術にも精通し、こよなく自然を愛している大男……NEVERのパワーソルジャー、うらなみりつ堂本剛三。

NEVERの紅一点でありながら、その女性らしさを感じさせるフットワークとしなやかさ、死人らしからぬ情熱を持ち、時として冷酷さも垣間見せる表裏一体の様……NEVERのファイアレディ、はねはら羽原レイカ。

そして……NEVERのTOP3、その情報解析力と整理力には秀でるものがあり、NEVERの参謀役、なおかつ個性派ぞろいであるメンバー勢を取り結ぶまとめ役……NEVERの頭脳、まつい松井誠一郎、通称「マツ」。

マツの唯一無二の相棒であり、他のメンバーとは一定の距離を持ちつつ、自分の信念を貫き通すハードボイルド、そして裏社会での通り名「骸の裁断者」を持つ自称「死人探偵」……NEVERの外

れ狼、なるみそうきち鳴海莊吉。

その口調は元セールスマンの雰囲気を感じながらも、その話術の秀でる面からNEVERの交渉役となっている優男、なにより自分の「町」を心から愛し、その未来を誰よりも大切にする男・・・NEVERネゴシエーターの交渉人、そのさききりひこ園崎霧彦改め須藤霧彦。

そのメンバーらを影から支え、NEVERという存在の成り立ちを考えるならば、彼らには無くてはならない存在、大道克己の母であり、彼の心の中にある正義を密かに願っている女性・・・NEVERの生みの親、プロフェッサーマリア、人の名を、大道マリア。

危険な場所に赴き、思いつきりに暴れるのが仕事（京水談）である彼らだが、仕事がない、いわフリーの日の彼らには、地獄の使者、という名を忘れ、それぞれのやりたいこと、やるべきことを為す。まあ、その前に、仕事もなにも無い日など、3か月に一度の割合なのだが・・・。

傭兵集団、とはいえども、その面が見られるのはどちらかと言えば仕事の時のみであり、個性派ぞろいなメンバーであるため、まるで童話小説などに出てくる陽気な海賊集団、という表現がぴったりか。そのにぎやかさが、とある1人の女性の存在によって、さらなる加速をしているのが現状だ。

「いい！レディーの料理つてのはね！その人への愛と！純情を！惜しまなく入れ込むものなのよ！」

「愛と・・・純情・・・？」

「そう！私は克己ちゃんと！霧彦ちゃんと！莊吉ちゃんに！惜しまなく！ぎゅっぎゅっに！見て！料理に愛を流し込んでいる私は！ま

さに曲線美よ！くねくねよおお！！」

今、京水に料理のいろはを教わりつつも、明らかに次元違いなテンションに戸惑いを示している女性、名前をミーナという。

少し前、とあるテロリスト集団掃討の任務において邂逅し、そこから始まった「クオークス」及びその背後に感じた財団Xの影とのピレッジでの戦い、その戦いの後、実験動物でしかなかった生き場のない彼女を、荘吉と克己が見兼ねて、こうしてNEVER基地兼研究所においてかくまうこととしたのだ。

ミーナもまた、行きすぎた科学によつて運命を左右されてしまい、人には過ぎる力を得てしまった人の1人、異質である存在に自分の存在を重ねたための同情か、はたまた克己と荘吉の人の心がそう願ったのか・・・その真実は誰にも知らない。

しかし、この場にいるもの達の様子も、なんとも一者一様で、京水は知つて通り、今まで料理を作ることがなかったミーナに、この組織レディー？代表として料理を厳しく・・・というより我流に教え込んでおり、にぎやかな食堂をよそに、研究所の一室の隅では芦原が丁寧にスナイパーライフルの手入れを行っている。

ところ変わつて研究所の戦闘訓練室では、紅一点のレイカと、怪力の堂本がそれぞれの得意とするもの、レイカは軽いフットワークからの流れる蹴りと拳、堂本は怪力による拳の一撃とそのダイナミックさに驚きすら覚える棒術によつて、まさに人外な模擬戦闘を行っている。

お互いに自然と笑みこぼれているところを見ると、バトルマニア戦闘狂であることがうかがえてしまう。

ぱつと見、この研究所内に、リーダーである克己の姿が見えないが、彼はマリアと一緒にこれからの活動方針について研究所の奥出話し合っているようだ。

こちらは研究所の様子だが、この場所の存在はもちろん公にはなっ

ていない。

ならばどこにあるのか、という質問が浮上してくるであろう、実を言うと、この研究所はとある事務所の地下にでかでかと建設されているの。

アメリカの郊外、その郊外の裏通り、一見そのような施設があるなと思えないようなうす暗く、人気のない場所、ここにNEVERの本拠地、そしてその隠れ蓑兼荘吉、マツ、霧彦の隠れ探偵事務所があるのだ。

もちろん、基本目立ってはいけないので、わざわざ探偵事務所を示す看板などない。

だが、世界の暗部、つまり裏社会では有名な探偵事務所で、いかなる危険な仕事でも金がある程度積めば確実に遂行してくることから通称「仕事人」と呼ばれている。

しかし、この探偵事務所が、全世界で有名な傭兵集団並び犯罪者集団の隠れ蓑に、はたまた事務所の主である荘吉以下事務所メンバー3名がその組織のメンバーである、という事実は一般にあまり知られていない。

実際、この探偵事務所にいる3人、荘吉、マツ、霧彦の様子を見た者は、そういった仕事を主とするものだとは第一印象では見えないであろう。

「今日は比較的静かでゆつくり日だね、荘吉。」

「・・・俺たちに、平穩はない。」

「まあまあ、そう気張らずに。荘吉さんも、コーヒーはいかかですか?」

「・・・もらおう。」

平穩に見える今日を再確認するマツ、比較的口数少なく、タイプライターで何かの書類を書きあげている荘吉、あくまでリラックスを見出そうとする霧彦。

こういった光景がある今なら、平穩と安らぎを求めるマツと霧彦の気持ちも理解できるものだ。

しかし、彼ら、特に荘吉は「骸の裁断者」と呼ばれる実力者、なおかつ、外れ狼であるながらも、彼も傭兵の1人。

・・・真なる平穩などないと、彼自身が一番自覚しており、現実もそうなのであるのだから。

事務所の扉が3回ノックされ、客人の来訪を知らせたのは3人がコーヒーを飲んでいた時のこと。

その刹那、霧彦はお得意の営業スマイルを浮かべながら「どうぞ」と簡単に一言。

やはり元セールスマンだけに、こういった対応の心得は会得している様子。

その声にいち早く反応し、その扉は呼応するかのごとく開かれる。

客人と思われし人物は、20代前半だと予想できる女性、きつぱりとしたレディーススーツを着用しており、典型的なキャリアウーマンを彷彿とさせる。

ただの客人、この探偵事務所の客人であろう、と霧彦は予想したが、荘吉1人はその探偵に備え付けられている直感の一種で、只の客人ではない、と思っていた。

・・・そしてその直感が、良くも悪くも当たり、なおかつこの平穩をぶち壊しとするものであった。

「クライアント依頼人の代理できました。傭兵集団NEVERの皆様。」

その声にいち早く反応し、今すぐに招集を要請したのはまとめ役の

マツ。

その後の集合は早く、事務所の仕掛け扉、一見荘吉の帽子掛けのスペースに見えるそれから、そろそろとNEVERのメンバーが集合していく。

その様は先ほどの様子とは打って変わり、雰囲気はまさに仕事人、レイカと堂本も、生ける人間であつたらかなりの発汗をしているはずなのだが、NEVERは死人であるため代謝がない、そのためまったくの疲れた様子もなくここに集合した。

合計8人、まず、交渉役である霧彦を中心として、任務の確認を行う。

「それでは、依頼の内容を確認させてください。」

「・・・その前に、とあるお方からお話があります。」

霧彦の問いかけに答えるよう、女性はどこから取り出したのか、とある大きめのディスプレイをメンバーの前に出す。

その刹那、デン！と大きめな電子音が鳴ったのは一瞬、その音量に一般人は驚くこと間違いなしであろうが、修羅場を駆け巡った彼らに動揺の色はない。

さらなるその刹那、その画面に光が宿り、画面にとある中年の男性が映り込んだのも一瞬、その男性の見知らぬ顔に相変わらずのノーリアクションではあるが、それをよそにその男性は笑顔で繰り出すのであつた。

『初めまして！NEVERの諸君！私が今回の依頼人である鴻上フアウンダーシヨン会長の鴻上光生だ！』

ただ、鴻上フアウンダーシヨン、という名が出た瞬間、克己はにやりと微笑した。

鴻上ファウンデーション、表では一般的に言われる大企業であるが、裏では色々な意味で有名な会社、噂では「世界の40%を掌握している」とも言われている、力がある企業だ。その大企業の会長直々の依頼、というのだからかなりの高収入が期待できるであろう。

だが、克己が期待したのはそこだけではないのだが、その内心は誰にも知らない。

「それでは・・・鴻上会長、依頼とは何でしょうか？」

『・・・その依頼を説明する前に、君たちには世界の事実、というものを説明しなければならぬ。』

「真実・・・で、しょうか？」

『そうだ。・・・君たちは、異世界、はたまた、魔法、というものを信じるかね？』

？マークを浮かべるメンバーをよそに、鴻上はそれらの単語についての説明を始めた。

この世界は次元という筒の中にある多々の世界の1つでしかなく、次元には様々な異世界が存在すること、その中の1つの世界「ミッドチルダ」を中心とした「魔法」と呼ばれる技術概念の存在のこと。しかし、あまりにも唐突な上に突拍子な話に困惑と疑念が渦巻いているのが現状の事実、だが鴻上はまだ笑顔でいることからこういった事態は予想済みらしい。

『それは困惑もするだろう。だが私から見れば、死人がそうやって動いている、ってことのほうが驚きだけだね。』

その言葉を聞いた一同は、やっとして動揺の色をかすかに見せた。なぜならば、一部の裏の人間しか知らない、普通ならば知りえない事実、自分たちの正体をを、この目の前にいる男は知っている赴きでいるからだ。

さらに笑顔を見せている様子を見ると、おそらくどうやってNEVERが存在しているか、ということも知っている、そういった予想を立てた克己は、その情報収集能力を評価しながら、さらに笑みを浮かべた。

『話を続けよう。今までの話を聞いて勘付いている人もいるだろうが・・・君たちには、早速その世界、異世界ミッドチルダに行ってもらいたいのだよ。とある任務を遂行するためにね。』

「その任務とは？」

皆が顔を険しくしているときでも、やはり霧彦は優秀な交渉人、いかなる時でも笑顔は絶やさない。

『うむ。君たちには、しばらくその異世界で私の指示に従い動いてほしい。もちろん、長期において動いてもらうのだから、金は弾むよ。』

「どれくらいで手を打ってくれるでしょうか？」

『ふっ、そうだね・・・1回の仕事につき、最低1500万でどうだろう？もちろん、拠点の準備とあちらでの生活の充実を約束しよう！もちろん、仕事によってはさらに倍！どうだろう！なかなかいい仕事ではあると思うのだが？』

「なるほど、それはまた太っ腹でいらっしやる。・・・リーダーは、

「どうでしょうか？」

「・・・おまえ達はどうする？」

早速依頼受諾を決意した克己だが、その視線を荘吉ら3人へと向けた。

そもそも、なぜ彼らがあまり他の5人と行動しないか、それは荘吉の「暴君共の悪事に手を貸すつもりはない」という意向によって行動を共としないのだ。

一緒に行動するときは、自分の目的と一致した時や、その依頼の内容によって変わるので、通称「外れ狼」も納得である。

だが、その推理力、格闘能力、その態度は他のメンバーからは一定の信頼を置いており、実際外れ狼ながらも影のまとめ役として働いている。

だが今回は、荘吉の顔を見る限り乗り気ではないらしく、荘吉が否定の意を言葉にしようとした時、鴻上が介入、否、爆弾を投下してきたのだ。

『そういえば、会社の情報網がキャッチした情報でね、なんと！ミッドチルダのとある場所にガイアメモリの工場があるのだよ！』

その言葉を耳に入れ、表情が明らかに変わったのは荘吉、克己、そして霧彦。

一方は多大な期待を込めた笑みを浮かべ、一方は視線と表情が一層と険しくなり、もう一方も何かの敵意に近いものを感じれる。

鴻上の推論だと、わざわざ異世界に建造したのは、ガイアメモリの存在を知らない異世界で製造し、なおかつ異世界の存在を知らない地球人の目から逃れられるという2つのメリットがあるからだろうと予想。

そして、その工場の存在によってもたらされる可能性・・・それは、

その世界でメモリが広まる可能性があることだ。

なぜ鴻上がそのような情報を持つていたか、予想されるは財団X系列にスパイがいることであろう、だが、今考える問題ではない。

鴻上のこの情報を伝える意味、それは単なる「餌」でもあり、意義でもあった。

「この男、確かに鼻はよく効くし、頭もまわるようだ」と克己も関心している。

その話を聞いた荘吉一行は、少しのシンキングタイムの後に、鴻上が図った通りの返事を返すのだ。

「・・・同行しよう。ただし、基本はいつもと一緒だ。」

「ふん。・・・依頼人さん、その依頼、喜んで受けるぜ。ただし、向こうでの行動は、依頼以外は自由にさせてくれよ。」

「もちろんだよ！ただし、あまり名の売るようなことはしないほうがいい。向こうはこっちと勝手が違うからね。・・・それでは、詳しい話はそこにいる里中君に聞きたまえ。私はこれにて失礼するよ。」

その返事に大変満足したためか、一層と大きな声を荒げながら笑い声を発していた。

その言葉を最後に、大きな嵐は一旦として台風の目を見せたのだ。

その後は鴻上の代理である女性、里中エリカとの長時間における会議、内容は、向こうの世界での処遇、手はず、報酬金の振り込みなどなのだが、異世界での仕事、とはいったものの一般的な事務処理だけの話で終わり、詳しい手はずが決まった。

ミッドチルダへ出発するのは1週間後、拠点付近において転送し、任務申請時までは自由に行動していいこと、なにか必要な準備物が

あれば申請すること、など好条件が重なっていく。

その処理を行っていたのは主に、リーダーである克己と事務担当でもある霧彦、その好環境、十分な報酬金に大きく2人はうなずき合っていた。

・・・その裏で、莊吉は居候であるミーナを呼び出した、目的は、向こうに滞在する間のミーナの安全確保について、自分達がこれから遂行する任務及びその危険性の説明も織り交せてだ。

彼女は超能力を扱えし存在、その存在のためかさまざまな危険が降りかかるであろうし、向こうに連れて行くにもそこはそこで危険が付きまとう、なおかつ彼女の存在は、言っては悪いが邪魔となる可能性も歪めない。

確かに彼女は優れた超能力の資質を持ちし者として実験動物の人生を強要されてきた存在、だがNEVERの行う仕事との必要な力とはこれまた違ったものがあるのだ。

長期における滞在任務、向こうは元の世界とかなり勝手が違うため、正直完璧に守りきれぬ自信がないのも本音の1つであった。

莊吉は異世界に向こう、と決意した瞬間、ミーナの処遇について疑問が浮かび上がったのだが、その問題は早急に解決したらしく、ミーナにこれからの指示を煽っていた。

「いいか、俺達が出発したら、お前はこの場所に向かつて、メモに書かれている2人にこの手紙を渡せ。・・・ただし、俺達、特に俺のことは伏せる。」

「でも、この人たちも危ないんじゃないか・・・。」

彼女が心配するのも無理はない、相手は大きな影と力を持つ財団X、ガイアメモリの存在もあってか一般人に太刀打ちできる相手ではない、と組織に関わってきたミーナがよくわかっているのだ。

だが、彼女の心配する様と比例するように、自信のある声で、一層と帽子を深々とかぶり直しながら、自分の中にある確信めいた予測を述べるのだ。

「心配はない……とはいえない。確かに、そいつらは半人前。だが……文字通り体を張って、お前を助けてくれることは、確かだ。」

その声は、かすかに懐かしむものを感じるもの、その背中には似合いすぎるほどの哀愁。

そしてその顔は……かすかに、微笑していたようにも見えた。

ミーナが荘吉に渡されたメモ……日本のとある住所、電話番号、そして……。

「風都 鳴海探偵事務所 左翔太郎 フィリップ」と、確かに書かれてあった。

その夜、克己から伝えられた、ミッドチルダでの初仕事。それは……。

「1週間後、ミッド北部のガイアメモリ工場の襲撃を行う。」

工場の襲撃、及びそのガイアメモリの奪取。

それは、ビレッジで出会った「E」のメモリと出会うための布石。

そして……異世界で、NEVERの名を刻む記念すべき「花火」でもあった。

その男は、死人の体を引きずり、なにかを求めていた。自覚などない、だが傍から見ればそれは明確なもの。

仲間、同類、自分が異質な存在だからこそ求めたもの。

それは俺達7人の運命を180度狂わせ、「永遠」と錯覚する偽の「生」を与えられた。

次に求めたもの・・・それは、死人である彼にとってとはとつくの昔に奪われた「明日」。

その冷たい体を引きずり、あくまで現世で為したいこと。

それを男は探し続けていた、ただし、生きとし生けるものには保障されているそれが、死人などにあるはずなどない。

ならばどうすればいいのか・・・男は考え、きっかけによってその答えを見つけた。

だったら自分で作ればいい、それをつかめばいい、探して、探して、死人なりにあげればいい、と。

そして、男は大きな「変革」を行おうとした。

裏の大きな影を根絶やしにし、この世に大きな「花火」をさかせよう・・・と。

求めたのは力、大いなる力を使いし資格がある、と男は気づき、それを手に入れようとしている。

そして、死人を統べる男は明日を、「永遠」の力に必死に手を伸ばし、死人たちはそれに黙ってついて行く。

死人たちは、はたしてどのような気持ちでいるのだろうか？

自分の中にある「欲」を満たすため、自分の中にある「何か」に応えるため。

だとしたら俺は、「あの風と風の運ぶ笑顔を、遠くから守るため」と大きな声で言おう。

今、ここには「その風」を愛する者たちが3人いる・・・もしかすれば、4人かもしれない。

一度「その風」を泣かせた俺が言うんだ、死人になるのも悪くはないかもしれない・・・オススメはしないが。

S・M

(とある男のタイプライターによる記録及び手記)

1週間、という期間は生けるものはもちろん、死人たちにもあつという間なもので、武器の調達やら準備やらをしているうちに、あつという間に経過してしまうものだ、その期間中3回仕事があればなおさらなものである。

しかし、NEVERの一員がおもむろに準備している中、とある小さな問題点が見つかったのである。

それは・・・異世界ミッドチルダでは、質量兵器が元の世界以上に嫌悪されて、なおかつ元の世界よりも厳しく取り締まりがされていることだ。

話によれば、拳銃をちらつかせただけで最低10年は監獄のお世話になるとか・・・。

この話、異世界の常識が大きな問題点となる理由、それは芦原賢の得意とするものが狙撃だということ。

NEVERの大きな特徴として、飛躍的な身体能力があるため、他

のメンバーはさほど大きな問題にはならなかったのだが、芦原はそれを専門として、能力はあるものの格闘経験はさほどない。

だとすれば、向こうの世界に代替できるものはないか・・・とマツが提唱したのだが、克己はそれにあざ笑いながらこう言った。

「生ける人間の法に、死人が縛られる必要があるか？」と・・・。

その言葉には、自分たちにたいする皮肉があるのと同時に、おそらく、克己の考えるプランも関係あるだろう。

ミッドにあるガイアメモリ工場を襲撃する理由、それは財団Xにさらなる存在の強調を行うことと、可能性の1つとして、「T2ガイアメモリ」の回収だ。

「T2ガイアメモリ」・・・研究施設「ビレッジ」のデータベースからマツが拝借してきたデータに記述されてあった、ガイアメモリの type 2、文字通り新型だ。

旧型との大きな相違、それは「生体コネクタを必要としないこと」、「メモリブレイクされないこと」、そして「メモリが人を選ぶこと」。

そしてデータベースでの記述、「ひとたびなにかの事故によって町などにはらまかれた場合、メモリ自体が人間に入り込み、意思のないドーパントとして暴れまわるだけである」。

財団Xはなんとモハタ迷惑なメモリを作ったのか、と荘吉と霧彦、マツ談。

その自由性、厄介さを考えると、同じ「町」を愛するもの達の見解は同一のものであった、「これを風都に流通させてしまったら、面倒にある」と。

それは主なる3人の見解であるが、克己はその特徴に他の可能性を見出していた、それは「生体コネクタを必要としない」という特徴。人間が使用する場合、財団の者がコネクタ手術をする必要がある、しないものが使用した場合メモリの毒素によって体を痛ませることとなる、それによって簡単に手を出せないのが現実。

しかし、コネクタを必要としない、ということとは、財団から敵視されているであろうNEVERの者達にも、手に入れることができれば戦力として「ガイアメモリ」を使用できる、ということだ。ガイアメモリの力を手に入れれば、これから敵として送り込まれるドーパント達に抵抗できる、それどころか掃討できる力となる。これからの戦いにもっと大きな力が必要となる・・・そんなことを思っていた矢先に手に入れた道しるべ、そして一時出会った「E」のメモリの力。

それは、克己の意思に確かな「明日のやるべきこと」を疑似的ながらも示されていた。

(ミッドチルダ現地時刻 AM5:30)

(ミッドチルダ北部 財団Xガイアメモリ工場付近 森林地帯の一角)

ここに、男7人と紅一点、合計8人の影、言わずと知れた、NEVER一行の影だ。

もちろんとして、それぞれお得意の武器を引っ提げての来訪、京水は鞭を、堂本は棍棒を、芦原は法律お構いなく特性のスナイパーライフルを背中に両手にはマシンガン2丁、克己、レイカ、霧彦、マツは死人ご自慢の身体能力を持つ肉体、そして荘吉は・・・腰に、ロストドライバーを。

「荘吉、一番乗りは任せたぞ。」

「荘吉ちゃん！先陣は任せたわよ！」

唯一無二の相棒として荘吉の背中を押すマツ、レディー？代表としてラブコールを送る京水、荘吉を静かに見ているメンバー、それを

背に受けとめながら、かぶっている黒の帽子を一層に深くかぶり直し、莊吉は静かに工場へと向かっていく。

なぜ先陣を切るか、それは1人近づくものあれば、おそらく警備をしている者たち勝手に、それもあなどってくれながら出てくれるから、なぜ莊吉が先陣なのか、それは・・・NEVERの総合的な強さとして、莊吉はトップであり、信用できるからだ。

莊吉が一定距離近づいた瞬間、莊吉のみに照らされるスポットライト、それと同時に5人の男性、それも手に杖の形をしたなにかを持ちながら、莊吉の元へ走ってきた。

近づくな、と典型的な脅迫文句を言いながら、接近を制止させる5人だが、莊吉がそれにひるむはずもなく、それを無視し接近を続ける。

警告は無意味、と5人は判断すると、早速とばかりに杖の先を莊吉に向け、光球らしきものを生成、それにそれなりの速度を加え、莊吉の元へと放った。

しかし、それを回避できずのうのと被弾する莊吉はたまたNEVERではない、あくまで小さなアクションで回避した莊吉は、光球はガイアメモリの力か？と疑問を持つが、この世界の特徴を思い出し、不意とつぶやいた、「これが魔法か」と。

まだ戦意などおとろえていない5人をよそに、莊吉はその身体能力によつてありえない速度の接近、これまたありえない腕力で男の1人を殴りとばし、早々に退場させた。

その様に驚きを隠せない4人、本当に人間か？と1人はつぶやく、が、それは皮肉めいた一言でしかない。

莊吉は視線を動かし、次なる1人に蹴りを入れる、かと思われたのだが、その足は寸で止められていた、男の手から生成された、魔法陣の防御盾により。

異能の力、しかし莊吉は驚きはしない、これもまた魔法なのだろう、と理解しているからだ。

その刹那に放たれる魔力弾、だが莊吉に被弾はしない。
5メートルにも及ぶという跳躍によって、莊吉は4人と一定の距離
を取り、4人の様子を見る。

そしてそれを見た4人は、果たして血の気が多いのか、それとも人
間離れしたその様に焦ったのか、その男4人は懐から長方形のな
かを取り出した。

莊吉は、そのなにかへの因縁か、不意と視線を鋭くする。

「ガイアメモリ・・・か。」

「ほお、これを知っているとはねえ・・・けど、これが見納めさ！」

その言葉を啖呵に、4人はそのガイアメモリのスイッチをONした。

【マスカレイドMASQUERADE】

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶が収められたそれを、男ども
は右首筋にあるコネクタを挿入し、その場所を皮切りに体（正確に
は見た目上に変化したのは顔だけ）を変化させた。

使用者の身体能力を向上させる効果を持ち、一般に多く流通し、時
には財団の戦闘員ともなるドーパント、マスカレイド・ドーパント
が、おもむろに視線を莊吉へと向ける。

その視線は確かな殺気を感じ、さきほどの侮り、油断が完全に消え
去っている。

それは戦闘にも反映され、生身の莊吉にお構いなく、魔力弾を多量
に放ち、時には中距離の砲撃も放たれ体様が今。

その攻撃にみすみす当たり前に行く莊吉でもないが、内心しんどさも
感じていた。

マスカレイド・ドーパントは、NEVERだけでも十分に対処でき
る下級のもの、だが相手が魔法を使うなら別問題だ。

格闘しか能のない本来のマスカレイドとは違い、遠距離からも仕掛けてくる魔導師のマスカレイド。

勝手が違う戦いに押され始める荘吉、その劣勢が、荘吉にある決意をさせた。

「どうしたあ？動きを止めた、つてことは、降伏かな？」

「・・・俺はあまりこれを使わない主義なのだが・・・相手が相手なら別問題だ。・・・他の奴らも待たしているしな・・・。」

「はあ？なにをほざいて・・・そ、それは!？」

男の1人は、荘吉が懐から取り出したそれに驚きを隠せない。

それは、まだこの世界に流通させてない、この世界でなら、財団の関係者以外には所持できないはずの代物・・・ガイアメモリなのであるから。

さらに男は驚きを覚えることなるのはその刹那、荘吉は黒のスーツをどかし、腰にあるそれを男に示す。

男は、それがなんなのかを、不幸にも知っていた。

財団のデータベースを覗いたとき、不意と好奇心に駆られ、その存在を知った、しかし、同時にその力も知ってしまった。

ガイアドライバーの一種で、ガイアメモリ1本の力を最大限に解放する、いわゆる変身アイテム。

赤を基調とした、「ロストドライバー」であったのだ。

【SKULL】

スカル

骸・・・骸骨の記憶が収められたそのスイッチをON、独特な電子音声を鳴らし、荘吉は、改めてこの「鎧」を背負う決意を、黒の帽子を一度脱ぎ、この言葉で静かに示すのだ。

「・・・変身。」

【SKULL】

スカルメモリをドライバーへ挿入、再び鳴り響く電子音声、その一瞬で、莊吉の体は一層と強靱な肉体へと作りかえられ、「骸の裁断者」の名の元となった姿へと変化するのだ。

莊吉は頭に再び帽子をかぶり、その視線を一層とした殺気で返した。首には黒い、ボロボロのマフラーを締めしており、体は人間の亡骸を模したものの、顔も、まさに骸骨という表現が似合ってしまう不気味さ、死人である彼にはびつたりすぎる姿・・・仮面ライダースカルが、ミッドの地へと現出した。

「クソツ！面倒な奴を相手にしちまった！」

その言葉の通り、先ほどからマスカレイド・ドーパントが戦闘や魔力弾によって必死な攻撃を行い続けているのだが、さきほどの劣勢は影すらなく、スカルはその本人の自慢の身体能力が相まって、ドーパントでも真似ができないほどの格闘戦を見せている。

跳躍によって攻撃をかわし、格闘ではほとほと太刀打ちはできない、さらには魔力弾は被弾するどころかその腕力ではじかれる始末、格闘能力は極限に高まり、盾、プロテクションは砕かれてしまう。

そして、その一方的な戦いに終結を呼ぼうとしたのは、紛れもなくスカル、その示しとして、どこからかスカル専用の武器、スカルマグナムを取り出し、ドライバーからメモリを取り出す。

トリガーの限界突破による必殺技・・・マキシマム・ドライブでの布石であった。

【SKULL！MAXIMUM DRIVE！】

マキシマム

ドライブ

スカルマグナムにメモリを挿入し、マキシマムドライブを発動、その刹那、マグナムから強力な破壊光弾が4発、マスカレイドに向け発射された。

だがそれにマスカレイド抵抗しないわけもなく、それぞれ魔力光が違う魔法陣の盾を展開し、その光弾に抵抗の意思を見せる。

だが、所詮は一介の一般魔導師の展開した盾、魔力資質は優れたものではなかったらしく、さらにはそのマキシマムドライブの強大な威力によって盾を貫通、光弾はマスカレイドにクリティカルヒットし、悲鳴を上げながらマスカレイドを地面に伏した。

そして、それぞれのマスカレイドは、メモリブレイクされずにそのまま消滅する、という特徴にのっとり、粒子となって消滅したのだ。

その様子を見計らい、待機していた残りの7人も前へ出る。

お互い、これから出てくるであろう敵の手ごわさ、先ほど思い知らされた面倒さに警戒している様子で、一方筋金入りの戦闘狂である堂本は敵の手ごたえありな様子に舌舐めずりしながらはちきれんばかりの期待を秘めている。

これからの行動の手順はこうだ、これからあふれんばかりにでてる刺客を手分けして足止めし、どこかにあるガイアメモリの保管場所に突撃、メモリを確保したのちにそそくさと逃走、T2の場合はメモリを使用し、この工場を派手に破壊、その後逃走、といったいかにもシンプルなもの。

しかし、人間離れた力を持っている彼らにとっては、小細工ばかりの作戦は返って分が悪く、こうした力任せなものの方がその能力を思う存分に発揮できる。

だが、NEVERという存在は、一定時間、細胞意地酵素を供給しないとたちまち消滅してしまう存在、そのためそのタイムリミットまでに遂行する必要があるのだ。

限界はそれぞれが準備してきた予備の酵素の量を考え、朝の7時ま

でが限度、それが任務のリミットであり、NEVERの集合時間でもある。

「さあ、死神のパーティータイムと行こうじゃないか！」

その言葉が伝えるは、これから始まる縦横無尽に人が飛び交う戦いの合図、自らを死神と罵り、死人だと笑いながら述べる者達の異世界での初仕事、名を刻むための記念日。

それを高らかに宣言する克己、その彼の指は、天に眩しく輝く、地球では見慣れない2つの月を示していた。

魔法を使うマスカレイド、結構強い・・・と思いたい。

劇場版ではスカルにフルぼっこされたから活躍が見れて光栄です・・・

・ 結局フルぼっこですけど。

克己からパーティータイムが宣言さえ、どれほど時間が経過したであろうか。

NEVERの誓として、この工場地下部に、霧彦とマツが走り回っていた。

他のメンバーはどうしたのか、という疑問が浮上するであろう、だが決して、他のメンバーが倒されたわけではない。

そもそもこのガイアメモ工場に突入したのは今より約30分前、見た目以上の広大さに手を焼いていた彼らに、予想通りマスカレイド・ドーパント、財団からの刺客が多数やってきた。

最初の群を担当し、足止めを始めたのはレイカ、京水、堂本、その中堂本と京水が妙なハイテンションでドーパントを相手にし、その場は辛くもその3人以外は脱することができた。

だがしばらく奥部に行き、地下部への入り口を発見し早速とばかりに突入しようとしたタイミングで、マスカレイドの第2群が襲来、先ほどより数は少ないため、2人で十分だ、と克己は芦原とその群へと突撃し、残りの荘吉、霧彦、マツが2人を残し地下部へと侵入に成功。

その後は敵の気配なく、ずんずんと進めていたのだが、ここにきて道が明確に2つへと別れた2又通路にさしかかったのだ。

一瞬判断に迷った霧彦であるが、荘吉とマツはいたって冷静、ここは片方をスカルに変身できる荘吉に任せてもう片方を2人で行くべきだ、と合致しら意見を述べた、まさに息があった2人。

その後は荘吉を別れ、こうしてマツと霧彦が奥部へとどんどん進んで言っている現状、おそらく他のメンバーはまだ倒れてはいないだろう、と希望的観測を立てる、だが実際にあの大群をやりしのごだけの実力は全員にあるのが真実だ。

その歩みを止めない2人の前に、とある自動ドアが立ちはだかった。今までに違う雰囲気と作り、それになにかの確信めいた判断を持つ2人の足は、そのドアへとゆっくりと歩み寄り、ドアの先へと進む。そして2人の視線に飛び込んだのは、銀色の無骨なアタッシュケース、広い空間にたたずんでいる様は違和感しかなく、それと同時に2人は一層とした予感が渦巻いている。

そして早速として2人はそのケースを開けると・・・その中には、USBメモリ型を象った、26本のガイアメモリがあった、それもブレッジから拝借したデータにあった画像と同じもの・・・詰まる所、幸か不幸か、T2ガイアメモリであったのだ。

「ケースがこれだけ・・・ということは、試作品ですかね？マツさん。」

「おそらくね。と、いうことは、まだ量産はされていない、ってことだと思うよ。道理で工場が動いていなかったってわけだ。」

マツはいつもの癖で、情報をまとめるときやしやべりだすときのしぐさとして指を鳴らし、そんな答え合わせを軽く交わす、とにかくこれで任務達成であろう、とかすかな安心感を抱いていた刹那、自動ドアが不意と開かれ、それとコンマ何秒かの動作、2人の目の前にあったアタッシュケースに、一本の太く、白い糸のようなものが張りついた。

それに反応し、動いたのはマツと霧彦の同時、おそらく奪取されると恐れた2人はケースに手を伸ばそうとするが、それに呼応し、その糸は力強くケースを引きよせ、2人の手にはとっさに掴まれたガイアメモリが一本ずつしかなかった。

ケースを奪取した犯人はそこにいる、と2人はドアの方向に視線を動かす・・・そしてそれは、マツにとっては忌々しい異形の姿であった。

頭部は6本足の虫が象られており、左腕は文字通り禍々しい異形の者、それは、かつてマツがその力に飲み込まれ、町を泣かせたときの姿・・・蜘蛛の記憶を駆使するもの、スパイダー・ドーパントであつたのだ。

「まったく・・・ただのゴソ泥がここまで来るのはいいが、試作品を持ってかれちゃあ困るんだよ。」

「こんな迷惑なもの、むしろ持って行った方が平和なのでは？時代遅れのドーパントさん。」

「ほお・・・ガイアメモリについて詳しいようだな。だが、俺はれっきとしたT2のスパイダー・ドーパントだ！」

と、威勢のいい啖呵代わりに名乗ったスパイダー・ドーパントは、腕から10匹前後の小さな蜘蛛を放つ。

それにいち早く反応したのはマツ、急いでその場から離れ、衝撃に備え強く身構える、それに反応した霧彦も同じように身構える、そしてその刹那に、その蜘蛛たちは、威力は小さいながらも、爆風をしっかりと発し爆ぜたのだ。

マツはこれを使用したものとして、蜘蛛が出た瞬間に察することができた、だが旧型の蜘蛛爆弾とはある条件を達したことによって爆発するもの、しかももう少し威力は高いはずだとマツは違和感を感じるが、先ほどのドーパントの一言にからとある推測を打ち立てた。T2・・・つまり旧型とは違う新型のもの、つまりいくらでも改良は可能であるのだ、おそらく条件なしの万能なものとした引き換えに、威力低下は歪めなかつたのであろう。

普通の間人であるならばとても危険な爆発であつたが、NEVERとして耐久力に優れた2人には慣れたものだ、至って無傷な様子な2人にスパイダー・ドーパントは笑いながら感嘆の声を上げる。

だが・・・その余裕そうな声をよそに、明らかに殺気を荒げている男・・・マツがいた。

かつての罪深き自分の姿・・・それとよくも悪くも重なってしまった、町を泣かせようとする者達に加担する目の前のドーパントに、なにより・・・かつての罪深い自分、町を泣かせてしまった自分に、とてつもない憎悪と怨恨が募っていく。

そして、マツと霧彦が不意と手の中にある一本の、先ほど咄嗟に掴んだガイアメモリを覗く。

それと同時に、2人の顔は驚愕なものへと変化したのだ。

だが2人は思い出す、T2ガイアメモリの大きな特徴、それは「メモリ自体が人を選ぶこと」・・・そして2人は、その記述に、この瞬間大きく実感を抱かれたのだ。

一方は「まるで断罪の証だな」と皮肉めいたことを言い、もう一方はそれとの再会に内心喜びを示していた。

「・・・おい、蜘蛛のいけすかないドーパントさんよ。悪いことは言わない。ここは、おとなしく逃げることをお勧めするぜ。」

「ふん！いまさら意気がろうなど・・・。」

「それはこっちのセリフですよ。先ほどの爆発を見るに、あなたは完全にメモリの力を使えていない。その証拠に、私達は怪我ひとつしていない。」

殺気立てながら睨むマツ、にこやかに、あくまで自分らしく言論で攻め立てる霧彦、それに反論ができない拳句、マツの強すぎる殺気に押され気味であるスパイダー・ドーパント、この時点で、スパイダーの優勢の影を無くしていった。

その証拠に、自身は気づいていないだろうが、スパイダーの足がゆっくりと後ろへと移動しているのが見える。

そして・・・2人はためらいもなくその決意を表すかのように、メモリのスイッチを押した。

「それに・・・俺の前で、その姿を見せたときから、お前が倒されることは決定事項だ！」

【SKULL】
スカル

「臆病者は、黙って指を加えていなさい。メモリの本当の力を見せて上げましょう！」

【NAZCA】
ナスカ

「お、お前達！まさかメモリを・・・いや！T2ガイアメモリは適性のないものが使えば精神が飲み込まれ、そこらじゅうを暴れるだけだ！お前らなどに・・・。」

しかし、それはスパイダーの強がり、2人は返って不気味な笑顔すら浮かばせる。

「こいつと合ってない？そんなわけはないな。これは相棒とペアルックだぞ？」

「久しぶりに再会した相棒に、仲違いなど・・・。」

その笑みにもはや恐怖しか感じれなくなってしまったスパイダーは、今にも逃げ出しそうな腰付きでいる。

だが、この状況でならそんな反応も納得できてしまうのだ。

その笑みは・・・まさに地獄からの使者、死人としか思えないもの。そして2人は・・・同じ「町」を愛し、「町」を守る者たちをそれ

それぞれ思い出し、一方はその無事を願い、もう一方は最初で最後に共闘したそのハーフボイルドとの最後の会話を思い出し、2人はその受け継がれし言霊を信じながら、大きく叫んだ。

『変身！』

それは、「町」を愛し、なお戦う戦士をリスペクトしたものの、それぞれの背中に思いをはせながら、言霊を響かせ、スカルメモリは左の首筋、ナスカメモリは右首にへと吸収された。

その蒼いボディと、仮面の剣士を思わせるルツクス、背中にある2本のマフラーは、思いをはせた仮面の戦士を彷彿とさせるもの、高速の剣士、ナスカ・ドーパント。

その顔まさに骸のもの、両肩にはそれぞれ1つずつ骸を背負い、体全体は人の亡骸そのままの造形、そして相棒とのペアルックでもあるその姿、首には白いマフラーを一本締めている、骸の断罪者、スカル・ドーパント。

ここに、罪を背負い戦う本達2人が、戦いの力を得て現出した。

『さあ、お前の罪を数える！・・・だつたかな？』

「くっくッソ！ここは一旦退く！」

さすがに負け試合はごめんだ、とスパイダーは天井に糸を張りつかせ、その場から脱兎のごとく逃げようとする、がそのあがきもはやみすばらしいもの。

逃げることと言語道断、とナスカはナスカウイングと呼ばれる地上絵を模した翼で高速飛翔、すぐさまそのしなやかな剣により糸を断ち切り、スパイダーは無残に地に落ちる。

糸を無くしたクモなどもはや踏みつぶされる運命、その刹那スカル・ドーパントが思いっきり力を込めた拳をスパイダーに叩き込む。

スカルメモリの特性は「身体能力の極限までの向上」、武器も何も持たないそれに与えられたのは、極限までの力、NEVERとしてただでさえ身体能力が優れている彼の限界を超える力となれば、それは多大なる「強さ」となる。

次々と叩き込まれる蹴りや拳、それをまともに受けているスパイダーの体に、着実にそれも確実にダメージは積み重なっていく。

このままでは大敗を期す、と危機感を抱いたスパイダーは、両手からめいっばいの蜘蛛型爆弾を放つ、が、それは目にもとまらぬ速さで翔けている青の閃光によってすべて斬撃によって無力化されていく。

閃光の正体はナスカ・ドーパント、ナスカの力はその飛翔能力と高速移動、生前の霧彦はその力を、やっと高速移動の初歩であるレベル2までしか引き出せなかつたのだが、今の霧彦には強靱な肉体がある、そのため生前を軽く超越する高速移動が可能となつたのだ。まさにその様は圧倒的、その強さはスパイダーの戦意を完全にそぐことには十分すぎた。

方向を変えた青の閃光は、すぐさま無数の斬をスパイダーに刻んでいき、その斬が止まつた刹那、スカル・ドーパントの胸が大きく開き、エネルギー体の骸骨を生成する、そう、それは生前に受けた仮面ライダースカルの必殺技と似通っているもの・・・その骸骨を拳に纏わせ、さらなるパワーチャージを行う。

そして、マツの大きな叫びとともに、その拳、その骸骨はスパイダー・ドーパントへと直撃するのだ。

その強い威力によって、スパイダーは完全に活動を停止、体は地面に伏し、体からガイアメモリが排出される、そしてマツは、しっかりとそのメモリをキャッチした。

メモリブレイクはT2のためされない、が、排出されたのちに物理的な方法で壊すなら別だ、スカル・ドーパントはその醜い黒歴史と決別するために、そのメモリを握りつぶし、粉碎した。

戦いはひと悶着し、安堵に包まれる・・・かと思われていたのだが、

霧彦が焦った様子でマツに迫った。

「マツさん！アタツシユケースがないです！」

「・・・しまった、ドンパチにまぎれて回収されたか。・・・しょうがない、とにかく、今は苦戦してるはずのみんなを助けにいくぞ。」

「もちろん。」

このままではタイムリミットを越えてしまう、と危惧したマツは、おそらくまだ苦戦を強いられているメンバーを考慮し、急いででの救援を考える。

しかし地下部の奥深くとなるとかなりの距離があり、なにか最短ルートはないものとマツが考えていると、霧彦がそれに提唱した、ならば自分の飛行能力により2人で天井を貫けばいい、と。

それにマツは指を鳴らし「ナイスアイデア！」と一言、それに「光栄です」と霧彦、マツの声は、どこか振りきれたようすがすがしい声であった。

その後、多数のマスカレイドに奮戦していた克己、芦原組にはスカルが、京水、レイカ、堂本組へと向かった。

スカル・ドーパントであるマツは、その身体能力で圧倒的にマスカレイドへと力を示しつつ掃討、一瞬敵意を向けられた克己へと制止をかけ、目の前で変身を解き弁解、すぐさま克己は戦闘態勢を解いた。

それと同時にせっかく見つけたT2を取り逃がしたことを報告するマツであったが、叱咤されることはなく、克己は笑いながら「おそらくまだ工場内にある」と予想した。

一方ナスカ・ドーパントである霧彦は、自慢の高速移動によりあっという間に3人の元へと到着、すぐさま高速の斬撃によって、一瞬にして多数のマスカレイドを退けた。

変身を解いた瞬間に京水に「颯爽と現れる白馬の王子様・・・ターニングポイントよ！」などの多大なラブコールを異常なテンションで受け、堂本が「うるさい！」と一喝、レイカは「これだから場知らずなおじさんは・・・。」と一蹴、禁句を言われた京水が激昂、といったにぎやかな様子であったが・・・。

さらにその後、克己組と同時に荘吉も合流、荘吉はこの工場の中央コントロール室に到着したらしく、その機材と一通りの機械類を破壊したため、ここはただの箱となっただけらしい。

こうしてすぐさまに8人は合流し、これからの行動を模索していたその矢先に、工場敷地内から、なにかの騒がしいモーターの駆動音が聞こえることに気付いた8人、そしてマツは勘付いた、「おそらく、回収したT2を運ぶ気だ」と。

それにうなずいた一同はすぐさま音に導かれながら、さきほどヘリが飛び立った敷地へと到着したのだが、あくまでヘリが飛び立った後、ヘリの姿はもう町の空にあり、任務は失敗、かと思われた。しかし、彼らは地獄からの使者、執念深さは折り紙つきである。

「私が追います！」

【NAZCA】

すぐさまナスカ・ドーパントへと変身した霧彦は、背中にナスカウイングを展開、これまた高速飛翔によってヘリへと一瞬で接近、ドアを斬撃で切り裂き、アタッシュケースを剣先を突きつけ要求する。

それにのうのうと従うわけにはいかない、だが、ドーパント相手に

生身の人間が太刀打ちできないのも事実、この状況で取るべき行動を考えた財団の運び屋は、手元にあるスイッチをまさぐり、すぐさまブツシュした。

それはヘリの爆破スイッチ、自爆した運び屋2人は空中で爆散、それと同時にケースの中にあつた24本のガイアメモリは、ヘリの下にたたずんでいる街、ミッドチルダのクラナガンへと散らばってしまったのだ。

霧彦が咄嗟に掴めたのは、「C」の文字が示されてある緑のメモリ、サイクロンメモリと、「U」の文字が示された、ユニコーンメモリのみ。

落ちたメモリの詳しい場所など把握できるわけもなく、一旦霧彦がメンバーの元へと帰還し、それをしぶしぶ克己へと報告する。

もし、データベースの記述が正しければ、メモリは人から人へと吸収され、街はドーパントまみれになることだろう。

それを考えた克己は、メンバーにこう述べた、否、これからやるべきことを示した。

「これから準備を整えた後、メモリが多数落ちたと思われる街、クラナガンへ突入。メモリの搜索及び発見、ドーパントの掃討によるメモリの回収を行う。」

力を求めるための搜索、そもそも、克己が回収を望んでいた「E」のメモリがない以上、克己もあきらめはしないだろう。

ドーパントを相手とするならば、自然と相手ができる荘吉、マツ、霧彦が中心となるだろう。

これから始まるハードワークに、3人は静かにため息を吐いていた。回収できたT2ガイアメモリは4本・・・C、N、S、Uのメモリ、ここに、不死身の集団NEVERの8人が始動する。

夜は明け、現在は現地時刻AM7:00過ぎ、一日のさわやかな訪

れのはずなのだが、クラナガンに平穩は訪れないようだ。
なぜならば・・・まだ、「死神のパーティータイム」は、終わりを
告げていないのだから。

u b e N e x t C o m i n g O O O ! ! C a n y o
 H E R O ?

終わりました、NEVER編。

ナスカが相変わらずかっこいいようで安心です、フィギュアのほう
は出来よかったですね。

マツはスカルでした、ある意味皮肉です、はい。

エターナル変身はまだ先、ほら、Vシネマの時も焦らされたから。

次回、またあらたなる来訪者が・・・！

ヒント：また悪役だよ！自分的には上位に食い込むかっこよさ。

はたまたライダー参入回。

また悪役、なぜまともな面子がでないかしどろもどろしている皆様・
・だが私は謝らない。

メタルフルウコオオーート!!

タイトルは参入者作品のもじり・・・この時点ではれるのかな？

ミッドチルダ現地時刻は朝の7時少し前・・・やっと人々が一日の行動の始まりである時間帯であるうか、クラナガンの住宅地にたたずんでいる一般的な一軒家、大きくもなく、かといってボロ臭くもなければ真新しくもないそれ、しばらく使用されずに半ば放置されてたそれに、3日前から2人の男性と5人の異形が住んでいる・・・正体はもちろん地球からの調査員、火野映司、伊達明、そしてグリード一行だ。

その秘密基地セーフハウスの中を覗くと・・・伊達が下着だけの姿で豪快な寝像を見せている最中、まだ夜明けからそこまで経過していなく、人の姿がない景色を、1人の青年、火野映司が不意と見る。

そしてすぐに視線を外した後、火野は再び台所へ向かう・・・のだが、どうも火野の様子に違和感を抱かざる負えないのが今。

違和感の正体・・・それは、火野の何気ない素振りが、どうも女性・・・それも艶やかさを感じさせる女性っぽいのだ。

かといって、火野がそういった方向に目覚めたわけでもなければ、舞台俳優に転向したわけでもない、ふと見ると火野の瞳が、日本人には異質な水色をしていることによく見れば気づける。

今の状態は、火野が台所で料理をしているのではなく、正確には火野に憑依しているグリードの1人、紅一点のメズールが料理をしているのだ。

事を経て火野の体に居候することとなったグリード一行、だが彼らは人の五感を感じることで人並みの感情を手に入れ、しだいに「退屈」という感情が一層と強く感じるようになったのだ。

そこで火野が考えた解決策、詰まる所の暇つぶしの方法、それはそれぞれ日ごとローテーションで、この時間帯、早朝の6時から9時までの時間帯に各々の自由行動をとってもらう、というもの。

その提案によって、こうしてメズールが当番の今日、おもむろに今自分のマイブームである地球の様々な国の名物料理の調理へと取り組んでいるのだ。

基本は地球から持参したレシピ本を参考にしているが、たまに火野からも意見をもらうこともある、それは火野が外国の色々な国をまわってきて、なおかつ名物料理に触れあってきた経験の多さからの先生役、今日は火野映司監修の本格的な海鮮リゾットを調理中である。

「なんだかいい匂いすんなあ・・・ふあ。」

「あら、おはようございます、伊達さん。」

「今日はメズールさんか・・・てか、その姿でその声はどうも違和感が・・・。」

姿と動作と声の違和感に、もはや苦笑するしかない伊達、それに苦笑で返す精神の奥深くにいる火野と調味料の量を見極めているメズール、その会話を終え、伊達が洗面台に行った後、不意と奥深くで考え事をしていたカザリが、メズールと火野に声をかけた。

「映司、映司は今まで調べてきたことをまとめて、どう思う?」

なぜこのような質問をするか・・・それは、火野一行のこの3日間 of 行動と関係する。

火野一行は、グリード達との邂逅の後、この世界についての常識、最近まで起きた出来事について様々な場所におもむいて調べていた。そして浮き彫りとなる「管理局」というワード、そして「J・S事件」・・・そして映司が一番引っ掛かったワード・・・「ロストロギア」。

なぜロストロギア・・・古代の遺失物という存在に引つ掛かりを感じたのか・・・それは火野の中にある存在・・・「コアメダル」の存在についてだ。

コアメダル・・・800年前の王が、欲望から作りだした無限の可能性を秘めたるもの・・・存在、そしてロストロギアの基準・・・失われた世界の行きすぎた、危険性のある科学の産物という記述・・・これと照らし合わせた時、火野は一つの推測を立てた、それは・・・「コアメダルとは、ロストロギアと似たようなものではないか」ということ。

同じ今は亡き技術により作られ、なおかつ危険性を孕むもの・・・もしそういった見解が管理局がなせば、もしかすると自分の存在が危ないのではないか、という不安点が急に浮上したのだ。

自分は油断すれば「無」を運ぶグリードとなる危険がある、居候のグリード一行は五感を感じつつづけてすっかり毒気が無くなり丸くなっている、が、正直自分がグリードとなった場合、はたして正気を保てるかが分からない、最低でも詳しいことがばれた時は、管理局の色々なお世話となるだろう。

その場合、居候しているグリード達はどうなるか・・・危険性のあるロストロギアと同等な存在、と判断され管理局に文字通り「管理」されるのが落ち度であろうと予測できる。

だがそれはあまりにも可哀そうだ、と映司は失礼ながらも述べたい、グリードというのは決して満たされない欲望を満たそうとする、謂わば「永遠の飢餓に苦しむ存在」だ。

そんな実情を知ったからこそ、映司の今ある、だが体を張って解放したグリード達が、もしまたなにかに「拘束」されるのだとしたら・・・あまりにも救いようがないのではないか、と映司は思う。
だからこそ・・・

「とにかく、管理局に見つからないようにした方がいいと思う。じゃ

ないと、カザリ君たちが危ないからね。」

映司が案じているのは自分の心配ではない、あくまでグリード達の今後を考えてのこと。

その返答にまったくの予想通りだったのか、カザリはため息を一つ、そしてメズールもそれに同調して、料理後の後始末に腕を動かしながら映司に一言。

「まったく・・・私達の心配も結構だけど、少しは自分の心配でもしたら？ 私達はせいぜい見つかり次第また封印で済むでしょうけど・・・あなたの場合命すら危ないのよ？」

「やめとけメズール。こいつには何言っても無駄だ・・・ともかく、その管理局とやらには、俺たちの存在がばれないようにすればいいんだろ？」

「アंकの言うとおりだ。とにかく、管理局の手が伸びる前に例のバツヤミー達とコンタクトをとればいい。その後については接触した後に考えれば・・・お、メズール、リゾット炊けてるぞ。」

「あら、結構炊けるのが早いのね。ありがとう、ウヴァ。」

「俺が一番グリードの中で視野が広いからな。」

「リゾット、うまそう。はやくたべたい。」

メズール達の言葉に、内心感謝いっぱい映司だが、こういったグリード達の様子を見ると、改めてその思いは強くなるのだ。

グリード・・・確かに、肉も内臓もなく、あるのはメダルだけの人間とは違う存在、だがこうして個々の感情や個性を持ち、人間以上

に人間臭いような面、なにより平和を愛しているところを見ていると、やはりグリードも一種の「生物」であると思えない。だからこそ映司は一層と思う・・・グリード達も、守りたい・・・そんな、無条件の救済の思いが。

映司がグリード達の心配とは反比例に決意を固める・・・その刹那、メズールがリゾットを皿に盛ろつろしたその最中であつた。

「おいメズール！頭伏せろ！」

突然アंकからの警告、そしてメズールが言うとおりに頭を下げたコンマ一秒に・・・空気の換気のため、と開けていた台所の窓、正確には空から突如・・・黒っぽい「なにか」がすごい速度で落ちてきたのだ。

映司の頭の上の空を切り、それは台所の床に着地、堅いものが何かにぶつかった音を立て、それは映司の前に現れた。

メズールはすぐさま映司と体を交代し、映司はその物体に近づく。そしてそれはかすかに見慣れたもの・・・黒と紫の中間色の長方形状の小さなもの・・・俗に言う地球の「USBメモリ」と似たようなものであつた。

「USBメモリっばいけど・・・なんだろう、この文字ミッド文字じゃなくて・・・アルファベットのJかな？」

映司は実物を手に取り、おもむろにそれをすみずみまで確認する。USBメモリらしきその物体は、アルファベットの「J」の文字があしらわれており、端子も付いている。

しかしなぜこんなものが空から落ちてきたのか、そもそもなぜアルファベット文化もなく、さらにはUSBメモリの存在もないこの世界でこれが存在するのか、正直戸惑いしかない。

・・・が、その疑念を払しょくするような大きな悲鳴が、外から聞

こえてきたのはその最中であつた。

その悲鳴が住宅地方面から聞こえると分かつた映司の行動はもちろんのごとく早かつた。

住宅地、逃げ惑う人々とは逆方向へと全力疾走で向かう映司、そしてその光景が見えた時、映司は戦慄した。

なにかの球体らしき物体、球体と言っても完全なものではなく、なぜか鉄球が付属している腕らしきものを振り回している球体らしきものが、各々のまわりの家を壊しつくしているのだ。

轟音が鳴り響き、球体は縦横無尽に、文字通り飛び回る。

が、1人だけその光景に驚いて立っている映司に意識が向いたのか、球体は映司の目の前で活動得を停止、その姿、本来の姿を現出させた。

その様、まさにふてぶてしいとしか言いようがなく、左腕にはごつい鉄球、筋肉質な人型をかるうじて模した体からは、まさに「暴力」の体現ともいふべき異形であつた。

映司が驚いたのはその姿と力でもあるが、他の要素として「相手がヤミーやグリードではない」ということ。

映司が知っている異形といえば、ヤミーやグリードといったメダル由来のもの、だからこそ半グリードの映司が感じることができるのだが、目の前にいる異形からはメダルの気配を感じない、つまりヤミーやグリードではない、ということがわかってしまう。

突如現れた謎の異形、だが映司はやるべきことをもう決めている。

このまま放置していたら怪我人・・・最悪死人が出るのは明白、だとすれば今までやってきたこと、害をなすヤミーは・・・無情ながらも倒すしかない。

映司は右腕を異形のもの、正確にはアंकのものへと変質させ、目の前に自分の体と同じサイズの火球を作り出す、その生成速度はさ

すがと言うべき早さで、映司は謎の異形に向け標準を向ける。

そしてためらいはなく、映司は火球を異形へと放った・・・が、異形に直撃したまではない、その炎と爆煙が晴れ、異形の姿を確認しようとした映司の顔が不意に戦慄した。

煙が晴れた先には・・・少々ダメージに苦しみながらも、まだやれるといった様子の異形の姿があつたからだ。

それを見た映司の判断はさらに早く、今度は左腕をウヴァのものへと変化させ、すぐさま異形に電撃を放つ。

飛び散る火花、だがその火花はあくまで見かけ倒しで、まだ直撃を受けても余裕そうな異形の様子がそこにあつた。

その後は火球と雷撃の繰り返し、試しに紫のメダルの力による氷球も試した、が一行に倒される様子はない、その様子に少々焦りを覚えたのは映司、高威力を誇るアंकの火球とウヴァの雷撃、だがそれを受けようとまだまだ余裕でいる異形の様子に、映司は恐怖ではなく、あくまで焦りを抱いていた。

自分の攻撃手段は十分に使った、がそれで対抗策が見つかりそうにない、そう「今の映司」であつたらだ。

映司は懐をまさぐり、すぐさま長方形のなにかを取り出す、が、それに映司以上の焦りを見せたのはアंकであつた。

「おい映司！オーズはやめろ！お前が一番分かつてるだろう、オーズの変身はまずいつて！」

「そんなことは分かつてる！けど、あの堅さだったらスキヤニングチャージじゃないと・・・。」

「今のお前には空き容量がないだろ！このまま俺の力でけりを付けるんだ！」

「けれど・・・！」

映司はとにかくはやく決着をつけたい気持ちでアंकも理解している、このまま時間を浪費しているだけであつたら、被害は増大の一途をたどるだけであるからだ。

焦る映司、制止するアंक、破壊しつくす異形……このまま破壊の一途をたどるだけか、と思われたその中……その「影」は現れた。

異形が鉄球を振り回し、それがまた新たな建物に向けられようとしたその最中……不意と、黒炎、どす黒い火球が、異形の体に直撃、その威力はアंकの火球とは一線引く高さで、異形は重々しい様子で吹き飛ばされる。

そして続けざまにどこから放たれる黒炎の火球、それはさらに異形のまわりや体にぶつかり、轟音を鳴り響かせる。

そしてどこからかわからないような場所から聞こえる、猛々しいなにかの生物の「咆哮」を聞いた映司はその方向に向かって視線を移すが、そこにはなにも存在しない。

だが、映司と倒れている異形の間を陣取るような形で、なにかの人影がさえぎる。

それに気づき映司が再び視線を動かすと……そこにいたのは、「騎士」であつた。

顔面は中世の騎士を彷彿とさせる仮面、その仮面から不気味に光る赤く発行する丸い複眼、といったらしいのだろうか、そういったおもむきの丸い目が見える。

ボディには要所要所に頑丈そうな鎧を装備しており、左腕には、なにかの龍らしき生物を模したバイザーが確認できる。

その姿……朝焼けに輝くには相応しくないような「黒」、それも霞んで見え、禍々しいものの欠片を感じ取ることのできる不安感を感じさせる黒、まさに「黒の騎士」が目の前に現れた。

「生命力にあふれたいい餌だ……。狩らせてもらう。」

【STRIKE VENT】
ストライク ベント

騎士は低いトーンの男性の声を発し、腰にあるベルトを思われるものについているケースから、1枚のカードを抜きだす、そして左腕にあるバイザーをスライド、抜き出したカードを挿入し、装填。その刹那、バイザーから響く、不信感募るくぐもった電子音声が響く。

そしてさらなる刹那、突如何もないはずの右腕に龍の顔を模したクローが現出したのだ。

それを確認した黒い騎士は、その圧倒的な走力によってすぐさま鉄球の異形に接近し、右腕を振り上げる、そしてそのクローによるパンチを、異形の顔面に繰り出した。

その威力も圧倒的、大きな打撃を受けた異形はまた後ずさりし、威力にちよつとした悶絶。

だが、異形がそのまま大人しくなるわけもなく、異形は怒りだした様子で鉄球を持つ腕を大きく振り上げ、鈍足ながらも精一杯の走力で騎士へと突撃する。

だが騎士はその行動も計算に入れていた。

【GUARD VENT】
ガード ベント

再びケースからカードを1枚取り出し、バイザーへと挿入、するとまた何もない場所から、龍の腹を模した黒い盾を左腕に出現させた。そして鉄球が大きく振り下ろされる地点に盾を構え、その攻撃を防御、その堅さも十分なもので、かなりの威力が予想される鉄球を難なく防いでいた。

アクシヨンの移り変わりは一瞬、騎士は暇なく迎撃を繰り出したのだ。

攻撃を防がれたことにより1、2秒静止状態を許した異形の腹に、先ほど装備したクローを接する。

そしてそのクローから黒炎の火球が放たれたのはその一瞬、つまり至近距離から強力な射撃、ゼロ距離射撃を受ける。

その攻撃に確かなそれも大きなダメージをもらってしまった異形のよるめきは一瞬ではなかった。

確かで、なおかつ大きな隙を無駄にする騎士ではない、すぐさま一定の距離を取り、ケースから1枚のカード、なにかの紋章が描かれているカードを取り出し、バイザーへ挿入する。

【FINAL VENT】
ファイナル ベント

その言葉に一層とくぐもったような感触を覚える、まさにそれは「最後の必殺技」を放とうとしていた。

なにより映司が驚いたのは・・・家の割れたガラスから、突然黒い龍が現れたことである。

何もない場所から現れた、東洋の黒い竜は、騎士のまわりを一回転し、まるで主を祝福するかのような趣でいる。

そして騎士の体は、なぜか少し地面から浮き、異形の姿を、まるで銃口を向けるスナイパーのごとく視線で標準をつけ、鋭い眼光を異形へと射し続ける。

朝焼けに鎧が包まれ、異形が恐れ慄きその場から脱つそうとしたとき、その一瞬、龍が火球を吐きつけ、異形にヒット、そして映司が驚かされた、異形の足元に、先ほど被弾した黒い火球が硬化し、異形の脱走を阻めたのだ。

矢次に空中に浮遊している騎士が、空中で一般的にいわれる「とび蹴り」の姿勢へと移行、その意思を察した黒い龍が、騎士の背後に陣取る、映司はそれを理解した、おそらくこれで終わる、と。

そして龍は、あろうことか主であろう騎士の背中に向け、全力出力の火球を放った、だが騎士はそれに拒まず・・・

「はあっ!!」

威勢のいい声を上げ、その炎を背中にまといつつ、火球を受けたことよってスピードと威力が加算されたとび蹴りを、しっかりと異形にヒットさせたのだ。

水平におけるとび蹴り、一直線に伸びる炎を描いたその蹴りの威力は、オーズのスキヤニングチャージにも劣らず、実際に異形は今までにない悲鳴を上げ、その場に伏した。

だが映司は驚きをさらに重ねることとなる、なんと伏した異形が、次の瞬間には小太りした眼鏡の男性に変わっていたのだ。

いかにも苦しそうな男性を心配し、すぐさま近づく映司、その横でその様子には似つかわしくない様で、黒の騎士は舌打ちしていた。

「ちつ・・・ただの人間か。人間では餌にできんな・・・おいそこの男。」

騎士が指す男はおそらく自分だろう、と予測した映司は騎士の方へと顔を上げる。

気がつくと、先ほどまでいた黒い龍は、いつのまにか消えていたことを気づかされたのもこの時。

「はやくそいつを病院に連れてけ。さすがに、ファイナルベントを生身で受けたらやばいからな・・・。」

そいつ、とは先ほどまで異形であった眼鏡の男性のことであろう、ファイナルベントは、おそらく先ほどの蹴り、確かに、見てただけでもすさまじい蹴りであることはわかる、なまじ先ほどのような戦闘経験がある映司にはよく理解できた。

映司は返事として大きくうなずき、それを確認した騎士は視線をす

ぐに移す、おそらくその場から離れるのであろう、それを察知した映司は、自然と待ったをかけていた。

「待つてください！・・・あなたは、一体？」

あきらかに異質な存在、それが一目でわかった映司は、気持ちそのままに尋ねる。

それに騎士はすぐさま振り向き、迷いなく答えたのだ。

「リュウガ・・・仮面ライダーリュウガ。」

その問いに呼応するかのように、遠くではさきほどの龍の咆哮が聞こえ、騎士はそれに返すかのようにその場を離れる。

残ったのは、異形であった男性、無残に破壊された住宅、割れたガラスや瓦礫・・・そして映司は気づく、男性のすぐそばに、長方形の小箱があることを。

それを手に取った映司、すみからすみまで視認した映司は、さらなる驚きを覚えることとなる。

それは紛れもなく、さきほど空から落ちてきたものと同じようなUSBメモリを象ったもの。

描かれていたのは「V」の文字、特徴も相違点が多い、おそらく同様なものだと理解する。

だが、やはりその正体はわからない、そもそもなぜこんな場所にあるかすらもだ。

・・・しかし映司は一つの予測を立てていた、それは・・・もしかすれば、このメモリが異形の正体なのではないか、という予測、そうすればなぜここに落ちていたのかが説明できる、そう、これは力ザリのヤミーと同じような「憑依する」ものなのではないか、と。

人間に憑依し、先ほどのように暴れさせる代物・・・もしその仮説が正しければ、これはとんでもないものだ、と映司は一抹の不安を

感じていた。

不意に現れたメモリ状の物体、ヤミーではない謎の異形、そして黒い龍騎士「仮面ライダーリュウガ」と鏡から現れる黒い龍……。
映司が目の前で起こり続けた「不可解」に戸惑いしか抱けない最中・
・気づいたであろうか、割れたガラスの中に、存在しないはずの
「金色の羽根」が舞っていたことを。

その日、機動六課の面々は・・・困惑の渦中に放り込まれていた。朝、深夜稼働のロングアーチが、突如発生した巨大エネルギー群の反応を多々キャッチ、早々とFWメンバーが集められ、エネルギー群の正体の調査へと踏み込んだ。

そのエネルギー量は、もはやレリクにも匹敵するもので、かとうと管理局が把握しているロストログアの暴走パターンのどれにも当てはまらない、魔力の類でもなく、最近把握されている例の未確認の反応でもない、まさに「謎」という言葉がお似合いのそれ。

さらに管理局に多々舞い込む、クラナガン住民からの連絡・・・それは「街で、謎の異形が暴れている」という悲鳴に近いものと、「謎の小箱」の発見報告、その拾われた小箱は管理局員の元へ渡り、収集次第機動六課へと運ばれる手はずとなっている。

その2つの情報から考えられるは、確証がない今では宣言できないが「その小箱らしきものが、エネルギー反応に関係あるのではないか」という仮説。

突如現れた異形と、見たことのない代物、その2つの未確認にはどんな関係があるのか、渦中に取り残されている機動六課の部隊長、八神はやては必死に頭を回していた。

例えば、早朝の7時ごろ、クラナガン上空でなにかが爆発した、という通報からことは始まっていたのかも知れない、その後、突如として現れ、クラナガンの街を破壊しつくしていく異形達、数は不明だが多いということは確かで、被害の底は計り知れない。

そしてそれとは別に、例の未確認反応を確認した現在、おそらく異形から街を守るためか、それともこの騒ぎは未確認の仕業か・・・それはまだ分からない事実だが、1つ妙なことが起こった。

それは、未確認の反応は多くても2つであった今までとは違い、ま

た新たに1つ増えていたことだ。

未確認3号とも言えるのか、だがそれを確認する前にこの騒ぎを鎮めなければならぬ。

現在クラナガンに赴いているのはFWメンバー4人、副隊長陣2人、そしてライトニング部隊隊長のフェイト・・・スターズ分隊長であるなのも、この任務への参加を申請していたが、なのはの体の状態が万全ではないため、それは自粛してもらっているのが現状。確かになのはが参加しないのはかなり痛手、だがなのはのリンカーコアはJ・S事件の一連の出来事により傷を負っている状態で、しばらくの多大な魔力行使は禁止されている、これ以上負担をかけてしまつたら、本当に魔導師生命の終わりが来てしまう。

それは、はやてもフェイトも、何より管理局全体が望んでいない、命の危険すらはらむとなればさらにだ。

「（こんな時に、何もできない自分が・・・悔しい。）」

だが、ヴィヴィオと一緒に、任務状況を聞きに来るのはの顔は、自責の念と悔しさで歪んでいた、ということを追記しなければならぬであろう。

ここは一般的に言われるクラナガンのメインストリート、通称「ガジェット通り」である。

なぜそのような名称になってしまったか、支局簡単、J・S事件の際に一番大量にガジェット群が押し寄せてきた場所であるから、という何とも不名誉な名称。

だが管理局内ではすっかりこの呼び名が定着しており、もはや住民勢にも染みわたってしまったので、訂正する気はないのである。

とにかく、このメインストリート、という名前に違和感を感じるほど人気のない現在のこの場所で、3人の人影・・・正確には、異形

1人と少女2人の影が縦横無尽に動き、轟音鳴り響いている。

少女2人の正体は、青色の魔力光が光る固有魔法「ウィングロード」の上を走っている少女スバル・ナカジマと、物陰からスバルの支援をしている少女ティアナ・ランスター、以下2人のスターズ分隊FW。

そしてウィングロードの上にいるスバルめがけて、両手から雷撃を発し、叩き落とそうとしている異形の正体こそ、とある狂人の命をかけた結果から作り出されたドーパント、天気の記憶を駆使しもの「ウエザー・ドーパント」である。

「デイバイン・・・バスターアー!!」

その掛け声とともに、中距離から放たれる砲撃、フェイクシルエツトの行使によってやっとの隙を見つけ放ったそれは、確かにウエザーに直撃したはずであった。

だが、砲撃が止んだその先にいたのは、少し砲撃にたじろぎながらも、悠然とその場に立ち、なおかつ雷撃を放射し続け、ティアナにダメージを与えようとしているウエザー・ドーパントであった。

その雷撃に対抗しようとし、さまざまプロテクションを張ったティアナであるが、何分その攻撃に反応するまでが遅すぎたこともあり即興で作り上げ、さらには自分のポジション上防御力の徹底を行っていない自分の不得意を行ったため、脆い盾は粉碎、直撃はまぬかれたものの、その威力によって体は壁にたたきつけられようとされた。

【Active Guard】

その刹那、スバルのデバイスであるマツハキヤリバーから電子音声が発せられ、それと同時にティアナが叩きつけられようとした寸前に、ティアナの背後に低速の爆風が発生、それがティアナの体の完

成を相殺する形となり、ティアナの無事は確保された。

心配そうにすぐにティアナに近寄るスバル、だがそれに「大丈夫」とだけティアナはいい、あくまで攻撃の続行を促す。

それに迷いながらも決意し、大きくうなずくスバル、その後もウィングロードからあくまで中距離魔法で牽制を続ける。

なぜ彼女が得意とする格闘戦を行わないか、それは相手の圧倒的力量と、相手の能力への警戒を含め出の行動だ。

彼女は戦闘機人という、人とは異なる存在、その存在故に人とは一線を越えて身体能力に優れている面がある、だが目の前にいる異形相手には全く歯が立たず先ほども逆にやりかえされてしまった。

ならば近距離からの砲撃、彼女のもう一つの戦闘スタイルならどうだろうかとウィングロードを行使し、ゼロ距離砲撃を試そうと尽力するが、近づくとたびに、突如異形のまわりは霧や雲に包まれ、視界がシャットアウトされ、その隙に攻撃をされてしまったり死角を突かれたりしてしまうのだ。

その結果、もはや近づくことすら許されないことを悟ったスバルは、威力不足が歪めないながらも、リボルバーシユートを繰り返している。

こんな時こそ、射撃メインでなおかつよきパートナーでもあるティアナの支援が映える、その証明に、一発だけながらも砲撃のヒットにつながる事ができたのだから。

だが少しの時間だけでも支援を受けなくなってしまったスバルに、異形の魔の手が忍び寄る。

ウィングロードを縦横無尽に走り回り、少なからずドーパントを翻弄していたスバル、だがそんな停滞した状況に嫌気がさしたのはドーパント側。

そしてスバルがほんの少し近距離範囲に侵入した瞬間、ドーパントの視線が少しばかり輝く。

それと同時に、ドーパントは腰にマウントされた固有武器「ウエザーマイン」を取り出し、それから電気を纏った鞭が伸び、スバルの

体にからみついたのは一瞬、その後スバルの体に強力な電気が感電し、スバルの動きをひるませる。

ドーパントの猛攻はまだ続く、その後からませた鞭によりウィングロードからスバルを引きずり降ろし、地面にスバルを叩きつける。そのアクションが2回、3回と繰り返され、まさに私刑状態、そのむごすぎながらも、確かな攻撃は、いくら強靱な体を持っているスバル相手でも、スバルの意識を着実に刈り取っていく。

それに黙って指をくわえているティアナではない、立ち直ったティアナはスバルを解放しようとドーパントに、自分の中では一番の砲撃、ファントムブレイザーのチャージを開始、その間隙を作ることを許されるはずだが、策士であるティアナはそれに対応策を考えていた。

それは、強固なる拘束魔法であるレストリクトロックをかけること、それはなのはから教わっていた魔法の1つで、その強度と対象の固定化には光るものがある。

少しの詠唱時間をロスしていたため、しばらく手だしが行えていなかったのだが、今は準備万端、早速とばかりにドーパントに唱えようとす、が……。

「小癪な！」

「キヤアアツ！」

それに気づいたのか、はたまた勘付いたのかは分からない、だが不穏な動きをしていたティアナに気付き、ドーパントが不意を突こうと施したのは、ティアナの頭上に雷雲を発生させること。

その能力を知らないティアナは、ドーパントの思いつぽにはまり、雷雲からの強力な雷撃を、その身そのままを受けてしまった。

地面に伏すティアナ、かろうじて意識が残っているのははたして救いか、だがしばらくは行動不能の状態へと追い詰められてしまう。

だが、ドーパントがティアナの方に一瞬だけ意識を完全に向けた時、スバルを拘束している鞭に、一筋の青の閃光が走り、スバルを解放した。

その閃光に驚きを示したのはドーパントとティアナ、なにより解放された後、その閃光に抱きかかえられたスバル。

その閃光はスバルを抱えながら、ティアナの元へと一直線に向かい、2人とドーパントの間を陣取り、その姿を現すのだ。

ナスカの記憶、ウエザー・ドーパントと同じ上級のドーパントであったもの、高速の剣士、ナスカ・ドーパントであった。

「大丈夫ですか？お譲さま方。」

「あ、その・・・ありがとう、ございます。」

ナスカの問いかけにかろうじて意識を保ち答えたスバル、それに焦るティアナであったが、ナスカはそんなティアナにスバルのことを「任せた」と一任、いきなり現れた異形に警戒心を抱きながらも、状況を考えたティアナは小さく肯定の返事を返す。

その後ティアナは自分達の保護を専念し、球体上のバリアオーバープロテクションと、自分は得意にしないながらもやらないよりはまし、と治療魔法を唱える。

それを見て、静かにうなずいたナスカは、ゆっくりとながらも、彼、霧彦の普段の様子からは考えられないほどの鋭いナイフのような殺気を放ち、悠然と立っているウエザーに迫る。

だがウエザーにはまったくのたじろぎはない、あるのは元の所有者と似たもの同士となったのか、一種の「好奇心」の類である。

「あなた・・・あの若さの少女を傷つけ、なんとも思わないのですか？」

「興味がない。私はこの偶然にも拾った力に酔いしれただけだ。邪魔をしたあいつらが悪い。」

一方的に壊しつくし、人を傷つけただけでなく、あくまで邪魔をしたものが悪い、という理不尽の塊とも言える主張に、ナスカは怒りを募らせていく。

だが、相手はメモリの力に完全におぼれた愚か者、あくまで自分はナスカを扱いし者として高貴でいよう、とナスカは深呼吸、だがナスカの怒りは、ウエザーの一言で収まるどころか増長の一途をたどるのだ。

「2人ぐらい子供が死のうと、次元世界が崩壊するわけでもなからう。どうしてそこまで必死となる？」

「・・・何？」

「そもそも、あいつらは管理局員。あの仕事に就くものが死んだとしてもそれは当たり前。あの歳で管理局員でいるのもよくある話だし、もつと若い奴らもいる。いまさら私が殺そうが殺さまいが・・・あなた・・・。」

「今・・・あなたは私の怒りの琴線に触れた。」

ナスカの迫る一步は、先ほどと違い確かな怒りを表し、それを具現化させ、一層とゆっくりながらも覇気を纏わせている。

「たとえどのようなものであっても、どのような身分であっても、どのような生まれであっても・・・若い者の未来を消す権利など誰にもない!」

それは霧彦の中にある、死人になろうとも強くある信念、そして一種の願い、未来の芽を摘み取ることなど誰でも許さない彼の宣言、そして心の中では、そんな行為に加担する財団Xへの強い宣戦布告でもあり、知らずとも遠因で関わっていた自分への戒めでもあった。それをバリア内から聞いていたティアナとスバル、特にスバルに関しては深く感銘を受けていた。

戦闘機人という存在であるスバル、その成り立ちや過程を考えるならば、色々な意味で彼女は異質な存在、一般的に言われる両親という存在は最初からなく、人とは異なる体を持ってしまった存在、そんな存在だからこそ、心ない人々から畏怖されてしまったり、人とは違う視線を受けてしまうこともしばあるのが現実。

だが目の前にいる人物は、自分のことについては知らないはず、だが迷いなく大きな声で言ってくれている、つまり本心から思っていることを言ったまで。

だが異質な存在でも受け止めよう、と言ってくれたことに、スバルは心の中で感銘を感謝を述べていた。

そんなスバルの生い立ちを知るティアナに関しても、スバルのような異質な存在でも許容の姿勢を保ち、なおかつ正義感にあふれた言葉に、彼女なりにその言葉に対し、単純ながらも感動の一言であった。

「ふん……偽善者が。」

「なんとも言うといいでしょう。ですが、消えるのは若者ではない……欲に飲み込まれた大人たち……つまりお前だ！メモリの力に囚われし者よ！」

ナスカの堂々な開戦宣言とともに、ナスカは青の閃光となり、ウェザーからはまばゆい雷光が走り回る、だがその高速移動によって、クリーンヒットしないのが現状で、少しずつでありながらも、ウェ

ザーは危機感を抱いていた。

そんなウエザーは攻撃方法を変える、それは雨上がりの虹を彷彿とさせる破壊光線、それは閃光の軌跡をたどりながら、周囲を破壊していく、だがあくまで周囲だけであり、圧倒的な高速移動によって被弾すらできない、それもそのはず、ウエザー本人がメモリの力を最大限に発揮できていないのだ。

それに対しナスカはその強靱な肉体と、なにより他に変えがたい適性を持っており、高速移動はもはや音速にすら達するのではないかと錯覚させるほど。

明らかかな力量差、それを感じ取ったウエザーは、打開策を考え・・・それは思いついてしまった。

ウエザーは突如として攻撃の手を止め、両手は・・・バリアを展開している、ティアナとスバルへと示された。

その刹那、ティアナが気づくのと同時にウエザーから虹色の破壊光線が迫る、その威力は絶大なもので生身の人間には耐えきることなど想像できない、おそらく防御力に長けないティアナのバリアでもすぐに粉碎され、クリーンヒットは歪めないであろう。

そう・・・それはあくまで「当たった時」そして「人間が」での話である。

「え・・・？」

迫る光線と2人の間を陣取るかのように現出した青の閃光、その閃光は光線の威力に耐えきれず、背面にあったビルの壁に叩きつけられる。

それが起こることまさに一瞬、刹那の時に起こった一連の出来事にティアナとスバルは思考を必死に動かし、とにかくその閃光の行き先、自分たちをかばったはずであるナスカへと視線を向ける。

・・・が、視線を向けた瞬間、少女2人は戦慄し、後悔した。

その先にいたのは、首が90度以上曲がり、手足がありえない方向

を向きながら、動かない様子でいる・・・人間であつたのだ。

「やはり餌にかかったか。ふん、まさかこのひ弱な2人の少女のために死ぬ道を選ぶとは・・・あわれな鳥よ・・・。」

「そ・・・そんな、な・・・。」

「う・・・嘘・・・うう！」

ティアナは強烈に押し寄せてくる吐き気に悶絶しながら、今までの状況を整理している。

まず、あの青の異形の正体は、おそらくそこで悲惨な様になっている男性であるとは理解できる、そこから予測できるは、目の前にいる憎らしい白の異形の正体も人間であること。

だが普通の人間が変身魔法で変身してもあそこまで桁違いな力を発揮できるはずがない、ということは何か特別な魔法を使ったか、はたまたレアスキルか、それともロストロギアか、主だった答えはこの3つに絞られるであろうが、正直それを考える暇などない。

目の前には、厄介者を処理し、今にもあの男性のような状態にしてやるうか、と迫ってくる異形、その歩く様は、まさに恐怖の言葉以外の何があるうか。

強いて言うならば、・・・救済の懇願でしかないであろう。

「（い、いやだ・・・助けて・・・!）」

「（私・・・まだギン姉にもお父さんにも会いたい・・・それに、あの子達だって家族になろうとしているこの時に・・・!）」

スバルの言う「あの子達」とは、J・S事件において主体となった戦闘機人の更生組のこと、少し前、更生施設へと行くこととなった

ナンバーズ達の何人かをナカジマ家で引き取るうか、と父であるゲンヤがつぶやいていたのだ。

それに「もちろん」と肯定の意を表したのはスバルと姉であるギンガ、同じ戦闘機人という存在である自分たちとくつつくことには、大いに意義があることだと理解しており、なにより新しく家族が増えることは万々歳なのである。

だが、それを待たずにして死へと着実に近づこうとしている今に、スバルとティアナは後悔し、なおかつ救いと恐怖しか口に出せないのだ。

「それでは・・・少女達よ、あの世で鎮魂歌を歌いなさい、私の邪魔をした罪への鎮魂歌を・・・自分たちの悲鳴で！」

その言葉と同時に向けられる両手、両名は完全なる永遠の眠り・・・「死」を覚悟した。

だが・・・それに待ったをかける存在、なによりその言葉をそっくりそのままお返しするものが・・・ウエザーの存在を・・・「斬った」。

【N A Z C A】

不意と響く電子音声、そしてその刹那に・・・再び、再来の青の閃光が横切った。

完全に油断し、警戒心を捨てていた、いわば勝利に酔いしれていたウエザーに、突如として青の閃光が空を切り、ウエザーのボディに斬を1本入れ込む。

さらにそれを把握される前に、さらなる斬を1本、また1本、また1本、それは無尽蔵とでも思えるほどに青の「斬」が斬りこまれていく。

その様はまさに圧巻、それを見た誰か、風都のヒーローをよく知っ

ているものの誰かならば言うであろうか、それはかつてウエザー・ドールパントへとマシンガンスパイクを打ち込んでいくアクセルトライアルを彷彿とさせるものであった、と……。

ウエザーは蓄積されていくダメージに、これ以上にならない危機感と恐怖を覚える、だが体が動こうとするまえに、閃光がアクションを許さない。

ウエザーは自分の身が終わりへと着実に迫る恐怖にうち震えている、そう、これがスバルとティアナ両名が抱いていた恐怖であり、与えていた恐怖でもあるのだ。

そしてナスカは、最期の締めとして、ナスカブレードに青のエネルギーを込め、3回の思い切った斬撃を行う、それは「N」の字を描いていた。

己のやったことは己に帰ってくる、まさにそれで、ウエザーは……その身を散らそうとしていた。

「次は……あなたが恐怖におびえる番です。」

「き、貴様……！なぜ、なぜ！うぐああー！！！」

地面に倒れるウエザー・ドールパント、そしてドールパントの体からメモリ、「W」のメモリが排出され、ドールパントの主は人間の体へと戻る。

そこに倒れていたのはやせ気味の男性、白衣を着ているところから科学者の類なのであろうか。

しかし、変身を解いた霧彦にはそんなことなど興味はない、あるのは2人の少女の心配と、この男をどうするか、正直この場で殺しても造作ないのだが、目の前に管理局員がいる場で殺せば面倒なことになるのは確実、面倒事は作りたくないのが現状であり、なおかつ、NEVERである自分の体が酵素不足、つまり「限界」を示している。

「（・・・まあ、背骨と首、手足の複雑骨折からの再生はかなり無理をしましたし、そろそろ限界。その男、命拾いをしましたね。）

「すぐさまアジトに戻ろう、と決めた霧彦は、すぐさま男のそばに落ちていた「W」のメモリを回収、懐にしまった後に、2人の少女に目配せをする。

幸い命に関わるような怪我でもなさそうで、一番ひどいダメージを受けていた青髪のショートカットの少女も意識を完全に覚醒させている。

オレンジ髪のツインテール少女が治療魔法を必死に続けていた成果であろうか、それとも・・・ショートカット少女の腕からはみ出している、機械的な部分のおかげであろうか、だが無理に突っ込む霧彦ではない、それが野暮であることを知っているからだ。

だが一介の1人の少女、1つの未来の異質な形を垣間見た霧彦は、その犯人に静かな憎悪を抱きながら、体が崩壊崩壊する前に急いでアジトへと足を運ばせよう、と思った矢先、背後、2人の少女のうちの1人、ティアナから声をかけられたのは、その時であった。

「あ、その・・・まずは、助けられてありがとうございました。でもあなたに聞きたいことがあります。」

「・・・多分、答えないと思うけどな。」

「・・・まず、あの化け物について、なにか知っていることはありますか？正体が人間だ、ということは分かったのですが・・・。」

遠回しに返答の意思はない、と伝えた霧彦を気にせず、あくまで質問を続けるティアナ。

だが、霧彦自身、ガイアメモリについての情報がない管理局から聞かれる質問など、大抵予想できるものであった。

「……知ってるけど、答える義務はない。」

「……では、質問を変えます。あなたは、先ほど確かに……その……。」

死んでいた、という言葉が続くのは明白、確かにあんな惨状を見た後、その人間が悠然と立っている姿を見れば誰だって違和感を抱くであろう。

……この場合は、言葉そのままに言えばいいであろう。

「簡単な答えです。僕は死んでいます。以上です。それでは、あなたがたは一応本拠地に戻った方がいい。私の仲間たちが、あの怪物を処理してくれているはずですから。」

「え？あつ、ちょっと待つてください……！」

ティアナの制止を振り切り、霧彦はナスカ・ドーパントに変身、ナスカウイングを雄々しく開き、閃光となり空へと遠く飛び立ってしまった。

そして結果として、ティアナとスバルの心中には、ただただ、答えは出ないであろう問いが多々たたずんでいるだけであった。

突如現れた「人間が変身する怪物」、「自分は死人」だと言った不死身の男、このミッドチルダに、確実に大きな異変が生じている、とミッドの人間は気づき始める。

そしてそれは……「虚像」の世界においても、「イレギュラー」

は近づいていたのである。

「駄目！私も変身する！」

「駄目です！いくらなんでも危険です！」

とある世界に響く女性2人の声、とはいえども声の主の一方は成人に前後の女性の声、もう一方はまだ10代にもなっていない幼子の声、幼子は鏡の目の前の光景に足をジタバタしながら狼藉し、女性はそれを制止し続けている。

幼子が狼藉、「変身したい」という意思表示をしている理由・・・それは目の前の光景、クラナガンの街を謎の異形が暴れまわり、人を傷つけている様に対して、自分の中にある正義感、詰まる所「何とかしたい」という行動への意思であろう。

だがいくら「変身」したとしても、中身はただの幼子に過ぎず、命の危険が張り巡らされているこの状況に投げ出すわけにはいかない、さらに制止している女性がこの幼子の保護者であればなおさらだ。そもそも、目の前の鏡であるはずの光景が、なぜ実像と違う動きをしているか、本来ならばこの女性2人を静かに写すものでしかない鏡がこんな光景を写し込んでいるのか・・・機転を変えてみれば、案外答えは見つかるかもしれない。

支局簡単、この鏡がある世界が実像ではなく「虚像」の世界ではなく、鏡に写しだされている光景こそ「実像」の世界なのである。

彼女らは虚像、いわば「鏡」の世界の住人、そんなもの非科学的だと誰かは言うであろうが、確かに「それ」はここに存在している・・・それがいくら「脆いもの」であってもだ。

幼子・・・金髪の幼子が目の前に人が傷ついている現実に対しての行動、それを制止する茶髪の女性、世界観以外であつたらこの状況

でありえることだ、だがしかしここは実像ではない・・・その幼子の狼藉に呼応し、心配そうに2人を見ている、または同じように制止の意を表し咆哮する・・・異形とも呼べる「動物」がそこにいた。赤いものや黒いもの、竜や鱗、はたまた人を超えるサイズの毒蛇まで様々、しかしただの動物であつたらまだ説明がつくが、この動物達は完全に「異質」な存在だ。

一見この動物らが2人を襲おうとしている図にも見えなくても、この動物らにはそんな気などさらさらない、なぜかと言えば、この2人にも、多数の異形にも、お互いに「家族」であるという認識があり、お互いに「家族愛」というものがあるからだ。

「キィィィー！」

「ほら、ダークウイングも止めてますよ。(おそらく)お姉さんが監視を任せていたのでしょうけど・・・)」

「うう〜。」

他にも咆哮から鳴き声とは許容しにくい声まで、一斉に幼子を心配する声が多々上がる。

そしてそれに賛同する意を表すかのように、この異質な空間「虚像」の世界に、とある男とその男のそばについていく成人前後だと予想できるもう1人の女性が降り立った。

「気持ちはわかる。だがもう少し”戦い”に慣れてからああいうことはするんだ。怪我をさせたくない。それは・・・ミラーモンスター達も同じだ。」

「そうそう。ここはオーディンとお姉さん・・・それに、リュウガ、真司君も戦ってくれてるから。」

「……土郎おじちゃんや優衣さんの言うことも分かる……けれど……。」

けれど行動せずにはいられない、後に続く言葉は明白である、だが一般的な幼子にこんな危ない仕事……謎の異形の始末など任せられるはずがない。

決してこの子の背中を任せるミラーモンスターを信用していないわけではない、だが子供に危険なことをさせるのは、そばにいる優衣とよばれた女性や、幼子の保護者である女性、そして幼子の姉、その姉妹の兄的存在である……真司が納得していない。

そもそもその姉が戦うことに関しても渋々、それもあまりにもその子が頑固であつたために許可せざる負えなかつた真司の顔を見ればその思いは確かだ、と理解できる。

その子はまだ戦闘経験があり、素質も多々あつた、だが目の前にいるこの幼子は完全に子供だ。

……どうにか納得させるきっかけはないものか……そんなことを思っている最中、幼子が大きな声を上げたのは一瞬であつた。

「ああ！エリオさんとキャラ口さんが！」

エリオ、キャラ口、確か実像の世界の住人、フエイト・Ｔ・ハラオウンの保護児童……なるほど、確かに、この子たちにはよく目をやっていたし、なおかつ「仲良くなりたい」とも口ずさんでいた。

なぜその子らの名を高らかに叫んだか……それは、鏡に写しだされる光景を見れば納得できるであろう。

その光景、まさに轟炎に包まれ、虚像からでもその温度がひしひしと伝わりそうな様……白竜が、火球や轟炎を吐きつくし、本来の主である存在に牙を剥いている様であつた。

これに違和感を抱いたのは幼子の保護者である女性、女性はフェイトのまわりに関してよく調べており、大体のことに関しては把握しているからこそ抱く違和感。

なぜ使役される身である白竜フリードが、主である少女キャロ・ル・ルシエに牙を剥いているか、同じような「動物」であるからこそ女性には分かるが、明らかにフリードの意思は感じ取れないことが分かる、とすればこれはキャロ自身がフリードの制御をできていないのではなく・・・誰かに「操られている」こと、つまりは「支配」に近い「契約」のカードに近いものであるうか。

もしその仮説が成り立つとしたら、この近くで「操作」を行っているなにかがいるはず・・・しかしただでさえ高等かつ強い魔法の一種である召喚魔法の「絆」を断ち切るまでになおかつ強い支配力、魔法の場合召喚魔法に関しては攪乱でしか根本的に対抗できない、完全に支配することなど普通の所業ではないことが分かってしまう、それは女性自身魔法の知識に長けているから。

・・・つまりは、なにか「異質な力」が暗躍している、ということだ。

「（その支配者を見つければ・・・。）」

仮説を確証へと変えるためには、早速行動が必要・・・そんなことを錯綜させていた時、不意とそばに現れたのは緑を基調としたカメレオン型のミラーモンスター・・・バイオグリーザだ。

そういえば先ほどから姿が見えない、と女性が気づく最中に、グリーザは舌を器用に使い、なにか手招きに近い動作をする・・・おそらく「ついてこい」というジェスチャーなのだろうか。

その手招きに呼応し、女性は実像と虚像の狭間に存在するダイヤモンド・ホールを歩く。

そして間もないころに、グリーザは不意と足を止め、また器用な舌でとある鏡面を示す、これの意はおそらく「これを見る」であろう

か。

そしてその鏡面に写された・・・顔と手を異質なものと変化させた異形と、異形の怪しげな動作を見て、女性はグリーザの伝えたいことと、これから為すべきことが一斉に理解できた。

「ありがとうグリーザ、やっぱり諜報ならお任せですね。」

それは過言ではない、実際にそのような活動にはうってつけな能力ではあるし、結果も今現在しめしている。

その言葉に満足したのか、グリーザは一層に長く舌を出し「どういたしまして」の意を伝えると、その姿をふと消した、いきなり姿が消えたことに彼女は違和感を抱かない、これはグリーザの能力でもありグリーザの癖でもあるからだ。

その姿があつた場所から目を離し、女性はもう一度鏡面、要は実像の世界の様を確認する。

顔にでかかどと不気味な仮面をかぶり、くすくすを笑いながら怪しげで、理解しがたい動作を繰り返している、動作にはどのような意味があるか分からないが、おそらくこの異形こそが白竜を支配している正体であろうか、と予測できる。

しかしどちらにしろ、異形となると害をなす存在であろうか、という認識もあり、どちらにしろ放つてはおけない、ジャストとして士郎と呼ばれた男と優衣とよばれた女性、この世界の守護者も来てくれた際、あの幼子のこともしばらくは任せられるであろう。

そう思い、女性は手元に長方形の物体を握りしめ、これから戦いに赴く決意を示す、それに呼応しすぐさま駆けつけたのは、相棒である白虎型のミラーモンスター・・・デストワイルダー。

そのワイルダーの姿を見た女性は、もう一度決意を示すかのようなうなずきを行い・・・鎧をまとう覚悟を、高らかに叫ぶのだ。

「変身！」

装着されたVバックルに装填されるデツキケース、そして鏡面の世界の獣の戦士・・・仮面ライダータイガ、現出。

そして不意と現れた、タイガの武器である斧型の召喚機、ワイルダ―を象った斧「デストバイザー」を見つめ、少々のシンキングタイム・・・その後に判断を下したのか、タイガはバックルに装填されているデツキケースから、一枚のカードを取り出した。

「まずは・・・あの子達を助けるのが先ね。」

【FREEZE VENT】

タイガの召喚機、デストバイザーのカードリーダーをスライドすることで表し、リーダーにカードを挿入し、スライドした途端に響く電子音声、それと同時に白竜の猛る咆哮は実像の世界から消え、そこには・・・白竜フリードの氷漬け、氷のモニュメントが存在した。いきなりの自体にキャロとエリオは実像の世界において焦りを見せられているが、キャロは召喚士故に精神をリンクさせている、キャロには、まだフリードは生きていることは理解できているであろう。

アルザスの竜は生命力が強い、しばらくは圧倒的な冷気に耐えられるであろうが、1日でも放置すれば危ういであろう、しかし長時間煩わせる気など、タイガにはさらさらない、実像で2人の少年少女が焦っているのをよそに、タイガは不意と先ほど確認した異形の様子を見る。

「なぜだ！？なぜ動かん！？」

いかんせん状況がつかめていないようで、異形・・・パペティアー・ドーパントは不気味な動作を必死に繰り返していた、そしてその様

子と、パペティアーの白い手袋が装着されている両手から・・・フリーズベントの冷気によって氷が張っている細い「糸」を視認できた。おそらくこの「糸」によって白竜を操作していたのだと予測できる。つまり最低でもこの異形が白竜の暴走に関係あることが明白となった。

「（なるほど・・・さしずめ”人形使い”という名がお似合いのようです。しかし・・・。）」

人形を失った人形使いなど、もはや失職同然、詰まる所・・・ほぼ「手詰まり」であると思いたい、とタイガは心の中でつぶやく。

パペティアーはあくまで「支配」にこだわるところから「支配欲」に囚われているのであるうか、だとすればそれは「愚者」の類である。

そもそもなぜ異形の姿を確認できるか・・・それはパペティアーが湖畔のそばにいたから、おそらく白竜の暴走による火の被害を考慮したのであるうか、だが・・・鏡面、いわば姿を写す「水」のそばにいたことが、パペティアーの命取りとなった。

「その悲しいまでの支配欲・・・終わらせませす。」

【FINAL VENT】

最後の必殺技・・・電子音声は一層と虚像の世界に響き、それを示す。

そしてその意を受け取ったデストワイルダーは、けたましい咆哮を上げ、ディメンション・ホールから湖の鏡面を通じて・・・実像の世界に飛び出すのだ。

しかし勢いよく飛び出したのは一瞬、それも明確にパペティアーの目の前に現れたのはデストワイルダーだ。

「何者!？」

パペティアーは、目の前に不意と現れた存在、白虎の姿を基調としているが、どこか人工的な装いを感じさせる異質な存在に困惑、しかしその困惑こそが、完全なる「奇襲」の成功を助長させる、要は隙を生じさせることでしかなかった。

ワイルダーはもう一度咆哮を上げた後に、パペティアーを地面に倒し、パペティアーのボディにたくましい爪、虎の誇りである爪を突き刺す、それに声を上げるパペティアーであつたがこれから「必殺」となるのだ。

その後も声を発し続けるパペティアーの意思を無視し、ワイルダーは地面を引きずりながら・・・静かに待機していたタイガ、主の元へと「獲物」を差し出すかの如く接近、そして悶絶するパペティアーを・・・空中に放り投げた。

痛み終わりを錯覚したパペティアーは一瞬のみ安心感に包まれるが・・・また一瞬にして、その甘い考えは間違つていたことに気づかされる。

空中に放り込まれたパペティアーの体を、タイガがストライクベントによって現出させた「デストクロー」によってキヤッチ、その鋭利さによる先ほどとは違った激痛に悶え、苦しむパペティアー。

だがタイガにためらいは無い、それは静かに燃やしていた怒りの感情、あんな幼い子に牙を剥き、なおかつ仲間によって手を下したこの存在には、彼女に不相応な怒りを燃やしていたのである、故にだ。キヤッチされたことにより空中に静止したパペティアー、しかし彼は恐怖していた・・・それもそうであろう、自分の体の周囲の水分が・・・かなりの早さで氷結していつているのだから。

相乗として冷たくなっていくパペティアーの体、そして「必殺」は・

・ゆつくりと完遂されようとしていた。

「うぐ・・・うぐああー！！」

一層と響く悲鳴、その刹那にパペティアーの周囲の水分は一気に膨張、つまり爆発したのだ、それもかなりの勢いと威力を発生させてでの所業、まさに「必殺の奇襲」である。

悲鳴が上がった後に地面に下ろされるパペティアー・・・かと思われたのだが、異形の姿はそこにはなく、あるのはどこかの民族衣装らしき服装である中年の男性の姿であった。

異形であった者が急に人間へと変わった、だがタイガは驚くことなく「やはり」とつぶやいていた。

事前にクラナガンを中心として発生している「異形」の正体が人間である可能性が高い、という情報をリュウガ・・・真司から聞いていたため、このことに関しては予想できたのであろう。

その証拠として、本来「体内の」水分を氷結、膨張させるクリスタルブレイクを、工夫して周囲の水分へと対象を変えることによって、異形の正体の即死を防いだのであったのだから。

その気遣いの意味、意味など支局簡単、体内で水分を氷結、はたまた膨張などさせたら、いくら異形に変身していても命の保証などほとんどできないからだ。

地面に伏し、意気はしているものの苦しんでいる様子の男性を確認したタイガ、もとい彼女は変身を解除、自分の制限時間を見合わせ、急いだ様子で男性のもとへとかけより、手をかざす・・・魔力光が発光しているところから、治療魔法をかけていると魔導師であったら理解できるであろう。

手をかざしながら、視線はそばの森林地帯へと移す、そこには先ほどの白竜の暴走によって、焼け野原と化している森林地帯があった。

いかんせん場所も悪く、延焼は進む一方・・・かと思われたのだが、ふと空をン見上げると、ぼつぼつと人の影が見える、おそらく被害の通報を受けた航空魔導師の救援であろう、おそらくこの人数であったら心配はいらない、とほつと胸をなでおろす女性、そしてなでおろした手を確認すると・・・虚像の住人であるからこそこの現象、実像でのタイムリミットを示す「粒子化」の最中であった。

リミットを伝えられた女性は、治癒中の男性の顔をみやる、少しだけではあるが穏やかな顔になったことで女性は安心し、さらには魔導師もやってきたので、ここで放置していても拾われるであろう、と判断、どちらかと言えば姿を見られると色々と面倒なこととなるので素早く帰ろう、と女性は小走りで鏡面・・・湖の水面へと飛び込んだ。

しかし、「飛び込んだ」という動作から予測できる類の水が波打つ音が発することはなく、あるのは・・・遠くから、暴走によって疲れ果てたフリードに心配そうに治療魔法をかける少年少女の2人の姿・・・キャロとエリオの姿を見るいくつかの影であった。

魔法が通じぬ相手、異形が大量に発生した日、管理局は混乱の一途をたどるばかりであった。

先述のとおり、魔法攻撃が通じず、やり放題を強制され、抵抗しようとして沈黙させようと奮戦した魔導師は大負傷した体を共に帰ってくるだけ、中には意識不明となるものも出てしまった。

それは前線として戦っていた機動六課のメンバーも同じ、スターズ分隊のFWスバルとティアナは両名とも中程度の負傷、ライトニング分隊のFWエリオとキャロは両名とも中小の火傷や打撲、しかし一番大きいのは心の傷であろう・・・キャロに至っては。

その怪我の原因は、あるうことか自分の使役している竜によって被ったものなのであるから。

しかし使役竜のフリードの暴走の原因が不明、原因と真つ先に考えられる「召喚魔法の失敗」は、当時キャラのメンタルはブルーパターン・・・安定していたことからはぶかれることとなる、つまりキャラが原因でフリードの暴走に至った可能性は低いと考えられている。

しかし「おそらく自分にある」と幼い気持ち、優しい気持ちによって責任を抱え込んだキャラは、自責の念によって塞ぎこみな状況、おそらくフリードをかばっていることもあるであろうが、何より自分の使役竜によって焼け野原となった森林地帯の様を見たせいもあるであろう。

しかしキャラとエリオにはさらなる悲報が、酷にも待っていた・・・自分たちの保護者であるフェイトが、大怪我に至ったのだ。

意識は不明、骨折箇所も多々あり、なおかつ強く頭を打ってしまった、峠は越えたはずだが自分の親代わりの存在がそんな状態になってしまったら心配するしかないであろう。

そしてフェイトは「親的な存在」の他にも「親友」という存在でもある・・・親友である高町なのはと八神はやては、その悲報に驚きと不安を隠せずにはいられなかった・・・特にめばしいのは、高町なのはであろう。

他の前線メンバーがスクランブルに駆り出される中、1人だけ傍観する存在であったなのは、ただでさえ悔しい思いは身にしてみているはず、さらには自分が欠員のなかでの親友の重体、これらの条件が重なったことによって、なのははキャラと同じく自責の念を抱え込んでいた。

自分がいなかったせいだ、自分の力が至らなかったから・・・繰り返される負の感情、自分の欠員によってスターズ分隊の2人を、そして親友を傷つけてしまった・・・自責の言葉は次なる自責しか生まない、そしてそれらはさらなる「負」を生み出すしかないのである。

前線メンバーの負傷、再起不能、それらが頻発し、異形達の暴走を許すしかないのか・・・無力さを噛みしめる中、それらは現れた。颯爽と現れ、異形を倒し、それまた颯爽と去っていく・・・異形の姿を確認しているのである、それも多数だ。

管理局員から始まり一般市民まで、目撃証言は多数湧き上がる、特徴もまちまちで、「動く骸」、「金色の軟体動物」、「青の狙撃手」・・・など。

それらに共通するのは、皆「人並みからはるかにはずれた身体能力、力があること」、そして「異形である」ということ。

実際にカメラに収められている異形の姿もあり、それを確認しているのがロングアーチの面々である。

突如として現れた暴走の異形と討伐の異形、対立する未知の存在・・・今回の事件に関しては「連続未確認発生事件」という仮称がつけられることとなった。

今は証言と映像を照らし合わせ、これからの対処を決めていくことがひとつ・・・だが面倒な問題が山積みされてしまっているのが現状、なにより面倒なのが・・・暴走していた異形達の正体が人間であった、ということだ。

正確にはこのような被害に陥った犯人自体は・・・一つの「メモリ」である。

経緯は不明瞭だが、異形が倒された現場からは必ず「それ」が見つかり、なおかつそれらが確認されたのが異形発生とほぼ同時、いち早く推理していた人物はいくらかいたが、今回はビンゴだそうだ。しかしもっと厄介な問題・・・それは異形に変質させられていた人間が、一同口をそろえて「異形変質後の記憶があいまいである」ということ、おかげさまでその人物を容疑者として送検できず、事後処理が混迷を極めている。

当日夜、機動六課部隊長八神はやても、この件に至ってはほとほと

困り果てていた。

先述のことももちろん、一番手痛かったのは前線メンバーに欠員が出てしまったこと、スターズ分隊のFWであるスバルはあまりにも要所要所の損傷が激しかったため相応の施設で治療予定、ライトニング分隊の隊長のフェイトは依然意識不明、同分隊のFWのキャロはメンタルを考えると厳しいし、述べてはいなかったが両分隊の副隊長2人も1週間は満足に働けない現状、この状況でまたこのような騒ぎが起きてしまったら・・・難ということを見ると、はやては頭を痛ませる。

しかし事態の停滞は避けなければならない、明日からはやらなければならぬ事というものが多々ありすぎる、このような事態がしばらくは起きてくれないことを祈る・・・だが神頼みなのはそこまでである。

ここからははやての「統括者」としての腕の見せ所である、まず考えるべき問題・・・いくつかあるが、やはり欠員の補充が優先されるか。

・・・だがこの状況、他の部隊においても欠員の発生は歪めない、つまりうかつに補充の要請もできないのが今、「未確認相手を主として現在は活動しているから人をくれ」と口にはだせない、それは他の部隊も同じなのであるから。

しかし、多少の無理は承知の上でも頼み込むしかないであろう、とはやては大きな深呼吸1つ・・・バツクの中で熟睡しているリインをなで、多少の癒しを求めた後に、再び書類群に目を向ける。

【P i P i P i...】

だがそれと同時に、メールの着信音が鳴ったのは夜が一層と静まり返り深みを増す最中のことであった。

さしずめ管理局内の誰かであろう、と特に重苦しい様子もなくメー

ルを開く・・・のだが、中身は見知らぬ人物から、それもここはミッドにも関わらず日本語でのメールだ。

詰まる所、自分八神はやてが日本人であることを知っている、なおかつ日本に精通している・・・そして差出人の項目に書かれているとある企業の名を見て、なんとなく理解した。

鴻上フアウンデーション・・・確か唯一ミッドと地球の貿易を受け持つ公認企業。

と、なると名の知れている機動六課の内状を知っていても不思議ではないし、日本語でメールを打つたのも身分をあらわすのに手取り早いからであろう。

・・・だが問題は、メールの内容であった。

「『2日後に、機動六課上層部とのモニター会談を所望します。時刻はそちらの判断を仰ぎます。会談の内容はそちらの状況に関することであり、できる限り承認を願いたい所存です。・・・鴻上フアウンデーション会長 鴻上光生』・・・なんでや？」

なぜこのようなタイミングで、今までミッドの地上を主として活動してきた機動六課相手に、なぜ「海」の管轄ではなく「陸」の管轄の部隊に会談したいのか・・・タイミングを考えるならば、もしかすれば・・・。

「未確認の発生に・・・関係あるのかいな？」

もしかすれば、なにか重要な情報を手に入れる手口となるのであるが・・・本来ならば事態が事態で拒否の意を示したいところであるが・・・今の切羽詰まった現状を考えるならば、ギャンブルでもありか・・・とはやては考えていた。

それほど、今回の事態は「未確認」であり、危険気まわりない「未知との遭遇」でしかないのだから。

u
b
e
H
E
R
O
?
N
e
x
t
C
o
m
i
n
g
O
O
O
!
!
C
a
n
y
o

ドーパント大暴れ& a m p・まさかのミラーワールド勢の乱入回。

ミラーワールドの住人は「タイガ」に変身する「幼女」の保護者、謎の幼女、幼女の姉、真司(と言っても今のところは虚像か実像か不明)、後はみんな大好き神埼優衣と神崎士郎+愉快なミラーモンスター達。

VENTカードは色々と改造されています(対象の変更、出力の調整等)、その過程には色々と合ったのですが・・・それは後に話すこととなるでしょう。

そして謎に包まれている住人の正体に驚くこと間違いなし・・・だと思いたいです。

紫グリード「出番が欲しいです。」

バッタヤミー「同上」

映司一行「俺も…ちょっと微妙だなあ。」

仮称「未確認連続発生事件」から2日後：機動六課のブリーフィングルームは、主だったメンバー一同が集合していた。

機動六課部隊長八神はやて、スターズ分隊の隊長高町なのは、同分隊副隊長のヴィータ、ライトニング分隊からは副隊長であるシグナム、本来ならば隊長であるフェイトも参加するはずだが、今だ意識不明の状態が続いているのが現状だ、そこにプラスとしてロングアーチの代表兼部隊長補佐としてリインフォース？、人数は多いとは言えないが、ここにいるメンバーは六課の中心人物とも言える者たちであることは確か、さらに追記するならば、およそ1ヶ月前の例の事件やメディアの格好の的であったことも含め、有名人ぞろいでもある。

まだ落ちかけてはいない日により、室内は海沿いという地理条件も相まってか日光というものがよくよく染みわたる、だがその穏やかであるはずの光など、この雰囲気により払拭されてしまうことである。

…一同の視線は、あくまで穏やかに笑顔を作る存在、どうも異質な雰囲気醸し出す謎の男性に集約され、なおかつ素性不明であることから不信感を仰いでいる状況なのだ。

特にヴィータの視線といたら、彼女の良くも悪くも「目」で感情が出る性格から文字通り敵意むき出し、それもかなり毒気のあるものであり、一般人には少々きついものであるのだが、それも謎の男性はあくまで笑顔で受け止め、歴戦の剣士であるシグナムの鋭い視線は受け流している、といたらいいのであろうか。

しかし統括者であるはやては、あくまで感情をひた隠しにする表情を作り上げ、依然として毅然でいる、これは彼女なりの処世術でもあり、人の成長過程で大多数の人物が必要とされてしまう副産物でもある、人と人が関わり合う社会において、必要とされてしまうス

キルの一つ。

そのスキルを会得しているのははやてだけではなく、おそらくこの男もその方面に長ける人物だ。

お互いに言葉を介さない状況、その気まずさに精神年齢幼いリインはおどおどするのみ、これでは埒が明かない、と妥当な判断を下したはやては、開口一番を飾った。

「…確認させてもらいます。あなたは鴻上会長の命を受けてここにやってきた、ということでもよろしいのでしょうか？」

「相違ありません。しかし、自分がやってくることを伝えていないとは…いやはや、鴻上会長も人間らしい部分を見せる。」

人間らしい部分をみせる、とこの男…須藤霧彦は言っているが、鴻上の言動や挙動を良く見知っている人から言わせてもらえれば、彼ほど「偏って人間臭い部分」を特化した人物は世にいないであろう…いたとすれば、歪んだ欲望を開花させた…ジェル・スカリエツティぐらいか。

この須藤霧彦という男、どうやら鴻上会長の協力者であり、この世界にはとある目的があつてやってきたらしい、という話まで聞いたが、どうも自分の「正体」に関しては依然ぼかしている、というより核心である「芯」を見せてくれない。

正直、話術相手には回したくない、というよりははやてのまだ若干である人生経験を引つ提げても、この男の「言葉」には勝てないであろう、とはやては人物像を分析する。

…だが、いくら観察眼鋭いはやてでも…この男の行動だけは読めないであろう。

『霧彦君にはサブライイズ！で来てもらったよ！八神はやて二等陸佐！』

ブリーフィングルームの大きな電子画面に突然映し出される年増の男性の顔、部屋の存在目的から必要であった外部スピーカーから発せられる大音量の声、何よりその男性：鴻上光生の異常なテンションと、事態の突飛さから思わず全員がこの上ない驚きを示す。

サブライズ

surprise…この場にいる者を驚かすことには成功したよう、おかげさまで鴻上はまるで悪戯に成功したような子供の笑顔を見せている…いや、実際にその顔と同じだ。

行動力のある「悪戯好き」ほど傍迷惑な存在は無い。

『初めまして機動六課の諸君！私が鴻上ファウンデーション会長の鴻上光生だ！』

「…初めまして。機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐です。」

はやてはその紹介に呼応し、椅子から立ち上がり敬礼、いきなりの進展にどぎまぎしながらも他の六課メンバーもおもむろに敬礼を行う、その最中でも鴻上は笑顔を崩さない。

『本日は、君たちの部隊長さんから聞いていると思うが…先日の“例の事件”に関して、少し話があるのだよ。』

この言葉にはやては確信めいた仮説を「定説」へと推し進めることができた、やはりなにかの情報…例の異形達の情報を掴んでいるのだ、この男は。

その確証を心に留めたところでこの男の顔を見ると、どうも何もかも見透かされえいるようで恐怖すら覚える、おそらく事前に事態を予想していたのか、はたまた勘が鋭いだけか、そちらに関しての判断はこれからでも遅くはないだろう。

「例の…と、申しますと、やはり…。」

『お察しのとおり！今回は君達！平和と秩序を守る時空管理局でも今一番輝いている機動六課の皆さま方に！とっつ…ておき！の情報を提供しに来た！んうー…霧彦君！彼から説明を受けてくれ！』

徐々にテンションをウナギ登りしていく会長が名指したのは、他でもない素性不明の男須藤霧彦、先ほども名前を呼び、今回も名指された…つまりこの人物が最低でも会長の使いであることは間違いないであろう。

その名指しを受け霧彦は笑顔でうなずく、おそらくこのジエスチャ―は了解の意、それと同時に霧彦はなぜ自分が呼ばれたか理解できた、元敏腕のガイアメモリセールスマンである自分の腕の見せ所、まさに適役であるからだ。

だが霧彦がおもむろに懐を探り、とあるものを探していた最中、マナーモードに設定されてあるこちらの世界の通信端末のバイブが鳴る…そしてそれを察した鴻上は小さくウインク…この一連の出来事と動作のパズルによって「なにか」を察知した霧彦は、失礼とは分かりながらも視線を端末の画面へ、そして画面を見やった後に「悟られまい」とすぐに端末をポケットにやり、再び懐を探り出す。

目当ての物はすぐに見つかった…長方形の物体、人から言わせてもらえれば「小箱」とも言える代物、その形状は地球でいう「USBメモリ」を象り、物体にでかかど書かれてあるなにかを意識させたデザインのアルフアベットに思わず視線を向けてしまう。

六課のメンバー一同、特に「解析」を頼んでいたロングアーチと打ち合わせを繰り返していたはやとリンならこれとほとんど一致する特徴のものをあきれるほど見た…異形とほぼ同時に現出された

「未確認」

という名称の対象の1つでもある、コードネーム仮称または通称「U・

メモリ

M」…霧彦はそれを手に持ち、人の視線に入るよう見やすい高さで

かかげる。

なぜそれを持っているのか、と六課一同はもちろんのごとく疑問を持ったが、代物を持っていることはそれをよく知り、なおかつ使い方も知っている、という可能性と同義である。故に皆は言葉に出さない。

「これはガイアメモリ、と呼ばれる代物。第97管理外世界、現地名称”地球”、それもあなたがたがよく知っているであろう”日本”のとある街の暗部で流通されている…ちょっとした”アイテム”です。」

地球産の代物、複数の条件からその事実はある程度予測できたが、やはり焦りの色が少しだけ空気に混じる、この事実から出てくる様々な疑問に対しても向けられている感情だ。

空気の变化を感じ取る霧彦…しかしそこにためらいもなく、再び口を開く。

「おそらくある程度把握している、とは思いますが、これの厄介なところは…使えば、たちまち人間を化け物に変えてしまうこと。私達ガイアメモリ調査機関「NEVER」は鴻上会長の命、ガイアメモリの調査及びガイアメモリによる被害を未然に防ぐために、ここミッドチルダへとやってきました。」

この言葉、事実もはや予測されていたものであるが、その厄介…というよりかは「凶悪かつ危険」であるそれに、六課は戦慄した。ひとたび使用すればたとえ魔力のない人間でも魔導師以上の力を得る「アイテム」…おそらくこの「アイテム」という言葉も、皮肉交じりである。

「2日前、クラナガンを中心として散布されたメモリは新型のメモリで、特殊な処置なしで扱ってしまう、という危険極まりないもの

です…数は全部で26、見ての通り、アルファベットのAからZまでがラインナップされています。原因は不明ですが、おそらくなにかの事故によって図らずもばらまかれた…というのが私達の見解です。」

「…おそらく、その見解にほとんど相違ないと思います。」

これまでの予測とまったく相違がない見解に、はやてはケチのつけようがない、言葉そのままに見解の合致を肯定する。

「我々が独自で回収を行ったのですが…いかんせん化け物のせいで順調とは言えず、ここにあるこれを含め2つだけでした。もし、あなたがたが回収したメモリの数と合計し、26以下であった場合…。」

「まだどこかに存在するか…それとも…。」

「この用途を理解している組織や個人に回収されているか…何も知らない善良な市民が犠牲となる可能性がある。」

霧彦が提示する可能性に、事の困窮化はまだ深くなりそうだ、とはやては返事をしながら心中で呟き、それを聞いていた他のメンバーも沈黙を守りつつ頭を回しているのであるうか、しかしそのやり取りを聞いている鴻上は、再び「悪戯好きの子供の笑顔」を崩さない、否、それどころか一層と目を輝かせている。

「そこであなた方、理解力のある、なおかつ力も十分なあなた方に提案がございます。」

提案、いや、この男からの提案は一般に言う「取引」同然、その言

葉に六課メンバーは視線をもう一度一層と収束させた。

「私達には、メモリに関しての情報、情報操作網、その研究に長ける研究者、研究設備が準備されており、そこでこの地上の守りを管轄する機動六課とは・・・一種の”協力関係”を持ちたいのです。」

「…協力関係、とは言えども、個人個人で言葉の意味に違いが出ます。説明、よろしいでしょうか？」

かたくなに拒否の意を言葉に出していないはやて、ここからが「交^{ネゴ}渉人^{シネター}」の仕事である。

「もちろんです。…まず、こちらの活動の”最低限レベル”の補助及び活動の公認、ガイアメモリ関連の事態における共同の活動、あつ、こちらに関しては最終的に部隊長の判断にお任せします。そして最後に…そちらで回収されてあるメモリの”サンプル”としての提供、以上です。次に我々がそれに応じて、調査した情報を提供、何より…メモリに対抗する”戦力”を貸出いたします。」

「質問が2つ、まずその”戦力”の詳しい説明、そして最低限の都合いとしては？」

「そうですね…こちらの要望に応じてもらいたい、ということなのですが、最終決定権はそちらにあるので、このような表現をさせてもらいました。…いかがでしょうか？もしそちらが態勢を結びたいなら、早速今日からでもその活動に移行したいのですが…何分、次の怪物の発生は、さらなる被害しか生まない。戦力については、追々説明しますが…あの怪人と抵抗できるどころか、あの怪人を倒すことなど容易なものだ、と理解してください。」

…はやての率直な感想を述べるならば「協力」というよりかは「力添への提供」としか思えなかった、霧彦の提示した条件をまとめるならば、「協力行為に關してはそちらの判断にお任せします」…極端に言えるならば、「丸投げ」に近い行為だ。

唯に渋る要素があるサンプルの提供に關しても、むしろまったく解析ができなかった代物を研究してくれるならそれはありがたい話であるし、もし相手が理不尽な要求でも許容が簡単な要求でも「NO」と言い続ければ、極論として「非協力態勢」でも構わないと言っている、おそらくこちら側の、「一種の「度量」を見るつもり、とも言えるであろうが、それを気にさせないぐらいの好条件が重なっている。

何より、一応として安心はできる「後ろ盾」が存在する…協力において得たさらなる情報、たとえば「異形の弱点」などが分かれば、管理局全体へと貢献もできる、何より「対処」の可と不可の違いは徹底的、異形と「太刀打ち」できると出来ないとの相違は、これからの動きを極端に2分化：良い方向と悪い方向との2分化において最適なる判断も可能となる。

はやての思考時間は、室内にさらなる「緊迫」の文字を蔓延らせ、同時に「沈黙」も運んでくる…だが、相変わらず鴻上と霧彦は笑顔であることを追記する。

悠久への錯覚すら覚えるシンキングタイム…それを打ち破ったのは、他でもないはやて本人。

「…渋る要素もない…むしろ、情報を提供や戦力の貸出なんて、現状では願ったりかなったりや。」

「…それでは…？」

「…その申し出、喜んで受けさせてもらいます。」

業務上の笑顔を浮かべ、前面で了承の意を表すはやて、部隊長、統括者の意は部隊大部分の意、この瞬間から同盟は結ばれた…と思つた霧彦だが、はやては「ただし」と一言。

「2つの勢力の協力関係において、信頼は必要不可欠です。…後日、そのあなた”方”のメンバーと、我々機動六課メンバーと顔合わせを致したいのですが…。」

この要望に関しては、霧彦は事前に予想はしていた、だがこの要望に関しては応えられないであろう…そもそもこの協力関係を結べ、という指令を出したのはそこにかにかと笑っている鴻上会長、だが最後までリーダーである克己は乗り気ではなかった、理由は支局簡単、克己の言葉を借りて言うならば「死人意外と関わる気はない」から。

克己の独特な仲間意識、それは他のメンバーにも少量影響は与えており、「生ける人間」と戯れる気はあまりないのがメンバーの総意だが依頼人の依頼、及び指令は絶対、それが「雇われる者達」の鉄則だ、霧彦が口を開き、辛くとも拒否の意を出そうとした…が、そこにあるうことかその「絶対」である依頼人…鴻上の横入りが入った。

「それが君たちの欲望なら！その要望、聞き入れたよ！早速明日にでもそうすることにしよう！…だろう？霧彦君！」

「あ……了解、しました。」

先述の通り、依頼人は絶対…追記するならば、好待遇の相手ならなおさらのことである。

鴻上が何を考えているかは分からないが、これは「信頼はプライス

レスである」という鴻上からの暗示なのであるうか…結局として、鴻上の指示通り明日、機動六課へと霧彦達は出向し、再び詳細についての会合を行うことを決定、最初の雰囲気と違い、比較的友好的な空気で終わらせることができ、はやてのそばですつとおろおろしているだけであつたりインは安堵、対照的に、ヴィータはまだ信用しているような様ではなかったが、まだあの男、「今は」害を成さない存在であることが認識できたであろう。

そんな様子のメンバーを見た霧彦は、その空気の中にある「間」を突き、はやてにあるもの…条件である「メモリのサンプル」を要求、それを聞いたはやてがロングアーチと連絡を取り、何分か経過した後、メモリを大切そうに持った女性がやってきた。

しかし、何分そこにいるのは名の知れている有名人。それも部隊の実力者達、緊張の趣が感じられ、霧彦は心中で苦笑。

女性はゆっくりとした足の動きで霧彦の目の前にメモリを置くと、そそくさと室内から出ていく、メモリは3つ、こっちは回収状況は芳しくないようだ。

「後メモリは2つ回収できたのですが、今は本局の方にまわされて…。」

「と、いうことは管理局の方は5つ、となりますか…。」

「…あの、とても差し出がましいお願いなのですが…。」

差し出がましい、とはやて、その願いと言つと、こちらも研究材料が少ない状況なので、サンプルとして持ちだすのは1つにしてほしい、という所望…確かに差し出がましいとも言えるかもしれないが…霧彦の目の前にあるメモリ…「E」のメモリがあれば、そんなことは関係ない。

その要望に笑顔で了承した霧彦、それに感謝の意を示すはやて…し

かし、霧彦の奥深くの深層心理など、今や誰も知らない。

笑顔で霧彦は迷わず白い「E」のメモリを懐へ忍ばせ、「それでは翌日また…」と一言だけ残し去って行った。

それから30分あまり経過したであろうか、はやては自分以外の姿が消えたブリーフィングルームで、先ほどやってきたロングアーチのスタッフからいただいたコピー片手に、電子画面と一心に向き合っている。

今は明日のスケジュールを調整及び整理しているところだ、明日は地球から派遣された須藤霧彦所属のガイアメモリ調査機関「NEVER」との顔合わせ、さらに、あちらから早速として依頼された調査任務における人員の確保など…まだ機動六課の休む暇はなさそう
だ。

NEVERからの調査依頼…それは「ミッドチルダのガイアメモリの流通経路の調査」…霧彦の予測だと、メモリは何かしらの流通経路の途中で事故によりばらまかれた可能性があり、なおかつその「道」をたどっていけば諸悪の根源も見える…まさに調査における基本である。

行動に移すのは簡単、しかし人員の確保が一番の問題だ、先日の未確認発生事件においてかなりの欠員が出たのが管理局全体、だからこそ専門の機関に協力を結べたのは他でもないアドバンテージとなる、未確認を圧倒できる戦闘力の確保も願ったりかなったり、ここまで事態が好転の兆しをみせるのは予想外であった。

…だが、人員を割けない理由がもう一つ、それもまさに、「予想外」である。

はやての通信端末に反応があり、それにははやては呼応する、誰かからの通信だと理解すると…画面を開き、見えた顔は、他でもない恩師の1人でもあり、憧れの上司でもある…スターズ分隊スバル・ナ

カジマの父、ゲンヤ・ナカジマだ。

「お久しぶりです、ナカジマ三佐。」

『ああ、久しぶりだな。今度またあの店いかねーか？』って言いたいところなんだが、話に聞くとそつちも忙しいみたいだ。』

「否定できません。」

ゲンヤの労いにはやては皮肉で返す、確かに機動六課は少し前から「未確認中心」の活動に移ってから忙しいのは事実、だが2日前のことから他の部隊も未確認関連の事項も扱うようになり、ほかの地上部隊も忙しい。それは、ゲンヤが統括する陸上警備隊第108部隊も他人事ではない。

それらの事実にはゲンヤもリーダーの1人として重々承知だ、だからこそこれからの言葉を口に出すことが気が引けてしまう、だが未確認を中心的に取り扱う部隊だからこそ、この話は耳に入れなければいけない。

『忙しいことは分かってるんだが…ちょっと、頼みたい案件があるんだよ。』

「大丈夫ですよ、恩師の頼まれごとなら。」

『…それ、冗談だろ？』

「分かってしまいましたか。」

やはり話術の上達は経験でしか補えない、とはやては改めて理解…話術、という要素で思い出したのは突然現れ、霧彦と同時に嵐のよ

うに去って行った鴻上光生、思えば、あの男に完全に会話の主導権及び「流れ」を掴まれていた、と冷静になったはやては今振り返り考える。

そうになると、もしやあの異様なハイテンションは「場の流れ」を出鼻に掴み取るための行動か…と疑問を持つと、あの人物はあなどれない、と思えるが、ヴィータにそのことを言ってみると、「いや、おそらくあれが素じゃねえか？」と一蹴、確かにそれもありえる話、というよりかはあの笑顔や言動、拳動を見ると、もはや天然としか思えないのも事実…この話題の事実、結局闇のままに終わった。

『そりゃ…若いもの嘘つていうものはな、すぐに”顔”に出るんだよ。…おっと、話がそれたな。それでな…。』

「機動六課である私への頼みごと、となると…やつぱり”未確認”、ですよ？」

笑い声は消え、はやては真顔で一言、そのズバリな指摘にゲンヤも顔を正す。

『まさにその通り…正確には、未確認の関連が疑われている案件なんだがな…これを見てくれ。』

その言葉とともに、はやての端末に何かしらのデータが送られ、電子画面に一つの表が現出、それはここ2日のデータで、何かしらの「数」が入力されている。

1日目は16、2日目は20、そしてその日における地域ごとに分別された詳しい数字…主にミッドのクラナガンを中心として、郊外も含まれている。

数字の羅列、まったくの共通点がない地名の数々…そして、そのデータの名前を覗いた時、はやては戦慄することとなる。

「…ここ2日の…失踪者のデータ。」

『ああ…たった2日で老若男女関係なく36人、いきなりふつと姿を消しちまいやがった。たった2日でだ。』

「…共通点もなく、かといって優れた魔力資質を持った人間もいれば、まったくの魔力資質がない一般人まで…人攫い…としては、あまりにも…」

『目的が見えない…しかも、耳に入れたただけなんだが、他の次元世界でも同様の被害が報告されているそうだ。』

とある組織が主として人攫いを行っているならば、いわゆる「広次元犯罪」の可能性がある…しかし、それは「人」出会った場合の話である。

「…こんな荒っぽいことをする、なおかつ出来る、と言えば…」

『時間軸のことも考えて、未確認の可能性が重々ある、ってわけだ。だが管理局に勘付かれることなく、かつ次元転移もできるやつ、つてなれば…。』

「厄介な相手…それもかなり。」

次元転移に関しては、霧彦が言っていた「メモリの力に気づき利用しようとしている連中」が関係しているならば、その連中というのが転移させていることとなる可能性が肯定もできる。

だが「管理局に勘付かれることなく」という点に関しては、正直面倒であると言えない、その手のものとなれば、一方的に足跡を

たどつていくしか方法がなく、なおかつ行動がどうしても後手となる
ることが多々となる。

『あとは言いたいことが…分かつちまうよな…。』

「その方面についても調査をしてほしい、ということですね…分か
りました、未確認の可能性が高い、となりますと放つてはおけない
ですし。」

『すまねえな。これからさらにハードワークになるが…。』

「この仕事に就いた時から、覚悟してましたよ。…ゲンヤさんも、
あまりがんばりすぎずに。スバルのことにしても大変でしょうか
ら。」

『なに、スバルに関しては少しのブランクが発生するだけに問題だ。
…それよりも、そっちのフェイト嬢ちゃんの容体だ。話によると、
命はともかく、後遺症の心配があるんだってな。』

話題は依然意識不明であるフェイトの話となる、状態はまさに満身
創痍の言葉がぴったりで、何より頭を強く損傷してしまっているの
で後遺症の有無が心配されている…これに大きくショックを受けた
のがギンガ、話によれば怪我をした時に、同行していたのがギンガ
で、それも怪我の原因が、まだJ・S事件の影響から立ち直りきれ
てなかったギンガをかばったから…となると、ギンガが一層と心配
するのは必死で、ゲンヤも心中では多大に心配な赴きでいる。

話によれば、ゲンヤ曰く「2日前から自主練の時間が倍増した」と
のこと、おそらく自責によるなにか彼女を動かしているのだろう
…妹であるスバルも、最近の様子を聞きひとたび心配の念を積み上
げていつている。

その後、お互いの部隊の近況を聞き、お互いの通信は終了した。もちろん、今日結ばれた「NEVER」との協力関係、そして未確認についての情報も話題に含まれている、未確認の詳細についてゲンヤは、その情報を聞き、一言だけ…「今年は厄年だ。」
それに大いに同意したはやて…そう、ここミッドチルダには、大きな「影」が迫っている。
そして…お分かりの通り、それは次第に「なにか」を壊して言っていることは確かだ。

『未確認、B17地点を周囲を依然周回しています。そのまま向かってください。』

「了解した。…聞いたか、ヴィータ。」

「ああ。…しっかし、狙ったようなタイミングで出てくるもんだ。おかげで予定が狂っちゃった。」

昨日の深夜には雨が降っていたのだが、今日のこの時間に至ってはその事実がぼやけるような快晴、その快晴の空に、機動六課両分隊の副隊長であるシグナムとヴィータは全速力で飛行していた。

もちろん、と言ったら変に聞こえるであろうが、目的は暴れている未確認の対処…予定、というのは昨日本当に急に決まった「NEVER」という組織とやらの顔合わせである。

集合時間が目前まで迫り、人もまばらではあるが集まってきた、という時に限ってロングアーチからの未確認反応報告、それに呼応するがごとく舞い降りる幾多の未確認の被害通報…本来ならばFW陣にも来てほしいところだが、見ての通りその姿はない、先ほどまで訓練中であつたためそれを考慮し今回は出勤しない…というのが表向きの理由、本当の理由はFW陣のメンタル面の考慮と、何より未確認の危険性への不安から、であろう。

FW陣へのメンタル面に関しては、その処遇は甘い、と反論が出ることももちろんである、しかしそれはあくまで付随的要素であり、根底は後者の理由。

これに関しても「命の危険があるのはこの仕事では当たり前」と割り切られるかもしれないが、未確認はその割り切りさえ否定する強さだ、隊長であるフェイトも意識不明まで追いつめられ、FW陣も

手痛い負傷をした、FW陣の実力不足というわけではない、あのJ・S事件で戦闘機人を相手に勝利をおさめた者たちだ、むしろ一般の魔導士よりも十分強いと自信を持って言える…しかし、未確認は文字通り未確認な強さ、脅威を誇り、3日前の事件では幾多の魔導士を病院送りにしてきた…酷な事実ではあるが、死人も出ている。

歴戦の魔導士相手でも倒せなかった存在…となると、いままで惜しまずに努力を重ねてきたFW陣には失礼ではあるが、未確認の相手をさせるのは怪我をさせに行くことと同義…それはFW陣だけではなく、現在進行形で未確認の元へと向かっているシグナムとヴィータも一緒、しかし平和と秩序を守る者として、どんなに危険でも赴くのが管理局員…2人の家族であるはやてには、多大に心配されたが。

『残り20秒で接敵します！』

「…いや、どうやらあちらから挨拶を始めたようだ。」

ロングアーチからの報告と同時に、両名の目の前から高速で放たれた「何か」が接近、速度が速度なため視認ができないが、おそらく未確認からの挨拶…攻撃だと理解、それが両名に襲いかかる前に、両名はプロテクションでガード、威力は高いが、力めばガードできないものではなかった。

そして「何か」は勢いを失い失速、それは地に落ちることとなる…正体は鋭利な羽根であった。

「羽根…？てことは、鳥か？」

「可能性は高いな。」

未確認の特徴として、生物や物体をモチーフとしているという点が

ある、羽根が襲ってきた、ということは今回の未確認は鳥をモチーフとしたものだとある程度予想はでき…それと同時に、対象が「飛んでくる」ことも予想できた。

『未確認急速接近！…速い！？』

「…見えた。案の定、ということだな。」

「てかはいええ！？」

高速で接近してくる空の影…バード・ドーパントは、持ち前の飛行能力で2人に向かっていた、わかりやすく敵意むき出しの殺気、それを抑える理性はおそらくない…つまり今までのメモリ憑依者と同じように意識はないか…と判断できるが、悠長と思考を張り巡らす暇はない。

なにせ「鳥」というからには予測できたが、飛行速度が生半可なものでないことが確認できた、今までの未確認と同じようなスペックであつたら身体能力もすさまじいはず…接近を許してはダメだ、と両名はこれからの行動を確認。

まず隔乱飛行により距離の獲得と先ほどの羽根手裏剣の回避、誘導弾などで牽制を行った後隙を突き一気に畳みかける…そして両名はそれを念話で意思確認を行った後に、作戦行動へと移る。

…しかし、2人は完全に相手の飛行能力の限界を見誤っていた。

速度ならまだいい、速さであつたら高速戦が得意なフェイトの方が断然速いからだ、しかし速度の問題ではなく、相手の飛行の「機動における小回りのよさ」が厄介な問題だった。

空戦魔導士の飛行精度はかなり高い、いい例はエースであるのだが、しかしバードドーパントの機動は歴戦の空戦魔導士を圧倒するものであった、あり得ない急カーブ、急停止、アクロバット飛行、感性における負担をはねのける怪物の体だからこそできる飛行…プ

ラスとして2人より速い飛行速度だ、両名はあっけなく接近を許し空中での格闘戦にもつれ込むが、シグナムとヴィータ、両名ともご自慢の技が当たらず、一方的にダメージを与えられているだけなのが現状。

ヴィータの誘導弾は羽根手裏剣による相殺と飛行、シグナムの紫電一閃に至ってはレヴァンティンを振りぬく前に回避され、火龍一閃は追尾操作を行う隙、防御が甘くなった隙に大量の羽根手裏剣によって攻撃される、手裏剣を防ごうにも量が多いため防ぎきることはかなわない。

圧倒的、ではないが基本不利といえる状況、攻撃の何発かはいれられたが、決定打に欠け、状況は停滞に近いものとなってきた。

…だが、この競り合う状況に付け入る「隙」を見つめている傍観者が何人か、そして傍観者は「行動」へと移ることを決める。

「ぎぎやあぁー！！！」

空中に突如響く悲鳴、獣のものだと間違えるぐらい野性味あふれた悲鳴は、シグナム、ヴィータが発したのではなく…片方の翼が、なくなっていた未確認、バード・ドーパントからだ。

苦しむさまを見せるバード、おそらく翼を斬られたことによる苦痛からのもの、そしてその犯人はもう片方の翼をさらに斬る…しかし、ヴィータとシグナムには何が起こっているのかを理解できなかった。急に未確認が悲鳴を上げたと思ったら片方の翼が姿を消しており、その事実を把握した刹那青の「何か」が翼を斬った…ということではしか認識していない。

刹那に起こった介入、だがそれに驚く前に、未確認は翼をもがれたために地面まで落下していく、状況は好転したことは確か、今は地面まで落下する未確認を追うことが先決だ。

シグナムとヴィータが落下するバード・ドーパントを追うのと同じ時

とあるビルの上ではNEVERの一員が集結していた、もちろん、バードの翼を斬った張本人であるナスカ・ドーパント…霧彦も一緒である。

なぜ一瞬でここまで戻ってこれたのか…という疑問がわくであろうが、ナスカの高速移動の完成した結果である、とだけ言っておこう。

「どうしますリーダー？これ以上の介入は。」

そういったのは霧彦、未確認…ドーパントの反応を辿ってこの場についたときに見たのが、空を縦横無尽に飛び回るバード・ドーパント、その姿を見て最初に反応を示したのが霧彦。

バード・ドーパント…とある少年少女の間で使われていた「B」のメモリ、生前に色々と関わっており、怨恨の節がある忌々しいメモリ…その力の象徴が空を飛んでいる、となれば反応を示すのは性かその様子を見て何を思ったのか、克己は霧彦に介入を指示、それにすぐ了解の意を示し、今に至るわけだ。

「…戦力のアピールにはちょうどいい。せっかく手に入れたEの力を試したい…ところだが、ここは莊吉に任せる。」

戦力のアピール、というのは機動六課へのアピールのこと、ここで圧倒的力を見せつければおそらくその力に「安心」も覚えるかもしれないが、克己の本心としてはここで「力の大きさ」を示したいところ…「俺たちには、貴様らを圧倒する力がある」という隠れた脅迫も含まれるであろうか。

なぜEの力を使わないか…というのは、Eの力を隠し玉にしたいからだと言える。

E…エターナルの力はメモリの王者の力、旧世代のメモリはすべてひれ伏し、T2メモリの中でもトップのスペックを持つ力、だが、今それを見せるにはあまりにも大きすぎる力、あくまでこれは「切

り札」として使う気らしい。
指名を受けた荘吉は前に出る。

【SKULL】

「…変身。」

あくまでハードボイルドの装いを崩さず、戦いの前においても冷静に、まさに死人の鏡ともいえる姿…仮面ライダー・スカル、現出。

「いよっ！荘吉ちゃん！かっこいいわよおー！！」

「あー！もっ！うるさい！」

「もはやおじさんを通り越しておばさんね…。」

「カッツッチーーン！！私はまだピチピチのレ・デ・イ・ーよ
！！ほらみなさい！私の輝かしい肌を！」

「…ミセス京水。」

京水はまるで韓流スターを空港で出迎えるおばちゃんのような囃したて、そして剛三がそれに一喝、それに異常に反応し吠える京水、もはや意味不明な冗談をかます葦原…とこちらも相変わらずである。

一方、こちらはバード落下地点の広場…翼をもがれ空を飛べなくなった鳥はおとなしく捕食されるのが本来の自然の摂理…なのだが、この鳥は空を失ってもしぶとい。

「紫電…一閃!!」

自慢の機動力を失ったバード、空での戦いとは違いあっけなく紫電一閃はヒットした…のだが。

「ききええー!!」

「ぐっ…!!」

しぶとい、紫電一閃はクリーンヒット、さらに刀身の炎はバードの体を焼いたはず、しかしバードの生命力と身体能力、耐久性は並みの魔法攻撃は通じない、確かにそれにダメージを負い苦しんでいる、しかしそれが決定打にはならず、むしろ先ほどからバードの怒りを助長させている。

接近したシグナムの腕をつかみ、そこからキックとパンチの連続、理性のかけらは感じない様でそれは続けられたが、ヴィータのアシストによりシグナムは何とか抜け出したが、敵の手ごわさを改めて実感させられた。

「あいつ動物かよ!?!さつきから猿みたいに…。」

「おそらくガイアメモリの力とやらに支配されている、他の者と同じだ。…様子だと炎に免疫がないようだ、もう一度叩き込む。」

「わかった、こっちが隙を作る…っていつても、あと何回すればいいのやら。」

「空で戦うよりはましだろう。それに未確認相手には善戦しているほうだと思っがな。」

翼がもがれたおかげで攻撃手段もなくなり、自慢の機動力も失った、確かに事態は好転しているほうではあるが、ここからは持久力の問題だ、紫電一閃は効いているが、依然決定打となる様子はない…魔力が尽きるのが先か、未確認の体力が尽きるのが先か…再び競り合いが始まるうとした最中に、空から乱入者の姿が現れた。

「ぎっ!？」

「離れる!危険だぞ！」

バードの周りを陣取る謎集団、若い男もいれば紅一点も存在する、はたまた鞭を持つ者もいれば棍棒を持つ者もいるその集団は、シグナムの質問を返すことなくバードへ攻撃を始める。

女性は軽やかなフットワークを見せつけ、剛三はダイナミックな棒術を、京水はしなやかさを感じさせる華麗な鞭の操りようを、マツと霧彦はそれらをサポートする連携を、しかしどの人もあり得ない跳躍力、走力、腕力…姿は人間にしか見えないのだが、動くさまは怪物にしか見えない身体能力が異常なこの集団…NEVERのレイカ、京水、剛三、マツ、霧彦の目的、時間稼ぎとしては十分すぎた。

【SKULL! MAXIMUM DRIVE!】

「…伏せる。」

声量が少なくとも、空間に低くよく響く男性の声、それと同時に響いた電子音声、一体誰だ、と聞きたい兩名であったが、とにかく頭を伏せることとした。

それと同時に、謎の集団はバード・ドーパントから離れるが、その経過時間も計算済み…そして「何か」のエネルギーを感じ取ったバードは、不意と斜め上の空中を見上げる。

そこにあつたのは…骸骨、エネルギーで形成された巨大な骸骨、やさやすとバードを飲み込めそうなサイズの骸骨は、確かにバードをにらんでいた。

「トオオウ！」

その威勢を感じる声が響いたの瞬間、その巨大な骸骨は何者かによつて蹴られ、バードへと急速接近、先ほどまでの集団との戦いによつて隙を生じてしまったバードの体にそれが打ちつけられ、爆散した。

いきなりの出来事にヴィータとシグナムの両名が驚くことは必死、だが驚いたことはそれだけではない、煙が晴れた先には、バードメモリの憑依者であるう女性の姿、つまり…。

「…一撃で倒しちまいやがった。」

シグナムの紫電一閃を何回も受けてさえ倒せない相手、いくらリミッターがかけられてようが異常な耐久力、それを超える攻撃をした者は何者か…と疑問を抱いたのに呼応するがの如く、両名の目の前に空から人影が舞い降りてきた…のだが、あくまで影が人の形を成しているだけ、その姿は…骸。

黒を基調としたボディに、銀のむき出しの骨格、そして頭の上にあるのは黒の帽子…「動く骸」というにふさわしいその姿に困惑と警戒心を覚えるが、それをよそに骸…仮面ライダースカルは変身を解除し、両名の目の前に「人」の姿を現した。

黒のスーツに黒のネクタイ、そしてかぶりなおした黒の帽子、顔からして中年男性だと言えるが、雰囲気には何か異質なものを感じる。そしてそれを同時にどこからか響くクラクション…細道から突如現れたミッドで流通している大型装甲車が骸の男の近くで停車、そこから2人の男が降り、先ほどまで戦っていた謎の集団と一緒に骸

の男の周りに集結する。

その面子の中にはヴィータとシグナムも知っている顔…つい昨日や
つてきた、霧彦という男の姿も。

いきなりの事態の転がりよう、困惑するヴィータとシグナム、だが
それを気にするNEVERリーダー…大道克己ではない、彼らには
「生ける人間」に構う気などさらさらないからだ。

「お初にお目にかかる。俺がこの組織”NEVER”の統括者…大
道克己だ。そして…ここにいる俺達こそ、メモリの力に対抗する戦
力…鳴海荘吉、仮面ライダースカル！そして歴戦の戦士達！…よろ
しく願います、機動六課の諸君！」

その紹介は、アピール…エンターテイメントの一種としてはあまり
にも十分すぎた、その戦う様は「異常」としか表せなく、仮面ライ
ダースカル、と呼ばれた存在には、もはや畏怖を感じるものも。
畏怖、驚愕、困惑…様子を見ていた機動六課メンバーに混沌が生じ
る中…1人の女性は、とある単語について驚きを覚えていた。

「仮面ライダー」

…静かに、この言葉がすでに機動六課に蔓延っていることを、彼女
以外知る由もない…。

仮面ライダーを知る女性…そしてNEVERと機動六課の本当の意
味での邂逅。

そしてNEVERの実態を知るのはいつのことになるか…。

ここはNEVERミッドチルダ拠点：鴻上ファウンデーションから提供された施設、こちら側の事情も考慮されているからであるとか、何より研究施設としての性能は二重丸だ、しかしこれぐらいの設備がなければ、正直な話NEVER達の必須アイテムである細胞維持酵素は作れない実情がある、これぐらいは当然か：と、とある一室でコーヒを飲んでいる克己は思う。

戦場なのではよく「暴君」などとも呼ばれる克己であるが、もとは人の心を持つていた人間、こうした息抜きは必要であるし、人並みに思考を張り巡らす時もある。

今日の夕方：例として現れた未確認：バード・ドーパント、それを倒した後、色々とおちら側のお偉いさん：要ははやてと話し合った結果、予定であった顔合わせは明日へ延期することとなった：とはあちらはいったが、明日は明日で色々とお面倒らしい、明日は管理局からの人員補充の分の人手がやってくる日らしかった。

しかし事態の事後処理、報告に時間を取られ、この後そのようなことをする時間がない、ということなのだろうが、元より顔合わせに乗り気ではなかった克己からいわせれば、そんなこと興味もない。

「これだから生きてる人間は窮屈でたまらない：。」と独自の死人理論を述べただけだ。

：そう、こんな茶番には付き合う義理もない、確かに未確認：ドーパント達がこの世界に発生する原因を作ったのは自分たちでもある（あくまで根本的な原因は財団Xであり、責任は一端であるが）、だが時間が経過すればいつかはこの世界にも広まっていたかもしれない：その見通しがあるから、財団Xはわざわざ異世界であるここで工場を建てたわけだ。

財団Xが狙っていたことなど理解できない：が、予測はできる、おそらくこの世界の人間特有の特徴、「魔法が使える」という点に着

目したのだろう、「魔導士とメモリの力の融合における実験」と、言葉を借りればこんなところか。

財団Xの暗躍、確かに自分たちが警戒すべき存在の一端ではあるが…とある「相棒」の話聞き、この世界事態には俄然興味が湧いている…正確には、この世界の「行く末」であるが。

…克己としては珍しく人並みな暇つぶしをしていた最中…不意に、後ろから気配を感じる。

NEVER達の気配でもなければ、自分の母であるマリアの気配でもない、それもそのはず、基本自分の部屋には誰も立ち入れないからだ…1人を除いて。

敵意、殺気ではない…だが、その気配の正体特有の「異質な雰囲気」は感じ取れる…克己はその気配の主の正体を理解すると、思わず微笑し、後ろを振り向かず言葉をかける。

「顔を合わせるの久しぶりだな。…どうだ？そつちの進み具合は。」

その言葉に反応し、気配の主は…今までの非実像形態から実像形態へと移り変わり、世界の地に足を踏み入れた。

その正体は…ドーパントとは違う種類の「異形」…基本色は純粹な黒、その体に妙な雰囲気を感じる赤の血管を彷彿とさせるライン、頭にはたくましい2本の黒い角があらわれており、顔などはまさにおとぎ話などに出てくる「鬼」…子供が見たら逃げ出すこと間違いなしな姿、まさに「異形」という言葉がお似合いな様…こんな異形が目の前に出てきたら驚愕すること間違いなしなはずのだが、克己はその姿を見慣れている…それもそのはず、この異形とは一種の「相棒」でもあり、「契約関係」でもある。

「こつちは順調だ。見通し後…1か月、つてところだな。」

「ほう…話を聞いたときは結構壮大に聞こえたが、案外早くできるもんなんだな。」

「一度作ればあとは基本同じさ。壊れたものから使えるパーツを集めて、あとは人員と材料さえ集められるカリスマさえあれば簡単なものだ。」

この異形と話している時の克己は、他のものは見たことがない、非常に「楽しそう」な笑顔で話を進める…この異形とは、人間でなかったことが残念なほど話と理念が合い、なおかつこの異形のやろうとしている「野望」は壮大なものだ…死人として生きる彼の目指す「明日」の一つの理想にもこの2人は類を見ない協調性を見せ、まさに相棒という言葉がお似合い…死人である克己と、この「異形」という一種の「異分子」同士だからこそなりたつたかもしれない点もある。

「…で、そっちの調査の結果はどうだ？」

克己のいう「調査」とは、この異形にしか調べることのできない要項、この異形の存在理由からでしかできない調査だ。

「…やはりこの世界の時間軸はおかしい。…しかも、数日前の時間軸に、介入者が現れた。」

「介入者？」

「いわば時間遡行者がこっちの紛れ込んだってことだ…しかも、その遡行者も異分子だな。克己の世界とは違う世界の匂いを感じる。」

「…また面白そうになりそうだ。大きな花火が見れそうだけ。」

「…お前の気分の高揚がその顔で伝わってくる…いい悪の笑顔だ。」
異形は不敵な笑顔を浮かべながら角をいじる、彼の気分が高まった時の癖であり、彼の感情の起伏が感じ取れる一面でもある。

「ふん…なにせこの俺たちとお前が…」

「すべての悪を粉碎し、すべての悪の頂点に立つからだ…ゾクゾクしてきた。…その前に、一つ警告しておく。…さっき言った時間遡行者の話に関係するんだが…おそらく正式な手段を使って遡行してきていない…となると…」

「お前が言っていた、確か…時間の守護者が動き出す…可能性がある…るってことか？」

「御名答。…まあ、俺の存在がばれようが今度こそ叩き潰すがな。」

「そう力むな…ネガタロス。死人の俺と、イメージであるお前には、文字通り腐るほど時間はある…すべてを掌握した後でも遅くはない。」

…死人とイメージ…克己とネガタロス、2つの異分子…一つの巨大な「悪」はミッドの夜に笑う。

そして異分子は彼らだけではない…同日、場所はクラナガンの中心地から少し離れた一般的な一軒家、機動六課のヘリパイロットであるヴァイス・グランセニックの実家、グランセニック家の夕食前の時間。

ヴァイスは機動六課の宿舎で寝泊まりしているのでこの家にはあまり帰ってはこない、そのため妹であるラグナ・グランセニツクは両親と夕食を共とする…ということにしたいのだが、両親も共働きで忙しい、そのため基本どうしても夕食の時間はラグナ1人の時間となってしまう、いつも寂しい思いをしているのが現状…そう、2日前までの話だ。

1週間前：「ここに泊めて！」と突如水色の髪の少女が押し掛けたあの日から、この居候として3人の少女と1人の男がやってきた。本当にいきなり、突然の事態に困惑したラグナ…しかし1日過ごしてみると、一気にこの家のこの時間がにぎやかになつて、なにより…楽しかった。

1人の銀色の髪のショートカットの少女：ロードが胸を張って意味不明なことを言えば、水色の髪のロングツインテールの少女：レヴィが幼さ全開の素振りを見せ、2人のストッパーである栗色のショートカット少女：シュテルが毒のある2人への突っ込みを入れ、そして料理を作りながら3人の兄的存在である青年…天道創史てんどうそうじが傍観する…あんなにも色気がなかった夕食の時間がここまで様変わりするものか、とラグナは大笑いしながら思う。

4人の居候する件も、両親は家の留守なども頼める、それに家事も手伝ってくれる、ということから容認、兄であるヴァイスも話を聞き「よかったな」と一言、なによりラグナがうれしかったのは、疎遠であったヴァイスから「今度一緒にでかけないか？」という誘いがあったこと。

ラグナの左目には目立つ医療用の眼帯が存在する…彼女はヴァイスの誤射により左目を失明し、ヴァイスはそれに自責の念を抱くこととなり疎遠関係となつてしまつていたのが現状であったのが、こうして一步前進を迎えることとなつた…ラグナはたとえ兄によつて左目を失つたとしても兄が大好きだ、だからこそ左目を見るたびに表情をゆがませる兄の様を見たくなかった、だがまたお互いに近づけることができたならその違和感から脱出できるかもしれない…にぎや

かな時間、兄との関係修復への兆し…彼女は至って順風満帆だ…この世界に迫っている「異変」の底を見ていないからでもある。

現在のグランセニツク家の様子としては、創史はその自慢の料理センスを十分にふるまっている…要は5人分の夕食を作っている、それをよそに4人はとある遊戯に精を出している。

テーブルの上には規則的に積み上げられた塗装された木の棒がまるで高層マンションのように形作られている…ミッドで流行中のパーティーゲームの一種で名を「ジャンガ」という。

ルールは支局簡単、積み上げられた木の棒を引っこ抜いていき、崩したものの失格、2周するまではそれぞれ1本ずつ抜き、それ以降は1人一回につき3本まで抜くことができる、そして失格者が出た時点でのそれぞれの棒の所持数で順位が決まる、いかにも人の集まりで盛り上がりそうなゲームだ。

現在は6週目の2番目…4人の中での元気っ子、レヴィのターン、ただ今レヴィは3本目に突入しようとしていた、この棒らの配置で…となるとここからどんどん数を減らしていくのが定石なのだが、レヴィは退く様子はない、彼女は非常に負けず嫌いな面と…ちよつと抜けている面があるからだ。

「攻めの姿勢を崩さぬか…その意気やよし！攻めて見せよレヴィ！」

「私の耳元で騒がないでくださいロード。ほら、ガタツクも五月蠅がってます。」

ガタツク…というのは、シュテルのそばにいる青のクワガタムシ…とはいっても、自然でよく見かける夏の風物詩である昆虫のクワガタムシとは違い、色は青、体は機械で出来ている謂わばメカだ。

同じような存在はほかにもいる、ロードの肩に乗っているのは昆虫の一種を摸された赤いカブトムシ、レヴィの頭に乗っているのは筋足動物を摸された紫のサソリ、そして現在進行形で料理中の創

史のそばには黒のカブトムシ、とはいったものの同じように皆人工的な無機物であるメカ、しかし主のそばにいるときは非常に感情を感じるとなぞぶりを見せるところから、「ペット」という表現もできるかもしれない。

「でもこの配置は確かにきついかも…がんばってレヴィー！」

「うーん…これは難しいかも。」

レヴィに敵ながらも応援するラグナ、それに応えようと必死に木の棒の高層タワーとにらめっこするレヴィ…だがこの時間にも終わりがやってくる時が来た。

「へっくし!!」

レヴィの反対側に鎮座していたロードが急のくしゃみ、そのくしゃみに驚いたレヴィの手がタワーにぶつかり…あっけなく崩壊することなった。

「ああー!!ロード!なにしてくれるのさ!」

「ふん、我が崩したわけではない、お主の失格じゃ。」

「微妙な判定ラインですね…ラグナはどう思いますか?」

「…この場合は手にぶつかったのはレヴィだし…ひどいかもしいけど、レヴィ失格かな?」

「そんなー!」

「ちよつどいい…お前たち、夕食ができたぞ。」

悶絶するレヴィの頭を慰めの意味でなでた後、食欲をそそる香りを立ち上らせる皿を持った創史が台所からやってくる、それにいち早く反応したのがロード、彼の作る料理はロードの師直伝の料理、その料理を誰よりも愛しているのが彼女、もちろんレヴィやシュテル果てには最近知り合ったばかりなはずのラグナも彼の料理のファンだ。

単刀直入に言わせてもらえば彼、創史の料理は超がつくほど美味、もちろん料理を教えてくれた創史の友がいたからこそできたおいしさなのであるが。

『いただきます！』

4人の少女の元気な声が響く、グランセニツク家の夕食の時間は本日も美味の言葉に支配されることとなる、そして夜が更け様がそんなことなど毛頭も気にしない少女たちの元気な声はしばらく響くのだ。

…夜はさらに更け深夜、しかしこの世界には人は存在しない、ただただ暗い街をかたどっているだけである…ここは鏡像の世界、実像を映し鏡である世界、この世界では日夜、とはいってもここ最近の話であるが、大量のミラーモンスター「シアゴースト」が発生し、虚像の世界から獲物へ目配せている。

しかし今現在はシアゴースト達に獲物を見る暇などない…夜に映える白の騎士が、薙刀型の武器「ウイングスラッシャー」を操りシアゴースト達をなぎ倒していつている。

白い装甲に、女性らしさを醸し出すボディライン、そしてその素振り、だがスラッシャーを操る様はまさに「戦士」とも言える…とは

いったものの、彼女：仮面ライダーファムの装着者自身はこういった近接型の武器を操った経験が少ないので、少々慣れていない様子ではあるが。

彼女がミラーモンスター討伐に参加するようになったのはつい先日のこと、仮面ライダーとしての経験も少ないことからでもある。

ミラーモンスター：虚像の世界、ミラーワールドに生息する異形で、そのモンスターたちの存在目的としては「人を食らうこと」、本来ならばこのミッドチルダの世界には存在することのない世界と異形、しかしとある「存在」がこちらにやってきてしまったためにこの世界と異形が発生し、こうして異形を討伐している…これは彼女に仮面ライダーの変身アイテムである「カードデッキ」を渡した男が述べたことをそのまま言ったまで、正直ファム自身も一体この世界に何が起こっているのかが理解できない、だが「異変が起きていることと、自分にそれを是正する力を渡された」ことは理解している…「動きたかった」、ただ「何かがしかなかった」、傍観することはいやだった」彼女：その最中に突然与えられた使命、彼女は「誰かを助けている」ことへの実感をかみしめていた。

仮面ライダーが動かなければ誰かが「捕食」される、消えることとなる…と男から聞いた瞬間、彼女は戦慄した、しかも犯人が「鏡の中の存在」と聞いたらなおさらだ、実像からは普通でも足も出せない相手、だからこそこの世界に介入できる「仮面ライダー」が重要になってくる。

自分にもできること、それだけで彼女が仮面ライダーになる理由があった。

…だが、先述のとおり彼女は仮面ライダーとしての経験が少ない、今回は3回目の出動であるが、今回は前回、前々回と比べ物にならない数だ。

ファムはプランバイザーのカードリーダーを展開、その中にデッキから取り出した一枚のカードを挿入する。

【GUARD VENT】

どこからともなく現れる契約モンスター、気高き白の翼、白鳥のミラーモンスター「ブランウイング」…その白鳥から召喚される白の盾「ウイングシールド」、そこから大量の白い羽根が放たれ、知能が低いシアゴースト相手には十分な目くらましをする。

そして何体かのゴーストの背後をとり、まさに一閃、スラッシャーで5体のボディに一筋の居合斬り、それに耐えきれず5体のゴーストは爆散することとなった。

だがそれでもゴーストの数は減らない…だがその最中に助太刀が入ることとなる。

【STRIKE VENT】

ファムの持つ召喚機「ブランバイザー」の電子音声とは違うくぐもり、なおかつトーンが低い電子音声が鳴り響き、ファムは不意に響いた電子音声に一瞬だけ動きを止める。

そのファムの背中を狙ったゴーストがいたが、そのゴーストがファムを攻撃する前にどこからか放たれたどす黒い黒の火球、そしてその火球をまともに受けたゴーストは爆散に至る。

そして間髪いれずにその後、ファムのそばに降り立った存在は…ファムとは対照的に夜に溶け込むことすらできない黒の装甲、一層と映える赤く発行する複眼、左手には召喚機であるバイザーと右手には黒の剣…黒の龍騎士、仮面ライダーリュウガ。

おそらく自分を助太刀してくれたのだらう、とファムは考えると、ファムはリュウガに視線を移す。

「ありがとうございます。おかげで助かりました。」

「お前か、新参ってのは。…勘違いするな、俺はそこにいい的がい

て、それを撃つただけ。：俺には一切慣れ合う気はない…来るぞ。」
そのお礼に少しの拒絶の意を示したリュウガ、そしてリュウガは迫ってくる多数の気配を察知し正面に構える、それに呼応しファムもスラツシャーを持ち直す。

未だに数が衰えないゴースト達、再びファムがゴースト達に突撃し必死に一閃を放ち続けるのをよそに、リュウガは慣れた様子で剣を操り、時にはドラグクローで格闘や射撃も行っている。

見張るのはアドベントで召喚されたドラグブラツカとの連携であろう、ブラツカが火球を放ちリュウガの背後を担当し、リュウガはブラツカの背中に駆り限定的な空中戦をやつてのける、ゴースト達には空中戦ができないことを利用した戦法だ、空中からの火球の連続にゴースト達は爆散していく。

そして2人の騎士、白の騎士と黒の騎士が「その」カードを取り出したのも、リーダーへ挿入したのも同時であった。

【FINAL VENT】
ファイナル ベント

リュウガは空中に浮遊、飛び蹴りの姿勢を作り上げたのちにブラツカが背後へ陣取る、そしてブラツカは思いつきり火球を放ち、リュウガはそれを背に受け加速をつける、標準は固まっていたゴーストの集団、もちろんブラツカの火球によって足場は硬化しており、逃げることも不可能。

そしてリュウガのドラゴンライダーキックは6体のシアゴースト集団にヒット、あっけなく6体は爆散した。

それと同時に、ファムは目の前にいる大量のシアゴースト軍団を見据え、それに呼応しブランウイングが出現、ゴースト軍団に力強い旋風を当て、ファムの元へと吹き飛ばす。

待っていました、とファムはスラツシャーをしっかりと握り、必殺技：「ミスティーラスラツシュ」を完遂させようとしていた。

風により飛び込んできたゴースト達、それらをファムは横切るたびにゴーストのボディをスラッシャーで一閃、次も一閃、また一閃と、時代劇の殺陣の如く退治、そして軍団すべてが一閃された暁に、シアゴースト軍団は一斉に爆散することとなった。

シアゴースト軍団もすべて討伐し、ファムは改めて助太刀の礼をリユウガに言おうとリユウガを探したのだが、その場には彼の姿はとつくに消えており、そこには活動限界：粒子化の最中であったファムの体だけであった。

「…また…会えるかな。」

今度会ったときは名前を聞いておこう、と心に決めたファム、そしてそそくさと自分の世界：現実世界の機動六課宿舍へと帰っていくのであった。

u b e H E R O ?
N e x t C o m i n g O O O ! ! C a n y o

ファムの「正体が「バレバレー」な件について。

そしてまさかの新参者達、まさかのネガタロス、まさかのマテリアルズ&ゼクターズ&天道創史という名の誰か、克己とネガタロスについては「なにこの2人怖い」という感じでお送りいたします。

ちなみにリュウガはツンデレではない、あっちがわの人間にはマジとげがある。

「日なた（実像世界）の奴らがまぶしいよ…兄貴」

という状態です…ほんと矢車さんには何があつたのか、地獄兄弟には放映時には非常に驚かされました。

あそこまでネガティブを押し出すキャラは今までもこれからもないですからね。

バード・ドーパントが発生し、騒動がひと悶着した翌日、ミッドチルダの天候は曇天、それはミッドの未来の行く末を暗示させているような曇天である。

しかし天気がどしゃぶりでないかぎり、六課FW陣の訓練は中止にはならない、日々の鍛錬こそが、正義と秩序を守る「強さ」となることを彼女たち：J・S事件を潜り抜けた彼女達は知っている。

だが、今日の早朝訓練は中止、代わりに午前の訓練の時間が繰り上げられることとなった。

まさに急：前日まで聞いてなかった急な集合：とはいっても、目的を聞けば誰もが領けた。

今日の午後にはガイアメモリ調査機関「NEVER」が機動六課へとやってくる：が、それと同日の早朝、つまりFW陣が集合している今、管理局からの人員補充、空いた空席の補充に、管理局員が機動六課へと出向するらしいのだ。

機動六課の現状はまったくといていいほど芳しくない、ライトニング分隊長であるフェイトは依然寝たきり、スターズ分隊長であるのはドクターストップによって出動負荷、名だたる隊長陣がリタイアしてしまい、未確認相手では実力不足である若手だけではつらい現実がある：FW陣にとっては悔しい事実でしかないが。確かに、昨日華々しい登場をしてくれた「NEVER」がいれば未確認は撃退できることは確認できた、しかし何日か前のように未確認が多数同時発生してしまったら：いくらNEVERの人員が8人と多かるうと、完全には対処できない、機動六課のみでも、最低限未確認に「対抗」できるだけの力量を身につけなければならない。むしろ、各部隊で人員不足が嘆かれるなか、こうして機動六課に1人でも補充できたことに感謝しなければならないであろう。

…そうして、後はその当人…出向となった局員を待つだけの中、テイアナとスバルは思考を巡らせていた。

内容は、昨日突如目の前に現れた組織「NEVER」のことについて…正確には、映像で小さく写っていたとある男性についてである。あの優男な面構え、似合う黒のジャケット…おそらく、未確認大量発生事件時に出くわし、なおかつあの白い理不尽な異形から身を呈して助けられた男性であろう。

だがそのあまりにも「変わらない姿」に、2人は戸惑いを隠さずにはいられなかった。

2人からかばい、壁に打ち付けられた時の姿は、2人の脳内から離れられない…あの時の姿は確かに、「死んでいた」、もし生きていたとしても大けがどころの問題ではない。

首は折れ曲がり、足はあらぬ方向へと向いてしまい、なおかつ一切として動く様子のない様…だが、あの直後と同じように依然元気な姿で立っている男性の姿を見て…2人は違う方向で困惑した。

あの時のことに関しては両分隊の副隊長2人に報告した、不死身の男、その男が変身する青の異形のこと、しかし2人はその情報に困惑する、死んだはずの男が蘇ることなど、いきなり信じると言われた方がおかしいからだ。

しかしテイアナとスバルの性格をよく知っている2人には、2人が嘘をついているとも思えなかった、あの2人は口をそろえて、こう男のことを述べたからだ。

「あの男性は正義を語ってくれた、自分たちのことを身を呈して守ってくれた。」と。

…おかげで、その後2人の報告をシグナムがはやくに報告し、さらにはやては困惑を極めることとなったが…。

その最中、向こうの廊下からゆっくり歩み、こちらに向かってくる人影が一つ…そしてFW陣の目の前に、その影は現れた。

髪は短めの茶髪の成人男性、どこか管理局の制服を着こなせない感

があり、何より…仏頂面で、いかにも人づきあいが悪そうな視線、そこにはどこか人を拒絶する雰囲気が入り混じっている。そしてその顔つきはミッド特有の顔つきではなく、FW陣から見れば出張任務で地球へ赴いたときに見た日本人男性の顔つきだ。なぜか沈黙の間が発生し、どこかぎこちない感じを感じさせる空間と化してしまった広間…その中、開口したのは男のそばにいるはやてであった。

「こちら、管理局本局から出向となった…。」

「…シンジ・キド二等陸士だ。」

その男…シンジは、ゆっくりと無表情を一貫して敬礼、それに呼応しFW陣も敬礼を返す。

「シンジさんには、ライトニング分隊の副隊長代理をやってもらって、ライトニング分隊の隊長代理として、シグナムが入ることになりました。」

この対応は仕方がなかった、なのははまだ出勤できないが隊長としての仕事は責務できる、しかしフェイトに関しては病院で寝たきり、今までは隊長分をシグナムが代理で行っていたが、それではあまりにもハードワーク、幸運にも武装局員が1人入ったことはちょうどよかった。

「たぶん色々と聞きたいことはあるけども…それは後でのお楽しみにしようか。…おそらく時間帯的に気づいているだろうけれど、この後の午前訓練にはシンジさんも参加することになってるんや。と、いうわけで、本日からよろしくな、シンジさん。」

「…はい。非力ですがよろしく願います、八神はやて二等陸佐。」

「そんなに堅苦しくなくてもいいんよ？そっちのほうが年上やし。」

「自分はまだ非力な身ですから。…それでは、訓練があるので失礼します。」

表面化での形式的な挨拶、それを変えることなく、仏頂面でシンジは廊下の奥へと姿を消した。

「…これはかなり難癖あるかな。」と、シンジの性格を個人的に分析し、はやてはデバイスルームへと向かう、目的はこの後の訓練の際のデバイスデータを取ってもらおうと頼みにいったからだ。

それには、シンジの「表向き」の来た理由が関係していた…そしてシンジが、とある目的で六課に「潜入」したことをまだ彼女たちは知らない。

…およそ1時間後、FW陣はそれぞれウォーミングアップを終え、ティアナとスバル、そしてキャロとエリオは訓練場から少し離れた場所、ここは主にデバイスデータを搾取、整理する場所として設けられた場所だ。

他のメンバーに、スターズ分隊の隊長なのは、同分副隊長のヴィータ、そしてはやてとデバイスルームからメガネをかけ、白衣がこの頃様になってきたシャリオ、通称シャリー。

はやては、訓練場でお互いに構えているシグナムとシンジのライブ画面と、シンジのデータとをにらめっこしている。

なによりはやては、シンジのデータに多大に興味を持っていた、その様子を察知し、はやてのそばに近づいたのがなのは、おそらく復帰後に始動する際の参考とするのであろう。

「ねえはやてちゃん。シンジさんって…どんな感じかな？」

「なかなか興味深い。なにも、管理局から出向の目的って、どうやら新デバイスの試験とかなんとか。」

「新デバイス？そんな話聞いてなかったけど…。」

「おそらく対未確認に急がせたんやろ。…ランクとしては、スター分隊の2人とはあまり変わらないけど…へえ、召喚師スキル持ちやフルバックではないところからみて、召喚は補助やと思う。」

「…あの人も…召喚師。」

そう小さくつぶやいたのは、他でもない召喚師のキャラだ。

彼女の幼い心は傷心中である、原因は未確認発生事件際のトラウマ…森を焼き尽くし、自分の制御から離れてしまい、暴君と化したフリードの記憶、それが彼女を苦しめ続けている。

今まで、特に機動六課へと入る前は、フリードの召喚魔法に失敗し、周囲を暴れつくすことは多々あった。

しかしあの時の暴走は、今までのものとは「レベル」が違う、あそこまで暴れつくし、なおかつ原因不明なのは今回が初めてだ。

原因はキャラではない、それはあの時のデータが言っている、しかし彼女にはあの暴走は自分に原因があると思えない、その自分への疑心暗鬼が原因で、訓練においてもフリードを召喚するとき体が震えてしょうがないのだ、幸いここ何日かは魔法に成功しているが、またあのように暴走に至ったら…少女の心に、やすらぎはまだ来ない。

時は満ちた、今回の模擬戦はシンジの戦闘力を見定めるテストだ、この試合におけるデータから、これからの訓練パターンや他のメン

バーとの連携を決めることとなる。
はやての準備はいいか、との問いかけに2人はだまって頷き、シャリーもそれにOKとの返事、時間が惜しい、すぐに始めることとなった。

「それでは…試合開始！」

それに呼応した2人、シグナムは剣型のデバイスである「レヴァンティン」をセットアップ、マスターであるはやてがデザインを施した甲冑を誇らしげに装備する。

しかしシンジのアクションが至って地味だ、シンジはポケットから何かを手に取り、左手を掲げた時には、その手には一瞬にして黄金の杖が構えられていた。

杖にはなにか烏らしき生物がかたどられており、イメージとしては「神々しい」とも言える雰囲気、だがシグナムは疑問を持った、先ほどから服装が変わらず、シンジは訓練用のジャージのままであった。

「シンジ、バリアジャケットは？」

「…これは管理局が開発した新デバイスだ、バリアジャケットはない。」

「ほう…また変わったデバイスを開発したものだ。…だが油断はない、お互い潔く一戦を交えよう。」

「…この戦いに、時間をかけさせる余裕はない。」

「何？」

その短期決戦宣言をよそに、シンジはポケットから長方形の何かを取り出し、それをズボンのホルダーへとかける、それと同時にその長方形の何かから、シンジは一枚の…カードを取り出した。そしてシンジは杖：「ゴルトバイザー」のカードリーダーを展開し、その電子音声ははつきりと鳴り響く。

【STEAL VENT】
スチール イベント

「!?!」

その瞬間…シグナムが持っていたはずの剣、レヴァンティンがシグナムの手から消え去り…気づいた時には、シンジの右手に握られていた。

それに周囲と、何より当人であるシグナムは多大に驚き、シンジに疑問を投げかけようとした、しかしそれにまったく気にすることなく、シンジは長方形の物体：紋章が象られた金色のカードデッキからカードをさらに一枚、そしてカードリーダーに再び装填。

【ADVENT】
アドイベント

その電子音声、シグナムが気を失う前に聞く最後の言葉だとはこの時誰も思っていない。

アドイベント…契約したミラーモンスターをミラーワールドから召喚するまさに「魔法」とも言える所業、その電子音声に呼応し、黄金のカードデッキの契約モンスター…ミラーワールド最強のモンスター「ゴルトフェニックス」が、訓練場のビルの窓から現出、しかしゴルトフェニックスがあまりにもまばゆい光を放ったため、この現象を見たものはシンジ以外存在しない。

そしてゴルトフェニックスは召喚した主のいうがままに、光を発し続けながらシグナムを攻撃した。

その様は、誰の目にも映っていない…もちろん映像記録用のモニターにも、ただただ光を映し続けるだけで、周囲が目を回復させた時、訓練場の真ん中には悠然と立っているシンジと、地に伏しているシグナムだけであった。

シグナムはかすかに体を動かすことができたが、立ち上がる様子はない、その様子を確認し、シンジは先ほど奪い取ったレヴァンティンと、ゴルトバイザーにカードを挿入し召喚したゴルトセイバーを首に突きつけ、模擬戦は困惑を残しつつ終了することとなった。

「…なんなんや…あれ。」

はやてのそのつぶやきは、その場にいるものの気持ちを代弁しているものであった。

まず、カードを挿入して魔法を発揮するデバイスなど理論すら聞いたこともないし、相手の武器を一瞬にして奪い取る魔法も聞いたことがない、なによりあの召喚魔法と謎の召喚獣：魔法、と見た目は似ているかもしれないが、はやてにはどうしても「異質」な力しか感じ取れないのだ。

実際問題、シャリーが取っていたデータには、謎のエネルギー反応が検出されただけ…それを確認し、はやてはある判断を取った。

…そして、その様子を見ていた1人の女性は、驚きに満ちていることをはやては知らない。

…気を失ったシグナムが医務室へ運ばれた10分後、シンジ含むFW陣は訓練場で静かに時を待っていた。

本来ならば、これから連携訓練を行う予定であった、しかしはやての判断により、シンジと敵対する形で、残りのFW陣4人、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、そしてフリードが構えている。

そう、今回はシンジ対FW4人プラスフリードの模擬戦、これはシ

ンジが使う魔法…らしきもののデータをより多く搾取し、これからの判断を行おうとしたはやての機転だ。

確かに力ある4人を1人で相手にするのは厳しいであろう、しかしこれはあくまでシンジを「信用」するための判断材料が欲しいための判断であり、決して他意などない、これから一緒に職務を行っていく上で信用は必要不可欠、これに怪しげな行動がなかったら、むしろ強力な助っ人として共にできることとなる。

…そして試合は始まった、スバルがウイングロードで滑走し突撃、その後続としてエリオも突撃準備、両名ともキャロの支援魔法を受け、ティアナはスバルをフェイクシルエットにより支援する。

…一方シンジは、再びポケットから何か…正確にはコンパクト型の手鏡を取り出し、今度は先ほどの杖とは違う代物、緑を基調とした片手銃「マグナバイザー」を現出、そしてホルダーにかけてあるデッキからカードを2枚取り出し、躊躇もなく挿入した。

【ADVENT】

【FINAL VENT】

ファイナルベント…初動からそれを放つシンジに、ためらいは一切ない。

まず最初のアドベント呼応し、足元から…正確にはシンジがわざと水をこぼしておいた水たまりから現出したのは牛型の緑のミラーモンスター「マグナギガ」、牽牛な装甲の中には…多々の火器が隠されている。

マグナギガの背後に存在するマグナバイザーとの接続口にバイザーを接続、それに連動してマグナギガは前身の装甲をオープン…無限とも錯覚する重火器群を、ウイングロードを滑走しているスバルと、少し距離の離れたティアナに標準をつけ、間髪いれることなくトリガーを引いた。

その直後に一斉に放たれる、ミサイル、ビーム等…その弾幕は周囲に爆炎を発生させ、その爆炎が晴れた先にはあの弾幕を受けたことを感じさせない無傷の体とは相反して、瞬時にノックアウトされたテイアナとスバルがいた。

それにこれまでにない危機感を抱いたのはほかでもないエリオとキヤロ、まさか予想だにしない広範囲攻撃をするとは思っていなく、さらには一撃で2人も沈められるとは思っていなかった。

次の攻撃に警戒し、一端距離をとったエリオであったが、それは愚策であったと思ひ知らされることとなる。

【ADVENT】

気づけばシンジの腕にはまた見たことのない装備が存在した、黒の龍の顔を摸されたガントレット「ブラックドラグバイザー」が存在し、そのバイザーはアドベントの特有のくぐもった電子音声を鳴らしていた。

そして足元の水たまりから現れるドラグブラッカー、ドラグブラッカーは信頼する主の前前で制止し、主であるシンジはブラッカーの背中に駆る。

限定的な空中戦、まさか複数の召喚獣、しかも3体もいることは予想できず、シンジの接近を2人は許すこととなってしまった。

【STRIKE VENT】

ストライク

ベント

再び読み込まれたアドベントカード、今度はシンジの右腕に龍の頭を摸した手甲「ドラグクロー」が現出し、その銃口はエリオに向かれる、このクローは格闘の装備であるのと同時に、火球を放つ射撃武器ともなるのだ。

ドラグブラッカーの背中を駆り、速さで翻弄するエリオ相手にあくまで冷静に対処するシンジ、そのシンジの隙を窺いフリードのブラ

ストフレアを準備するキャラ、だがスバルとティアナがリタイアしたのは大きい欠陥だ。

さらに言うならば、2人は戦闘経験はシンジより圧倒的に少ない、そんな2人の焦りの上で思いついた策などすぐに見抜かれてしまう。

ブラッカーの背中中で火球を放ち続けていたシンジに、エリオは決死の思いで接近、槍型デバイスの「ストラーダ」で攻撃を試みるが…シンジは手鏡から今度は剣型の召喚機「ダークバイザー」で防御、一気に振り上げエリオを再び距離をとらせた直後に、一枚のカードを取り出す。

【TRICK VENT】

その電子音声とほぼ同時に、なんとシンジの姿がエリオの目の前で2人へと増えた。

おそらくティアナと同じフェイクシルエット…と予想し、そのまま突撃するエリオであるが、それを阻む存在が1人…ほかでもない先ほど分身したシンジそのもの、つまりこの分身は実態を持っているのだ。

まさか実態を持った分身が出来上がるとはだれも予想していない、現にエリオもいきなりの事態に困惑しているし、キャラもそれに焦り支援魔法の詠唱を開始する。

しかしその背後に迫る影…キャラが詠唱を行う最中、キャラの首に一筋の剣筋が突き付けられた…正体はシンジ、だが向こうでは分身含むシンジ2人がエリオと交戦している…いや、ここでキャラは気づかされた、おそらく向こうで戦っているのがシンジの分身だとすれば…この後ろで剣を突き付けているのがシンジである、と。

こうしてなぜか気配を感じさせず背後をとったシンジによってキャラはリタイア、それに気付き、ひとまずエリオは状況整理のため身をかくまおうとするが、「異質な存在」であるシンジ相手にはそれ

は無意味。

ひとまずビルの陰に隠れたエリオであったが、先ほどからシンジが駆るドラグブロッカーの咆哮が止み、異様に静かなことに気づく。影から様子を窺おう、とエリオが思った瞬間：首に感じる冷たい剣先。

「…これでラスト。」

「そんな…いつの間に…。」

ほかでもない、シンジの持つダークバイザーの剣先だ。

こうしてFW陣の奮闘虚しく、シンジの圧勝となった模擬戦…そして傍観者はそれぞれの行動に移った。

1人は…当事者、シンジ・キドに聴取するために。

1人は…大きな確信を確かめるために。

彼女は…確かに昨日、あの黒い龍を見た、彼女は…確かに、黒い龍を共にする龍騎士を見た。

同業者の証でもある…白いカードデッキを握りしめながら。

今回出てきた召喚機、一見チートに見えるかもしれませんが、一応設定公開。

- ・ 非仮面ライダー用の召喚機で、生身での対人戦闘用。
- ・ 出てくるアドベントカードは、非殺傷レベルまで威力が引き下げられている。（例：マグナギガによるファイナルベント）
- ・ 鏡面があればいつでも召喚可能、もちろん武器としても扱える。
- ・ 黄金のデッキの中に忍ばせてある劣化版の「サバイブ：無限」の恩恵によって一般のバリアジャケット並みの耐久力のあるオーラを発生させる。
- ・ 潜入用として改造されたもの。

このデッキは神埼によって改造された「対人戦闘用」、ようは「相手を殺す目的以外での用途に使うもの」だと認識してください。

…まあ、普通の魔導士相手では強いかもしれませんが、カードを挿入する隙をつければ意外と攻略は簡単なんですよね。

FW陣はただ初戦闘だったのでそれがわからなかっただけで。

…ただ、隙を突こうと攻撃するものは鏡の中からミラーモンスターが襲うかもしれませんか…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9001x/>

OOO Cross Story`s ~ Another World`s/Cross Greeed`s ~

2011年12月18日00時51分発行